505 41

505-41

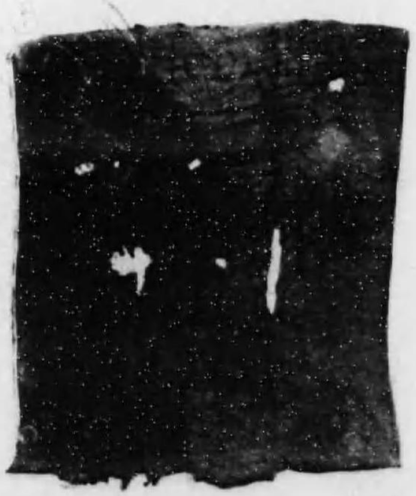
國民の日本史第六篇

時代

吉野 時代

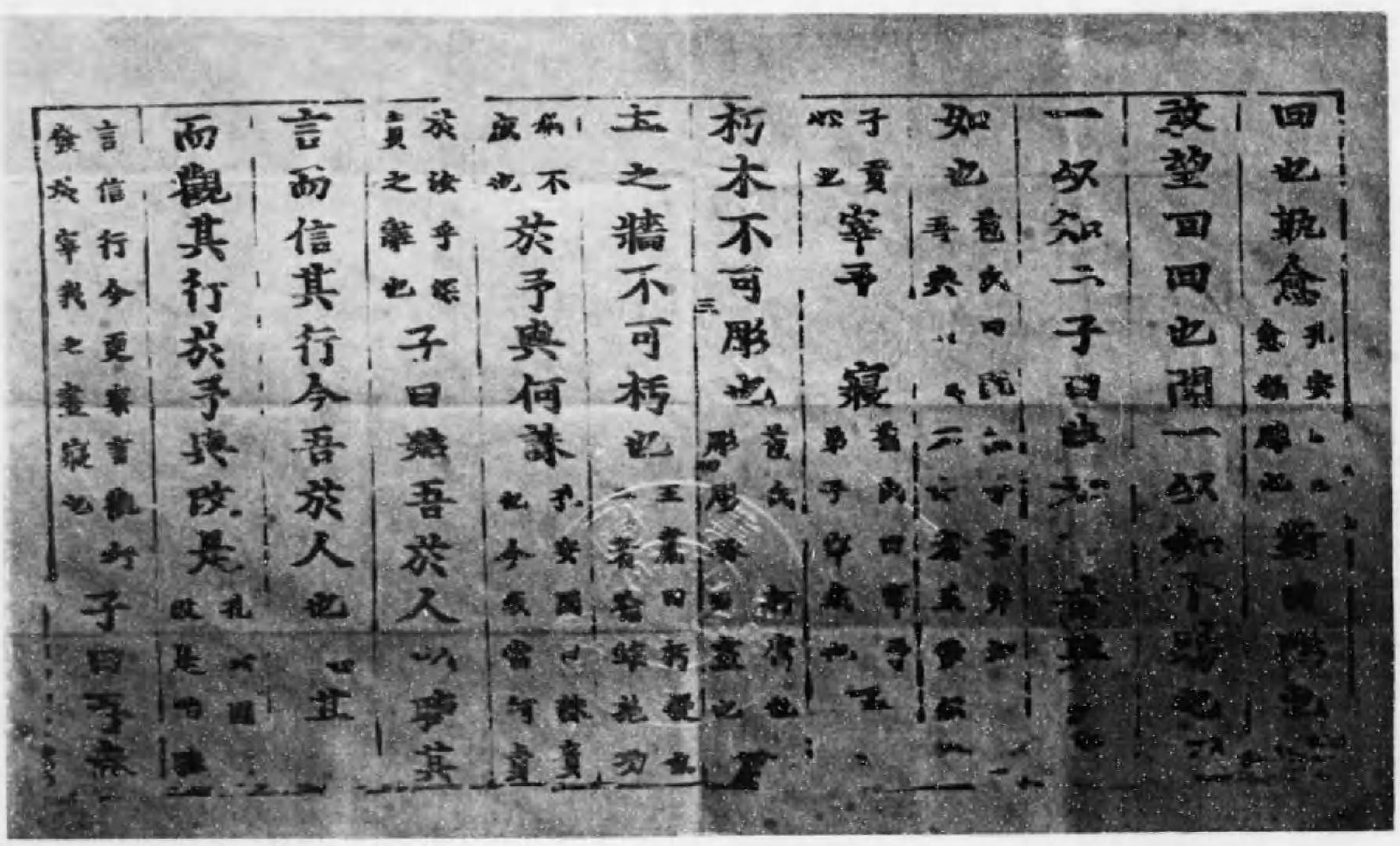
坪内逍遙監修

薄田斬雲著



早稲田大學出版部

大正
12.2.3
内交



回也孰愈
敢望回回也聞一以知十
一以知二子曰弗如也
知也
子貢
宰予晝寢
朽木不可彫也
土之牆不可杇也
於予與何誅
子曰始吾於人也
言而信其行今吾於人也
而觀其行於予與改是
子曰吾未

正平版『論語』

吉野時代に於ける堺の市民の勤王運動は、宮方に取つて一つの大きな慰藉であり、激勵であつた。任俠の觀念が彼等の言行を支配したのであつた。さうした觀念は偶然に湧いて來るものではなく、富の力と教養の力とが背後から推してくれなければ、それは到底得らるべきものではなかつた。それらの日の堺市民の内的生活を象徴するに足るものは、正平年間に堺で出版せられたといふ『論語』の原版の殘つてゐるまである。版木は東京帝室博物館に保存されてゐる。圖は其一面から新たに刷つたもので、堺市民の教養と好尚とを遺憾なく發揮してゐる。

序言

吉野時代は、之を文化史的に觀察すると、彼の西洋中古のそれに比すべきわが國史上の暗黑時代（ダーク・エージ）である。最上位には南北の皇室、中層にはそれに附隨する公家、武家、更に降つては一鄕、一邑の領主までが干戈に依る權力の爭奪を其生存の第一義としてゐた時代なので、全國がまるで蜂の巣を突き崩したやうになつてゐた。だから、社會の進運が一般に沮害され、大多數者の生活が脅威されたのはいふまでもない。すなはち所謂南北朝時代は、之を大體から評すると、絶えず兵馬に蹂躙されてゐた一大荒蕪地に比すべきであるから、そこには文化の華や實を容易く着け得べき餘地が見出だされなかつたのも當然である。勿論、さういふ大紛擾の最中とても、最上流の社會には、さすがに學藝の攻修に獻げらるべき幾分かの閑日月が無いわけではなかつた。それから又、幸ひに戰鬪地域とはやゝ懸け離れてゐた方面——例へば、

五山の如き處――や、權力の爭奪と必ずしも直接關係を有つてゐなかつた階級間には、後の室町時代乃至安土桃山時代になつて著しく發育するやうになつた幾多の文化種子や文化苗が或は蒔かれたり、或は根附きかけたりしてゐた。

試に之を吉野內裡に觀る。彼の北畠親房の如き、學問にも文章にも長じてゐた公卿もあつたし、尙其他の殿上人や武將にも、相應に學問藝術の素養はあつたのである。就中、後醍醐天皇の如きは、其卽位の初めから、大いに學問の興隆に感興を有つてをられた。さうして禪學にも造詣が深く、和歌、詩文にも堪能であらせられたから、事が御志と違つて、あの吉野の山奥に潛居しておはしました間にさへも、決して斯道の奬勵を怠られた次第ではなく、時に詩歌文章の講筵を開かれた事が當時の記錄に見えてゐる。

轉じて之を其反對派の北朝側に就いて觀るも、やゝ同じやうな事が言はれ得る。例へば、足利尊氏の如きも――これは次の室町時代史で話す積りだが――從來想像されてゐた以上に文化的素養のあつたもので、とりわけ音樂の保護者、奬勵者としては特筆すべき事蹟がある。

但し以上は主として時の貴族社會の上にのみいはれ得ることである。之を一般民衆の上に就いて觀ると、學問や藝術が彼等の生活に行き渡つてゐたとはいへない。當代の民衆は、殆ど常に戰亂の間に不安な日夜を送つてゐたから、まだ中々精神的にも、肉體的にも、文化や藝能の方面に表立つて發展を試み得るやうな餘裕はなかつた。假令幾多の文化種子や文化苗が既にこゝかしこに蒔かれたり根附いたりしてゐたにもせよ、それが一般の民衆生活に交涉を有するに至つたのは、早くも室町時代になつてからのことである。要するに、當代の民衆的文化は、いはゞ、冬蟄の狀態に在つたので、殆どまだ歷史の表面には現はれず、隨つて是れぞといふ記錄に至つては、他の時代以上に乏しいのである。

ところが、民衆的文化史料がそんなに貧弱であるのとは反對に、朝廷史、武家史、

戰闘史としての材料は、寧ろ多過ぎる程に傳存してをり、而もおそろしく紛糾錯雜してゐる。のみならず、種々の訛傳や虚説や臆斷や乃至『日本外史』以來、『大日本史』以來の尊皇主義の立場から書かれた國史の誇張や俗説や褒貶が其夥し過ぎる材料に兎角煩はしく纏綿してゐるので、それを釋きほぐすだけでさへも一仕事である。況んやそれらの錯綜した諸事實を巧みに取捨按排して、正しく順序よく且つ活畫圖の如くに叙説しようといふのは、業に既に私に取つては負擔するに過ぎた重荷である。で、最初、私は、私の力の能ふ限り、本史をして在來の南北朝史とは、其文化史的、民衆史的要素を主位に置く點に於て、大分趣を異にしたものたらしめたいと企圖してゐたにも拘らず、つまり、自分で自分の目的を多少裏切らざるを得ないことゝなつてしまつた。すなはち——それは主として私の力量の足らなかつたゝめであるのだが——先づ、どうかして、此頗る跡附けにくい錯綜紛糾した史蹟を、全く國史の初學者にも、容易く且つ精確に、而して若し能ふべくは、十分の感興を持つて理解して貰ふやうにしたいものだと望んだ結果、自然と戰爭の經過や事件の推移が叙事の主位を占めることゝなつて、民衆生活の觀察は勢ひ從位に押下げられざるを得ないことゝなつたのを遺憾とする。從つて、正當には此期に屬せしめて然るべき文化史的もしくは民衆史的事蹟で爰には叙述し得なかつたものも少くない。で、それらは次の室町時代の中で、他の事實と共に改めて語ることにした。

本史を編著するに當つては、坪内博士の指導監修を辱うしたと同時に、種々の點に於て、西村醉夢兄の有力な助言に負ふ所の小少でなかつたことを爰に特記して、感謝の微意を表する。

十一年五月

薄田斬雲識

内容目次

第一章　帝政回復運動の經過

第一節　後醍醐天皇の卽位……一

吉野時代——時代の背景——後醍醐天皇の卽位と其年齢——天皇は傀儡——天皇の學殖才能——後宇多法皇の院政——「女房の口入」——天皇の親政——記錄所の業務——卽位當時の政治狀態——元亨二年の饑饉——天皇の希望——一種の帝王神權說——北條氏に對する反感——帝政回復運動

第二節　持明院統と大覺寺統……二

京都と鎌倉との關係——承久の亂以後の皇位——仲恭天皇——後堀河天皇——四條天皇——後嵯峨天皇——龜山天皇——持明院大覺寺兩皇統の爭議——兄弟の仲違ひ——後宇多天皇——伏見天皇——兩統迭立策——爭亂の種子——兇賊宮中に闖入す——淺原爲賴——當時皇居の不用心——兩統の軋轢——後伏見天皇——後二條天皇——二上皇崩ず

——花園天皇——打續く諒闇に人氣沈滯す——後醍醐天皇卽位の徑路
——花園天皇の述懷——立后——立太子問題——奧州の反亂

第三節　北條氏討滅の計畫……二三

人材登用——日野資朝——日野俊基——文學興張——內管領長崎高資
の失政——資朝、俊基の遊說——無禮講の催し——玄惠法師——關東
調伏の祈禱——中宮御產の祈禱

第四節　正中の變と元弘の變……三一

寺社の勢力——山法師——伊豆、箱根——鶴岡八幡——大名多く寺社
より出づ——公卿、武家、寺社家の三角鬪爭——天皇、寺社の勢力を
利用す——皇室の佛道修行——土岐賴兼の自殺——多治見國長の自殺
——陰謀露見は女の口から——正中の變の結末——北條氏太平を裝ふ
——吉田宗房と萬里小路宣房——新進北畠親房——天皇佛家に結ぶ
——護良親王叡山に入る——南都行幸——叡山行幸——京都物騷——
鎌倉と六波羅——皇子世良親王薨去——吉田定房の密告——俊基の東
下り——「道行文學」——定房の密告についての疑ひ——事件の結末
——阿新丸——海邊の狀況

第二章　北條政府の崩壞

第一節　後醍醐天皇の笠置蒙塵……五〇

兩六波羅の蹶起——帝夜陰に宮中を脫す——張奧に替へて——笠置に
入る——宮中修羅の巷と化す——公卿等捕縛せらる——叡山の第一戰
——大塔宮の脫走——六波羅軍の無能——鎌倉の兵西上す——笠置の
行宮——夢判斷——楠木正成召出さる——『太平記』の假作——楠木氏
は河內の土豪——楠木氏の一門——矢尾顯幸と筒井淨慶——近畿に於
ける土豪の分布——勤王第一人たる正成の地位

第二節　後醍醐天皇の隱岐配流……六三

笠置の戰——足助重範——宮方についた人々——笠置落城——陶山、
小見山の奇計——天皇と藤房との詠歌——天皇、皇子捕へらる——駒
返しと飛鳥路村——天皇の計畫の失敗に終つた理由——光嚴院の踐祚
——寶物の神器——康仁親王の立太子——幕軍の赤坂進擊——變亂全
國に波及す——佐多親經——赤坂城の地勢——正成の赤坂に據れる理
由——正成と築城術——赤坂城の防備——赤坂城の包圍——赤城陷る
——人心の動搖止まず——櫻山慈俊の自殺——後醍醐天皇隱岐配流の

院宣――天皇京都を出發す――兒島高德――國分寺の行在所――延臣の斷罪

第三節　護良親王と楠木正成の活動……八〇

鎌倉幕府の命令行はれず――竹原八郎――伊勢、紀伊と吉野朝との關係――大塔宮般若寺の危難――熊野落ち――大塔宮吉野に據る――正成の金剛山――正成赤坂を復す――天王寺合戰――正成の奇計六波羅勢を屈す――天王寺の『未來記』――天下勤王の軍大いに動く――正成再び天王寺に進む――關東の大軍京師に入る――赤坂又陷る――吉野城陷る――近畿の地形と戰術――播磨の赤松氏――九州の勤王軍――伊豫の河野氏――千早城益々堅し――千早は北條氏の試金石

第四節　船上山行幸……九七

後醍醐天皇の煩悶――帝漁船に乘じて遁る――乾綸倭の御難――佐々木清高――大坂の港に着す――名和庄の豪族又太郎長高――成田入道――天皇を船上山に奉ず――長高決心の動機――二つの動因――家族の覺悟――四圍の形勢――形勢大に振ふ――長年の家系――佐々木清高の敗走――帆懸船の定紋――奇瑞と天運

第五節　勤王軍の進擊……一一〇

山陰、山陽の勤王軍――赤松軍の京師進擊――六波羅軍桂川に防ぐ――光嚴院六波羅に遷る――大塔宮山徒に出兵を促す――赤松軍の退却――忠顯の軍京師に向ふ――忠顯に下せる軍令の要領――皇室と社寺は局外中立――軍隊は無節制――天皇必勝を期す――六條軍は振はず――菊池氏の勤王――阿蘇氏の勤王――菊池武時博多に戰死――九州全部動く――肥前彼杵の義兵――阿蘇軍の敗走――形勢急轉直下の二大因

第六節　六波羅沒落……一二四

名越高家の陣沒――足利尊氏官軍に應ず――足利の家系――「足利」といふ家名の起源――足利の一族――尊氏天下を圖るの因緣――足利氏は北條氏と兩立し難し――足利入道正義と結城日阿――高氏の祖父家時――高氏出陣の際已に叛心あり――高氏綸旨を受く――高氏叛旗を飜す――高氏京都に亂入す――兩六波羅滅亡――光嚴院脫走――時益仲時の最期――嵩氏六波羅を占領す――金剛山の圍み解く――北條治時、同高直――高氏勤王の報鎌倉に達す

第七節　新田義貞鎌倉を陷る……一三七

新田義貞義兵を起す――足利、新田兩氏の關係――高氏擧兵の徑路

——義貞は高氏の命を受けて兵を起せるにはあらず——義貞の鎌倉侵入——鎌倉討滅には高氏の聲望與つて力あり——千壽王は高氏の影像——政權足利氏に歸する端

第三章　建武中興

第一節　後醍醐天皇の還幸……一四七

車駕船上を發す——車駕京師に還幸——護良親王の戰備——護良親王の入京——王子、公卿配所より上洛——諸州探題滅亡——長門探題亡ぶ——北條政府の全滅

第二節　親政の開始……一五五

論功行賞當を得ず——實權は依然武人の手に在り——公卿政治の失體——足利氏制肘策——北畠顯家と義良親王——奥羽と關東との關係——公卿達の嘆聲——舊物破壞の危險——武人は六十餘州の原動力——土地獲得の爭ひ——日本の地勢と武士——公卿達の成金振り——朝廷の財政難

第三節　新政の失敗……一七一

人心疾く離反す——庄田院令——京都の亂脈——二條河原の落首——建武の新政は空位の繫ぎ——護良親王——北畠親房——護良親王尊氏を圖る——尊氏親王を幽す——中央政府の組織——地方制度——守護と國司の爭闘——諸國の豪族宮方に反抗す——制度備はるも實權なし

第四節　遁世の流行……一八七

藤房の遁世——君の勸氣を棄れる遁世者——亂世を厭つた遁世者——藤房の戀物語——南北朝時代の遁世思想——失戀の遁世

第四章　宮方と武家方との抗爭

第一節　足利尊氏の謀叛……一九五

當時の戰爭狀態——叛徒各地に起る——高時の弟泰家——北條時行鎌倉を襲ふ——護良親王害せらる——親王は尊氏の敵に非ず——護良親王奥州に遁るゝの說——尊氏東下時行を滅す——「二十日先代」又は「中先代」——尊氏朝命に背いて鎌倉に據る——尊氏と義貞との反目——尊氏義貞の罪を數ふ——尊氏討伐の勅令——義貞東下竹下に敗る——義貞天龍川の架橋——尊氏京師に迫る——京軍敗れ天子坂本に遷幸——結城親光の死——北畠顯家の尊氏追尾——尊氏の敗軍——尊氏

九州に奔る——尊氏の持明院統奉戴の計略

第二節　足利尊氏の九州經略……二一三

尊氏九州に入る——九州の形勢——菊池武敏太宰府を陷る——尊氏多々良濱の決戰——尊氏瀨戸内海權を握る——宮方に海上權なし——細川定禪の活動——義貞の四下延引——勾當内侍——義貞に對する諫言

第三節　湊川の遭遇戰……二二一

赤松氏急を尊氏に告ぐ——尊氏直義海陸共に兵を進む——尊氏の兵船内海を蔽ふ——正成の獻策——正成兵庫に出陣す——櫻井の訣別——正成湊川に戰死す——天皇叡山に遷幸——京都の市街戰——地方の形勢——四國方面の形勢

第四節　室町幕府の開始……二三〇

尊氏光明天皇を擁立す——尊氏後醍醐帝を幽す——中興の大業挫折の原因——勤王軍の三種——勤王主義——反政府主義——利己主義——天皇の後圖——神器讓渡——幕府の開始——建武式目——尊氏寬大の行賞——尊氏の寬大の賞罰——後醍醐帝吉野に潛幸——天皇吉野に入る

第五章　吉野朝廷の建設

第一節　兩朝分裂と其社會的意義……二四二

兩朝の分立——宮方の動靜——義貞の北國經營——顯家に勅書を賜ふ——金崎城攻擊——杣山の瓜生氏——瓜生保の母——金崎城陷る——宮方は山嶮に據り、武家方は海岸に據る——伊勢の大湊——兩朝分立の社會的意義——國家解體の意に非す——國家統制の變遷——全國兩黨に分る：東國の兩黨——中部の兩黨——九州の兩黨

第二節　北畠顯家と新田義貞の死……二五九

奥州軍大和に入る——北畠顯家の戰死——義貞の北國經營——脇屋義助の出動機に後る——藤島の戰——義貞の戰死——義貞戰歿の狀況——義貞亦尊氏の敵に非す

第三節　後醍醐天皇の崩御……二六六

四親王の分遣——皇室の神威——北畠親房常陸に入る——誠忠者結城

宗廣——花園宮四國に向ふ——懷良親王四國に向ふ——西國入りの道筋——紀州海岸より讃岐へ　五條賴元——伊豫に着す　忽那島に滯在——九州入の計畫——後醍醐天皇崩御——南朝の皇基已に堅し

第六章　將軍政治の復活

第一節　後村上天皇の卽位……二七七

後村上天皇の卽位——楠木正行の參內——當時南朝側の形勢——天下の豪族利害に依て動く——武士向背の動機——南北兩黨分立の根元深し——兩黨全國各地に對峙す——北畠親房の小田城時代——關城の風雨——顯信の陸奥經略——宇津峰城——北畠父子連絡せず——宇津峰宮陸奥に入る——顯信出羽に遁る——守親陸奥國司となる——宮方の陸奥經營成らず——懷良親王九州に入る

第二節　天龍寺建立……二九二

後醍醐天皇追幕の紀念——天龍寺造營の由來　天皇、夢窓、尊氏の關係——夢窓尊氏の信賴を受く——禪宗の發展——大燈國師——關山禪師——兩朝分立の裏面觀——天龍寺船の由來

第三節　幕府の宗教政策と平和政策……三〇一

天龍寺に對する南都北嶺の反抗——足利氏の對寺院政略——叡山の禪僧反對——上皇勅諚を叡山に下す——天龍寺の結構——尊氏兄弟佛事を營む——天龍寺供養——兩上皇天龍寺に行幸——尊氏の覇業成就の凱旋式——尊氏追加式目を發布す——武家の暴慢、公卿の零落

第四節　京都市民の生活狀態……三一三

戰陣に支へらるゝ室町幕府——疫病流行——直義傷寒を病む——京都武士の狼藉——武士上皇の鹵簿を犯す——土岐、二階堂二氏の處罰——京都に於ける公卿と武士の乱鬪——尊氏征夷大將軍となる——年中行事——正月——二月——三月——四月——五月——六月——七月——八月——九月——十月——十一月——十二月——『徒然草』に現はれたる年中行事の一例

第七章　吉野朝の興隆

第一節　宮方の勢力回復運動……三三一

宮方の勢力稍回復す——親房京都回復の計畫——楠木正行の勇戰——正行、吉野行宮に詣りて訣別の拜謁をなす——四條畷の戰に正行討死——後村上天皇賀名生に遷る——辨內侍の美談——楠木正行、內侍を救ふ——辨內侍の後生——師直、孟の割れてそ出る雲の上——高師直師泰兄弟戰勝を裝ふ——師直の不倫——師直の人妻を姦することについての會議——女房は主君からの預り物——婦女は一個の動產——鎌倉女と京女——婦女處世の自衞策——東國人の素朴と京都人の修飾——京女は諸國武人の犧牲——顯冶高貞の橫死——宮女の引出物

第二節　足利氏の內訌……三四二

九州の宮方——尊氏直義兄弟の不和——執事高氏の專橫——高氏の系圖——上杉、畠山兩氏高氏を圖る——僧妙吉——足利直冬長門探題となる——天變地異——四條河原の田樂騷動——天狗の仕業——田舍武士のお祭見物——無學な武士の迷信の一例——直義の陰謀發覺——師直直義を屈伏せしむ——直冬の西國入り——阿蘇氏の反叛——直義黨の沒落——九州三つ巴の形勢——直冬少貳と結托す——征西宮の運命開く——直冬西國中國に威を振ふ——尊氏師直を隨へて九州に發向す——直義京都を脫して河內に據る——直義南朝に降る——直義錦旗を奉じて京都に迫る——尊氏師を旋して京都に入る——師直兄弟亡び尊氏兄弟和睦す

第三節　吉野、京都、兩朝の合一……三六六

一色範氏鎭西探題を罷めらる——直冬征西宮と和す——征西宮筑後親征の機運——直義南北の和議を堤起す——足利氏の內訌熄まず——直義東寺に據つて自ら守る——尊氏父子の直義對抗運動——幕府の內訌は南朝の好機——尊氏吉野朝に降る——後村上天皇一慶天下を統一す

第四節　京都回復運動の失敗……三七五

尊氏直義を毒殺す——京都朝の廷臣賀名生に伺候す——後村上天皇賀名生を八幡に進む——後村上天皇敗走——第三回京都回復の失敗——京都の荒廢——京都堂社宮殿の燒失——『徒然草』の一節——關東の新田黨亦敗北——後光嚴院立つ——女院の政——異例の卽位——由名師氏の叛亂——宮方軍京都を占領す——尊氏後光嚴院を奉じて京師に凱旋す

第八章　九州に於ける宮方の活動

第一節　宮方の中心勢力としての菊池氏……三九〇

九州の形勢――直冬、長門に入る――形勢全く一變す――九州の官軍振ふ――菊池氏勤王の精神――武光探題一色氏を破る――武光龍種を擁護す――九州の武家方

第二節　征西將軍府の盛運……三九七

大友氏時叛く――小貳氏亦背く――征西宮筑後川に進む――筑後川の大捷――九州の地形――征西宮太宰府に移る

第三節　征西宮の東上計畫……四〇四

征西宮の武威四國に及ぶ――伊豫の河野通盛――河野通朝――細川賴之の來攻――河野通堯歸順す――征西宮東上の計畫――將軍之を詮議す――東上の軍瀨戸内海に敗る――瀨戸内海權は足利氏覇業の本――細川、大内二氏内海を制す――征西宮制海の策――後村上天皇の崩御――後村上天皇と懷良親王

第四節　懷良親王と支那との關係……四一三

懷良親王、東上計畫を抛つ――懷良親王の心理變化――親王の寫經――明使太宰府に來る――支那貿易の利――朝鮮に於ける倭寇――支那に於ける倭寇――明使趙秩來る――征西宮の勇斷――海賊の由來

――吉野朝の亡命者海賊群に投ず――倭寇の總師北畠師清――河野十八家

第九章　武家方の勢力充實

第一節　親房及び尊氏の死……四二九

實力に於いては宮方が劣勢――吉野朝の柱石親房歿す――後村上天皇行宮を天野に移す――山名時氏京師を陷る――直冬京都に入る――宮方の諸將八幡に出陣す――宮方軍漸次に疲弊す――鎭西獨り存す臣武光――一色氏窮して京師に還る――將軍尊氏の死――尊氏の死は室町幕府に影響なし――尊氏成功の理由――宮方亦進攻の勢なし

第二節　武家方の内訌と宮方の疲弊……四四一

新田義興矢口の慘死――竹澤右京亮――『神靈矢口渡』――將軍義詮河内を征す――紀伊に於ける畠山軍――與長親王の裏切り――楠木正儀金剛山に匿る――武家方諸將の内訌――後村上天皇駕を住吉に進む――畠山國清逃亡窮死す――細川清氏京都朝に叛く――佐々木道譽と細川清氏との抗爭――宮方軍又京都を陷る――武家方の内訌――宮方の疲弊

第三節　楠木正儀の人物　……四五一
楠木正儀京都朝に降る——正儀時勢を達觀す——阿王の捕話——正儀の兩朝合一策——正儀の深謀——正儀再び歸順す

第四節　征西將軍府の衰亡　……四六一
今川了俊鎭西探題に任ぜらる——今川氏の家系と經歷——太宰府陷る——高良山の牙營——菊池武光の死——菊池氏肥後に退く——了俊水島の陣に少貳冬資を誘殺す——了俊の心事を疑うて人心離反す——菊池武朝、了俊を水島に破る——了俊の挽回策——懷良親王矢部に退隱す——了俊千布總打に大捷す——良成親王詫磨原に了俊を破る——滅せんとする燈光——了俊菊池城に迫る——菊池本城陷る——懷良親王矢部に薨ず——良成親王亦矢部に薨ず——矢部城址——五條氏の後裔——菊池氏の餘榮

第五節　吉野、京都、兩朝の合一　……四七八
吉野朝の頽勢支へず——足利氏の基礎已に堅し——全國に散在せる宮方諸族——下野の小山氏——楠木正儀の行方不明——大內義弘兩朝合一を策す——正平の合一計畫失敗——和睦の條件——吉野朝、京都朝に合體す

第十章　時代の文化

第一節　二つの大きな時代思潮　……四八四
思想變化の動因——勤王主義、努力主義——累代、全族の連續的、共同的行動——勤王主義の根柢——勤王、努力兩主義の結合——伊勢の北畠氏——楠木正元、正勝——小山犬若丸——新田義則の最期——後龜山上皇の吉野朝再興の院宣——北畠滿雅小倉宮を奉じて兵を擧ぐ——高秀王の亂——自天王、尊雅王の擧兵——應仁の亂に於ける日尊——楠木氏の後裔——日本史上の奇蹟——利己主義、個人主義

第二節　時代の文學、殊に和歌　……四九六
吉野時代の文化相——貴族と和歌——宗良親王——和歌を詠じて自ら慰む——『新葉和歌集』——『李花集』——吉野時代の歌集——『新葉集』の特色——自由な獨創の境地——實感——運命の樂觀——民間の歌集——武士、庶民の文學——連歌宮中に入る——散文——史的述作『太平記』——『吉野拾遺』——『難太平記』と『梅松論』——『神皇正統記』と

『職原抄』——『徒然草』——吉野時代の代表的作物——僧侶の文學

第三節　工藝の進歩……五〇七

戰亂の影響——刀劍——正宗——鎌倉鍛冶——正宗以後の名ある劍工——日本刀は唯一の貿易品——皮革工業——熟皮——「御免革」——菖蒲革——正平革　被服材料——支那貿易及び倭寇の影響——周防の機織工業——堺に機場を開く——春慶塗——漆器工業——根來塗——吉野根來——「金輪寺」——建築——觀心寺模本堂——未完成の三重塔——建水分神社——時代の藝術の特性

第四節　時代を作つた眞正の動因と結果……五一五

眞正の動因と結果——時代の代表は北畠親房——『神皇正統記』——國家觀——帝王觀——臣民觀——吉野朝天皇は正統——皇位の標徴——宮方の勤王論の根柢——『關城書』——死後までも努力——勤王運動の眞正の結果

圖畫目次

圖版

正平版『論語』……卷頭
楠木正成書狀……八〇—八一
後醍醐天皇宸影……一六〇—一六一
楠木正成所用鎧及び鞍……二三四—二三五
吉野宮と楠公首塚……二七二—二七三
足利尊氏畫像……三五二—三五三
北畠親房父子の筆蹟……四三二—四三三
觀心寺本堂と三重塔……五一二—五一三

插圖

後醍醐天皇肖像……三
花園天皇宸翰……二〇
楠木正成木像……六一
院庄兒島高德遺跡……七八
村上義光墳墓……八三
赤松則祐像……九三
菊地神社……一一〇
稻村ケ崎……一四三
大塔宮令旨……一五一
後醍醐天皇(問)大燈國師(答)……一七三
二階堂谷土牢……一八一
足利尊氏木像……一九六
新田義貞下知狀……二〇六

湊川古戰場……二二六
吉野山(遠く見ゆるは如意輪堂)……二四三
撫津阿倍野神社……二六〇
別格官幣社藤島神社……二六二
五條賴元書狀……二七二
北畠親房筆蹟……二八二
大燈國師……二九七
楠木正行自署……三二五
足利直義筆蹟……三五二
後光嚴院宸翰……三八七
菊地武光花押……三九五
懷良親王御筆『梵網經』奧書……四一五
山名時氏自署及花押……四三三
楠木正儀の筆蹟……四四六
菊地武光墓……四六八
菊地武政花押……四六七
菊地武朝花押……四六七
八代宮……四七四
後小松天皇御自署……四八一
後龜山天皇宸翰……四八九
瓊子內親王御墓……五〇三
正平革……五一〇

吉野時代

第一章　帝政回復運動の經過

第一節　後醍醐天皇の卽位

吉野時代といふのは、延元元年から明德三年に至るまで五十六年の間、吉野に行宮があつて、そこで政治の行はれてゐた時代を指すのである。これまで「南北朝」といはれてゐたのは卽ち此時代で、其期間はさして長くはなかつたけれども、其間には目的の遂行に向つて突進する人類の努力の歷史が繰り擴げられて、活動寫眞のフイルムのやうに、廻轉し〳〵て止まない勇猛壯烈の悲劇が見られる。それは詩の如く、樂の如く、はたまた繪の如く、國史上の偉觀であり、同時に奇觀でもあつた。かうした歷史は、日本民衆のそれでなければ、多く比類を見出すことの出來ない性質のものであつた。

時代の幕は後醍醐天皇によつて開かれる。時代の歷史を知らうとするには、延元元

年から更に十九年を溯つて、天皇が卽位せられた時のことを窺はなければならない。此十九年間は、いはゞ吉野時代を作つた近い背景である。

後醍醐天皇の卽位と其の齢

後醍醐天皇は、諱を尊治といひ、後宇多天皇の第二皇子で、母は談天門院といつた。卽位の時には三十一歳であつた。三十一歳は所謂「而立」の歳で、人物の本當の活動の始まる年である。向う見ずの青年の客氣が稍〻薄らいで、しかも充實した渾身の意氣が、動もすれば外に溢れんとする壯年の初めである。かうした頃には、眞に老成した思慮分別はいくらか缺けてゐるとしても、そこに疑懼と躊躇とがない故に、事を爲すには當つては都合のよい年齢である。そこには勇猛心があり、決斷心があつた。胸中に祕められた計畫、常に憧憬れてゐた理想が、實行に移され、實現に着手せられるのには申分のない人生の花の盛りであつた。其有爲の年齢に、有爲の天皇は高御座に昇られた。

天皇は傀儡

溯つて歷史を觀ると、攝關政治の時代に於ても、將軍政治の時代に於ても、天皇はたゞ虛器を擁して玉座に卽いてゐられたのみであつた。表面は神孫と崇められながら其實は官僚若しくは武家の傀儡であつて、殆ど自己の意志を遂行することが出來ぬ地位にあつた。從つて自分で大權を握らうといふ藤原氏や源氏や北條氏やは、孰れも幼弱な天皇の在位を自分達の便宜とした。それ故多くは十歲にも滿たぬ天皇を立て、年を經て漸く世事を解するやうになられれば、早くも讓位を迫るのが例であつた。獨立の意志を有した主權者が二人あつては困るところから覇者は常に幼沖の天皇を奉ずることにしたのである。然るに後醍醐天皇は壯年にして卽位せられた。それが爭亂の本となつたのは偶然ではない。加ふるに、天皇は覇者の傀儡たるを甘んずるが如き凡庸の資ではなかつた。天皇は國史の上でも屈指すべき英主であつた。鞠を蹴つたり和歌を詠んだりしてゐるだけでは滿足する事の出來ない性質であつた。——雲上より大地に下つて親しく大八洲をしらさなければ承知の出來ぬ、人間としての根柢に立脚した意志堅固の覇氣あり、大望あり、而して經營、畫策、進取、改善の氣象に

後醍醐天皇肖像

富まれた素質であつた。

天皇の學殖才能

天皇は單に其學殖から觀ても、優に當時の學者をして舌を捲かしむべき教養を有つてゐられた。殊に禪學に通じ、斯道に於ては匹敵するものが少いほどであつた。其事は當時盛名のあつた禪僧大燈國師と天皇との間に行はれた禪問答が、紫野大徳寺に遺つてゐてそれを證明して居る。天皇は單に學問に於て專門家を凌ぐ素養を有してゐられたのみではなく、詩文にも巧みであり、遊藝にも堪能であり、殊に笛には長じてゐられた。それらも勿論天皇に光りを加へたけれども、天皇をして眞に歴代の水平線上に頭を抽かしめたものは、其縄墨に律せられない英氣であつた。天皇は自ら信ずること甚だ厚く、古來の典禮、格式、傳統の如きも、其自信力の前には風前の塵と吹き飛ばされた。そこで、反對黨の公卿らは、天皇を狂者と呼び做した。けれども、天皇は批評を畏れて、徒らに古を師とし、舊套に包まれてゐる氣にはなれなかつた。天皇は平生近侍の臣僚に向つて云はれた。「今の例は昔の新儀である。朕の新儀は後世の例となるのである」と。眞にこれ革命家の言であつた。

後宇多法皇の院政

かうした性質の後醍醐天皇が新たに帝位に卽かれたのであるから、京都の空氣は一變せらないでは居なかつた。けれども天皇が位に卽かせられた時、從來の慣例として父の後宇多法皇が院政を行はれたので、天皇は直ぐに政權を握ることが出來なかつた。後宇多法皇には朝政一新の希望があり、拔擢して院政に參與させたが、當時の公卿中に傑出した人物萬里小路宣房を擇んで官職を授くること、評定衆と傳奏とを精選することなどの項目があつた。何も積極的に發展を策したといふ譯ではないが、さうした案が後代の記錄に留められたところから察すると、其頃に於ける宮廷の無能と腐敗との大きかつたことが思ひやられる。當に在つては人の爲めに官を設けたり、因緣で無能者が要職を占めたりすることは、別に珍らしいことではなかつた。宣房の其後の建白の中に「女房の口入は殊に愼まれたい」といふ一箇條があつた。女性が獵官運動の手足に使はれ、裏面から權力者を牽制したことが多かつたので、かうした建白が出されたのであつた。恐らく宣房は全力を盡して政治の改善に努力したであらうが、後宇多法皇は既に位を辷つてゐられたのであるから、到底新人の意氣を以て事に當ることが出來る筈はなかつた。新酒は新嚢に盛られなくてはならない。積弊に包圍されてゐる法皇を擁してゐては、宣房が如何に新政を行はうとしても、更始一新の實の擧らう筈がなかつた。然るに眼前に

「女房の口入」

は新進氣鋭の英主後醍醐天皇が控へてゐられる。宣房が天皇に望を囑するに至つたのは當然であつた。宣房は屢〻後宇多法皇に向つて院政の危道であつて、弊害の多いことを說いたので、法皇も遂に其非を覺られ、且つは後醍醐天皇が已に三十歲を越え、殊に非凡の才德を備へてをられることを知つてゐられたから、宣房の諫めを納れて政を後醍醐天皇に還すとにせられた。そこで天皇は後三條天皇の例に倣つて、朝廷に記錄所を設けて政治を親裁し、萬里小路宣房、北畠親房、吉田定房ら三房といはる〻人々、及び日野資朝、日野俊基らの俊才を拔擢して政治を補佐せしめた。

天皇の親政

記錄所の業務

しかし、日本六十餘州の政治が、後醍醐天皇の記錄所で悉く裁斷せられたといふ譯ではない。鎌倉には北條氏の幕府あり、京都には幕府所管の兩六波羅府があつて、前者は天下の政治を行ひ後者は朝廷の監視をしてゐたから、朝廷の記錄所で行ふ仕事といふものは、僅かに寺社に關はる事件に過ぎなかつた。つまり、朝廷は只寺社行政のみを取扱つたやうな形であつた。初め源賴朝が諸國の警察權を握り、尋いで兵馬の權を其掌中に收めて、遂に幕府が開かる〻に至つたのであるが、皇室[五]の御料を始め、寺院、神社、公卿達の領地が、犬牙錯綜の形で武家の領地と混在してゐたので、幕府では守護地頭を定めてそれらを支配させたので、領家職と地頭職との間に絕えざる交涉問著が起つた。そこで、幕府は關東諸國を直轄となし、其以外には、京都の兩六波羅府をして朝廷の評定官と交涉してそれらのことを裁決せしめた。皇室の御料地や公卿らの領地には混雜が少なかつたが、寺社の領地には問著が甚だ多かつた。其問著の多い寺社領の紛議を朝廷の記錄所で取扱つたのであつた。だから後醍醐[六]天皇が記錄所に親臨せられたからとて、下層社會の庶民が直ちに其恩惠に浴したといふ譯ではなかつた。

卽位當時の政治狀態

當時の政治の實權は全く鎌倉幕府の手にあつた。鎌倉幕府は中央政府で、上に將軍があり、下に執權があつて、司法、行政、軍事の三大統治機關を運用してゐた。地方政治は平安時代の國衙から獨立して、大名を主とした一種の政府で行はれた。卽ち諸國には守護が置かれ、莊園には地頭が置かれ、それらはみな幕府の命令によつて活動し、朝廷の命令は毫もそれらの上に加はらなかつた。それ故、將軍乃至執權の人格は、庶民生活に直ちに影響することはあつても、天皇の人格が感化を及ぼすやうなことはあり得なかつた。

元亨二年の機運

しかしながら、人格の力は偉大であつた。英明な後醍醐天皇が卽位せられると、庶民の間には、いつとなく、また誰れいふとなく、其德を讚美する聲が聞えた。大きな人格は、非常の時には其光を投射せずには居なかつた。それは元亨二年——天皇が政

を親らせられた翌年の夏、大旱魃かあつて水が涸れ、地が裂け、農作物が枯死したので其年の收穫は殆ど皆無だといふので、米價が騰貴して錢三百文で一斗しか買へないといふ有樣であつた。飢ゑた人々が田園に滿ち、都會には多くの行倒れ者が現はれた。天皇は朝餐の料を節して、それを窮民の賑恤に流用されたと云ひ傳へられるほど飢饉の救濟に心を碎かれ、檢非違使別當に命じて、一方、富裕の者が價格釣上げの爲めに買ひ占めてゐた米穀の量を檢査せしめ、他方、二條通りに假屋を建てゝ、公定相場を定めて米穀を廉賣せしめたといふ。

かうした風に、天皇の實行的力量は、時に臨んで頭脚せずには居なかつた。天皇は殿上人式の遊藝の達人、詩歌文章の堪能者たる名譽を以て滿足することが出來なかつた天皇は彼岸的な理想家、現狀に安住することの出來ない翹望者であつた。向上の一路を辿つて、理想の境地に進まねば止まぬ英邁の天資を有つてをられた。此天資が缺陷の多い社會的環境に育まれて、次第に其輪郭を大きくし、其內容を充實させて、そこに「帝政回復」といふ大きな希望が現はれた。それは實に後醍醐天皇の前途に横はつてゐる最大最高の題目であつた。小休みなく作用する天皇の精神は此題目の爲めに甚だしく緊張した。無論歷代の天皇の中には、此題目に逢着せられたものもないではなかつたが、それが非常な危險性を帶んでゐた爲めに、自重して實行せられないまでゝあつた。後鳥羽上皇の承久の失敗は、其後の諸天皇をどれほどに牽制したか知れなかつた。然るに時勢は回轉して幕府の基礎が搖ぎ出した。敏慧な天皇は此點に着眼せられ恐しくもありまた危險でもあるけれど、一旦其恐ろしさと危險とを冒さなければ、帝政回復の好機會を逸してしまふ憂れがあると思はれた。天皇の心は逸つた。そして北條氏討滅の計畫が進められた。

天皇の希望

一種の帝王神權說

一體、傳統的に觀れば、日本民衆の頭腦に宿つてゐた政治思想は、一種の帝王神權說であつて、それはローマ帝國に源を發した歐羅巴の帝王神權說(Divine Right of Kings)よりも、もつと宗教的色彩に富み、もつと力強い性質のものであつた。天皇は神裔であり、皇位は神裔でなければ繼承することが出來ないといふ考へは、我邦に於いては殊に意味のある考へであつた。此考へから「天に二日なく、地に二王あるべからず」といふ信仰が生れて、一般民衆は、それらの日にも、原始時代の如く、天皇を尊崇し、渴仰して、近く見れば目が潰れるとまで考へてゐた。然るに武家政治が成り立つてから、政權は全く武家の手に移り、天皇は全く虛位を擁する傀儡となつてしまつた。源氏が亡ぶれば、政權は朝廷に戻つて來るといふ推想も外れて、陪臣であつた北

北條氏に對する反感

條氏が引續き政權を私するとになつたので、京都ではどうかして之を回復したいといふ希望を持つて居られ、民衆の一部もまた異樣の感じを執權政治に持たずには居られなかつた。然るに後鳥羽上皇の失敗以來、幕府の基礎は益〻鞏固になり、反對に皇室の權威は愈〻衰へる結果を見た。北條氏の皇位に對する態度は、けれども、餘りに過酷であつた爲めに——三上皇を僻遠の地に流したといふやうなことがあつた爲めに、一般民衆の同情は皇室に向けられ、北條氏に對する反感の情が年ましに高まつて行つた。弘安の役以後、幕府の財政が紊れ、失政が相尋いで現はれるやうになつてから、黒い思想の潮が社會の裏面を潛つて流れた。傳統的な帝王神權說(八)は俄かに頭を擡げ、天皇に對して弓を彎くものは神罰(九)を蒙つて破滅するといふ考へが民衆の頭腦に湧き始めた。武家の中にすらさうした考へを懷いてゐるものが出て來た。況んや皇室に關係の深い公卿の間では尙更であつた。

帝政回復運動

さうした皇室中心主義の思想を持つた人々の間に人と爲られて、人一倍敏慧であり聰明であつた後醍醐天皇が、隱微の間に歷代の天皇が懷抱せられた帝政回復の大理想を實現せられようとしたのに不思議はなかつた。天皇の北條氏討滅計畫は、長い間胸裡に祕められてゐたが、北條高時の失政はそれに薪を加へて、それは遂に火となつて燎んに燃え上つた。燒き盡さねば止まないのが火の本來の性質であつた。加ふるに立太子の問題が起り、幕府では讓位を迫る色までも見えたので、天皇は遂に志を決して起たれた。胸中の祕密は外面にさらけ出され、帝政回復の目的は具體化され、北條氏討滅といふ乾坤一擲の大運動となつては現はれた。

京都と鎌倉との關係

（一）『神皇正統記』參照。
（二）『御百ヶ日願文』參照。『太平記』には琵が上手であつたと書いてある。
（三）『梅松論』參照。
（四）藤原宣房『萬一記』。
（五・六）文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』。
（七）『太平記』卷二『關所停止の事』、及び『櫻雲記』卷之上參照。但し『舍英集』では、其年が元德二年となつてゐる。
（八）『徒然草』參照。
（九）『太平記』參照。

第二節　持明院統と大覺寺統

後醍醐天皇が北條氏討滅の計畫を立てるに至つた理由を、本當に知らうとするには、勢ひ遡つて承久の亂以來の京都と鎌倉との關係を知り、殊に持明院統と大覺寺統との

承久の亂以後の皇位

仲恭天皇
後堀河天皇
四條天皇

後嵯峨天皇

爭闘を知らなければならぬ。

承久の亂は、後鳥羽上皇が北條氏を傾さうとして起された戰爭で、いはゆる第一回の帝政回復運動ともいふべきものであつた。ところが戰爭は宮方の敗北となり、上皇は北條義時の爲めに隱岐に流され、土御門、順德の上皇もまた土佐、佐渡に流されたといふ有樣で、皇室の權威は全く地に墜ちてしまつた。此時皇位にあつたのは、年四歲の仲恭天皇であつたが、北條氏の爲めに廢せられて、後鳥羽上皇の兄で、薙髮して持明院にゐられた守貞親王の子が擁立せられた。それが卽ち後堀河天皇であつた。後堀河天皇は貞永元年に位を四條天皇に讓り、四條天皇は在位十年、年僅に十二歲で崩ぜられ、直系の嗣がない爲めに皇位繼承問題が起つた。そこで、其時の執權北條泰時は、之に干涉して、土御門天皇の第二子邦仁親王を皇位に卽かせた。それは土御門天皇が承久の亂に後鳥羽上皇に身方しなかつたのを德としたもので、前攝政九條道家らは、みな順德天皇の皇子忠成親王を皇位に陞らせようとしてゐたのに泰時は強ひて邦仁親王を擁立したのであつた。それが後嵯峨天皇で、其の御年は二十三歲であつた。かく後嵯峨天皇は全く北條氏の力で立たれたのであるから、深く北條氏を德とし、政治萬端悉く之を北條氏に諮られた。天皇は在位僅か四年で、位を四歲の太子久仁親王に讓つて自分は院中で政を聽かれた。此天皇は後深草と申し、正元元年に位を皇太弟恒仁親王に讓られた。それは後嵯峨上皇が恒仁親王を深く愛せられた結果に起つたとで、讓位は本來後深草天皇の喜ばれないところであつた。恒仁親王は卽ち龜山天皇で、後深草天皇との間が圓滑を缺き、これから遂に忌はしき皇統の爭ひが起つた。

龜山天皇

持明院大覺寺兩皇統の爭議

以下少しく其歷史を述べよう。文永九年二月、後嵯峨上皇の崩じられた時、其遺詔[一]には、「第一の皇子(後深草天皇)は第一に卽位あるべきが、其の子孫には百八十箇所の領地を與へて永く皇位に望を絕たしめるがよい。次には第二の皇子(龜山天皇)が帝位に卽き、其子孫が代々皇位を繼承するやうにしたい。之は仔細あつての思召である」とあつたが、この「仔細」といふのは何の事であるか分らないが、嫡男にも增して、次男の方を可愛がられたといふほどのことであらう。事に依ると、溫和な後深草天皇の血統を皇位に上らしめず、有爲英邁の龜山天皇の血統を永續せしめて、其中に帝政回復の機會を作らうとせられたのかも知れない。勿論後嵯峨天皇は北條氏に擁立せられたから、生前關東に對しては反抗がましい氣分は示されなかつたが、之を皇室對幕府の關係から見ると、天皇とても承久の際に於ける北條氏の橫暴に對しては、心中矢張り無限の憤恨があつたと推測せざるを得ない。そこで英明なる龜山天皇の血統を位に

兄弟の仲違ひ

後宇多天皇

伏見天皇

兩統迭立策

卽け長く相承けしめようとの叡慮であつたのであるまいかとは、史家の一說である。

後嵯峨天皇は、かうした遺詔と共に、昔から宮中に祕藏されてゐた坂上田村麿の劒といふものを龜山天皇に傳へられたと言ふ。そこで後嵯峨天皇が崩じられた後も、萬機は正統の後深草天皇に決せられずして、却つて弟の龜山天皇の方で決せられる有樣となり、玆に端なくも兄弟の間に仲違ひが生じた。其中、文永十一年正月、龜山天皇は位を八歲の皇子世仁親王に讓られた。それが後宇多天皇で、上皇は院中で政を聽かるるとになつた。後深草上皇はこを見て不平抑へがたく、意を祕かに北條氏に傳へられた。執權時宗はかくと知つて居仲調停の勞を採り、「後深草上皇には何等の失德もなく、且つ嫡流のとでもあるから、此次ぎには其皇子を皇位に上すが宜しからう」と云つて、後深草の第二皇子熙仁親王を皇太子とした。かうした次第で、弘安十年十月、後宇多天皇は强ひられて位を去り、皇太子熙仁親王が立たれた。それが伏見天皇である。後深草上皇は、これで積年の鬱憤が霽れた譯であるが、其代りに後嵯峨天皇の遺詔は反古となつてしまつた。

さてかうなると、後深草の血統は俄かに强力となり、伏見天皇は第一皇子胤仁親王を立て、皇太子となし、益、自統の地盤を固くするとに努められた。此血統には從前から百八十箇所の領地があるのに、龜山の血統には領地とてもなく、加ふるに皇位を失つて、近い將來に頭を擡ぐる望みもなかつた。然るに後深草の血統では、關東の北條氏に向つて、「龜山上皇は、常に承久の怨みを報じたいといふ志を持つてゐられる」と告げたので、さらでだに警戒の目を離さぬ北條氏は、薪に油を注がれたが如く疑ひ、一層龜山の血統を除外視するやうになつた。伏見天皇が皇子を太子に立てられる時にも、北條氏が出來るだけ力を添へたのはそれが爲めであつた。龜山上皇は憤懣措かず、今はもう詠へられなくなつて、硬を關東に下して此度の擧が後嵯峨天皇の遺詔に背くことを責めた。執權貞時は中間に立つて處置に窮し、遂に兩統迭立策を案出し、十年毎に兩統が交代して皇位に卽くといふ風にした。かくの如きは、一時の氣休めで、到底永續すべき性質のものではなかつた。——否、爭亂の種子はこゝに蒔かれたといつてもよい。當時、朝廷には三人の上皇がゐられた。後深草は本院と云ひ、龜山は中の院、後宇多は新院といはれた。そして迭立すべき後深草上皇の血統を持明院統と呼び、龜山上皇の血統を大覺寺統と呼んだ。いふまでもなく、伏見天皇の居られる宮殿が持明院で後宇多上皇の居られる宮殿は大覺寺であつたからであつた。

然るに、大覺寺統に取つて一層都合の悪い一事變が起つた。卽ち正應三年三月九日(二)

爭亂の種子

の夜、見るから怖ろしげな武士三四人、馬に乘つた儘宮中に馳せ入り、御殿に上り、一人の女官を提へて「帝は今夜どこに御寢になるか」と問うた。女官は驚いて見上げると、丈の高い荒くれ男が、赤地錦の直垂に緋縅の甲を着て、繪卷物に見る赤鬼のやうな面構へをしてゐた。女官は齒の根も合はず、「南殿から東北の隅に當る夜の御殿でございます」と答へた。兇賊らが背いて南の方へ忍んで行く間に、女官は先廻りをしてかくと天皇に密奏した。天皇は此時、皇后の方にゐられたが、急に女裝して春日殿へ避けられた。兇賊らは夜の御殿へ忍び入つたが、無論女官に欺かれたのであつて、そこには天皇が在さなかつた。宮中は上を下への大騷動！　皇后宮附の武士、長景正は、名乘り出て、賊と渡り合つたが手傷を負うた。其中、二條京極の警衛武士五十餘騎が闕を作つて馳せ參じた。兇賊らは、とても免れられぬ運命を知つて夜の御殿の御茵の上で自殺した。其死骸を舁いで六波羅へ訴へ出た頃には、夜は早くも明け放れて、物見高い京の街々には人雪崩を打つてゐた。

兇賊入內

淺原爲賴

此兇賊は甲斐生れの、淺原八郎爲賴といふ、無賴漢であつた。彼れは日頃强弓をひいて大力無双の聞えがあつたが、諸方で亂暴狼藉を働いた爲めに、官からは見當り次第誅戮せよといふ沙汰が出てゐた。それがどうした所存があつてか、此夜不意に其二

子を携へ宮中に闖入して亂暴を働いたのであつた。

當時皇居の不用心

之に付けても思ひ出さるゝのは、當時の宮中の不用心といふことである。武士三四人が馬に乘つた儘宮中に闖入したとあるから、宮門にも碌々警備がなかつたものと見える。六波羅府には嚴重な護衛兵がゐるたらうに、宮中は亂暴者の入り放題であつた。何といふ淺ましさであつたらう！

兩統の軋轢

ところが此淺原の自害した刀は、宰相中將三條實盛の家に傳はる寶刀「鯰尾」だとの鑑定で、今回の兇賊には實盛をも一味だといふ噂が立ち、六波羅では實盛をも搦め捕つた。そして詮議の結果、龜山上皇が此事件の張本で、皇位を奪はれた恨みから、淺原を手懷けて伏見天皇を亡はうとの計畫であつたと推量した。そこで伏見天皇の皇后の兄に當る西園寺公衡（權大納言）は後深草上皇に奏して、龜山上皇を六波羅に移すやうに願ひ出た。後深草上皇も流石にそれには同じかねる「世間には隨分不實の噂が立つものだ。後嵯峨院の御靈に對しても、さやうの事は思ひ止まるべきである」といつて涙ぐまれた。公衡は更に「さやうにお心弱くては、折角の皇統もまた覆へされはせぬかと案じます」と、言を設けて色々と讒謗した。龜山上皇は此由を聞いて心安からず思はれ、北條貞時に誓書を賜うて、今回の狼藉は決して吾身に關係がないと告げられ、それ

後伏見天皇
後二條天皇
二上皇崩ず
花園天皇

で漸く此事件は解決した。淺原が龜山上皇の旨を承けたかどうかは不明であるが、世間からさう言ひ觸らされる程に、兩統の軋轢は烈しくなつて居たのであつた。此軋轢から南北朝の爭ひが惹き起されたのである。

永仁六年七月、伏見天皇は位を皇太子に讓られた。それが後伏見天皇である。後伏見天皇は兩統迭立の約に基づいて後宇多上皇の第一皇子邦治親王を皇太子とせられ、在位三年にして位を皇太子に讓られた。それが後二條天皇で、父君の後宇多上皇が院政を行はれることになつたので、上皇はすべて五人となつた（後深草、龜山、後宇多、伏見、後伏見）。後二條天皇の皇太子には、後伏見上皇の皇弟富仁親王が立たれたので、それを知つた後宇多上皇は不快に思はれ、權中納言藤原經長を關東に遣はして、後嵯峨院の遺詔に則つて、後二條天皇の皇子を皇太子に定めよと命ぜられたが、關東では兩統迭立の約束を固持して、それに從はなかつた。

とかくする中、後二條天皇の嘉元二年七月に、後深草上皇は六十二歳で崩じられ、翌三年九月には龜山天皇も五十七歳で崩じられた。つゞいて後二條天皇も、在位僅かに六年にして德治三年八月に崩じられたので、皇太子富仁親王が卽位せられた、花園天皇と申し上げる。天皇は其時、御年十二歳であつたので、伏見上皇が院中に政務を

打續く諒闇に人氣沈滯す

後醍醐天皇卽位の徑路

見られたが、其皇太子には後二條天皇の弟に當る尊治親王が擬せられた。皇太子は其時廿一歳で英明の聞えがあつた。これこそ卽ち後醍醐天皇であつた。

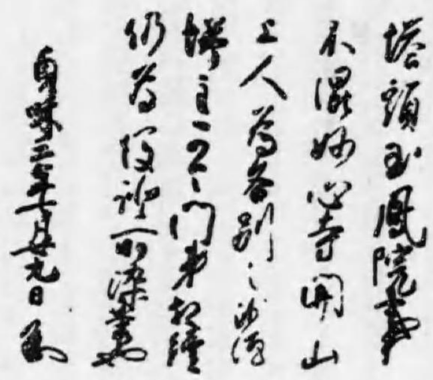
(四)かく上皇二人までが次々に崩御せられ、間もなく天子も亦崩ぜられて世は諒闇の物悲しい風色に蔽はれた。——皇居にしても板敷を低く張り、葦で編んだ御簾やら、布の帽額(もかう)やらを掛け渡し、御料なども極めて粗末な物が用ひられ、伺候の百官も裝束から太刀平緒まで、常とは變つてそゝろに物悲しく、世上に何等の催しがあるではなく、人心が一體に沈衰してゐた。

後醍醐天皇の御母は參議藤原忠繼の女で、談天門院と言つた。天皇は幼少の時から賢明で、どことなく英邁の性が見えたから、祖父の龜山上皇は深く天皇を愛され、早く皇位に上らせたいといふ御心から(五)男山八幡宮に告文を捧げて祈願を籠めたりせられた。ところが、其甲斐があつて、花園天皇は位を辷られ、天皇は文保二年二月二十六日に踐祚、翌三月廿九日に卽位の式を行はれることになつた。其時天皇は年既に三十一歳であつたが、後宇多上皇は例に從つて院中で政を聽かれ、關白には二條道平が任ぜられた。けれども上皇は、元亨元年の秋、大納言藤原定房を關東に遣はして旨を諭し、政を後醍醐帝に還すことにせられたのである。此の一擧は實に長年月に亙つた

花園天皇の一述懷

院政の慣例を打破して、天皇親政の舊に復した、一大政變と見ることが出來るのである。

ところが、花園天皇讓位の事は、本より天皇の發意ではなく、唯だ兩統迭立の約束上四圍の形勢に迫られて止むなく行はれた義理合の讓位であつた。花園天皇は十二歳の時卽位せられ、十年間御在位であつたから、此時漸く二十二歳人生の行旅は之から始まるといふ年齡であつた。然るに自分よりは十歳も年上の後醍醐天皇に位を讓つて、自分は花の盛りを日蔭の身とならなければならなかつたが故に、胸中の不滿不平はたとへがたかつたに相違ない。天皇が讓位の後詠まれた歌に、「(六)殿守のとものみやつこ外にして掃はぬ庭に花ぞちりしく」といふのがある。之は一旦御讓位になると、人々は皆新帝の方に赴いて自分の方へは顏も出さぬ。主殿司も上皇の宮殿へは振向きもせず、下司さへも庭の掃除をしないから、落花は堆く積つて、錦のやうに見えるといふ心を詠んだものであ



花園天皇宸翰

立后

立太子問題

らう。興味の深い光景ではあるが、どこかに、無常の感じの漂ふ、悲しい、哀れな歌で、讓位の節會が行はれて、鏡、劍、璽の新天皇へ移された時などの事が心細くも想ひ泛べられる。後醍醐天皇は卽位せられて間もなく、元應元年八月三日、後西園寺實兼(大政大臣)の女を皇后に立てられたが、君寵は思ひの外に薄かつたと言はれる。一(七)說には、踐祚以前から已に關係があつた御仲で、御情交は極めて密であつたとも言ひ傳へる。其後、阿野公廉(中將)の女廉子を寵し、それを淮后と稱へしめられたが、其權威皇后を凌いで、大は國家の政事から小は雜訴の沙汰にまで口を挾み、淮后の御口入とあれば功勳のないものも賞を得、理のあるものも非となるといふ風であつたと言ひ傳へられる。

皇太子を定めねばならぬ日が來た。後醍醐天皇には皇子女が三十二人もあつたといふから、他の統を立てるにも當らぬことであるが、後深草上皇の遺命もあり、兩統迭立の約束も反古にしかねたので、後二條上皇の皇子邦良親王を皇太子と定めた。ところが嘉曆元年に邦良親王は二十歳となられ、早くも帝位に卽かうといふ意志があつて、密使を關東に遣して後醍醐天皇の讓位を取計ふやうにとの內諭を賜はつたが、其事が洩れたので後醍醐帝は大いに機嫌を損じられた。これには色々と複雜な經緯があつ

た。卽ち、持明院統の後伏見上皇は我皇子の(ハ)量仁親王を太子に立てたい思召があり、屢〻石清水、賀茂などの諸社に祈願を籠められた程であつたが、容易に順が廻つて來ないので、邦良親王を煽動して早く皇位に卽かしめ、さて我皇子量仁を其皇太子と定めようと計られたのであるといふ。然るに其後久しからずして、邦良親王が世を去つたから、後醍醐天皇は奇貨措くべからずとなし、後嵯峨天皇の遺詔を楯に關東に諮して我第二皇子世良親王を皇太子に立てようとせられたが、北條氏は斷乎としてそれに反對し、飽くまで兩院の迭立を主張し、遂に後伏見上皇の旨を奉じ、其皇子量仁親王を皇太子とした。これが後に北朝の第一代となつた光嚴天皇である。然るに後伏見上皇は量仁親王が皇太子となつただけでは滿足が出來ず、一日も早く皇位に上らせたい思召があつたので、更に旨を關東に諮して、後醍醐天皇の讓位を取り計はしめた。後醍醐天皇はそれを聞いて深く憤られた。丈皇が幕府を討滅しなければならぬと決心されたのは此時であつたといはれる。

しかし、北條討滅の企圖を堅うせられたには、尙他にいろ〳〵の理由がある。其中の一つは奥州の反亂であつた。奥州地方では元亨、正中の頃から反亂が起り、嘉曆に至つても尙騷動が止まず、關東からは討手が向けられたけれども、それを鎭壓するこ

とが出來なかつた。それが爲め、北條氏は鼎の輕重を問はれて、京都竝びに諸國の機會を窺つてゐる者共に、事を起さうとする決心を與めた。淺薄な歷史家は往々にして、後醍醐天皇が北條氏を圖るに至られた原因を、立太子問題にのみに歸さうとするが、それは頗る當を失した觀察であつた。木が朽ちて虫を生ずると等しく、北條氏が衰へて後醍醐天皇の隱謀がそれに乘じたのであつた。――否、他の言葉で云ひ現はせば、北條氏は最早討滅せらるべき自然の運命を迎へてゐたのであつた。

(一)『梅松論』參照。
(二・三)『增鑑』。
(四)『徒然草』。
(五)『神皇正統記』。
(六)『徒然草』。
(七)『增鑑』。
(八)『花園院宸記』。

第三節　北條氏討滅の計畫

後醍醐天皇は、既に北條氏を圖る決心をせられたが、さて其決心を具體化するにつ

いては、色々の畫策をしなければならなかつた。北條氏は最早衰へ始めたとはいふものゝ、其背後には久しい間の歴史が控へて居る。其前面には強力な多數の大名が立ち塞がつてゐて、武力に缺けた朝廷の力では容易に滅ぼすことが出來さうにも思はれなかつた。さうした不利の地位にあつて、天皇は政權囘復の大業を成し遂げようと企てられた。さうした計畫の實行に當つて、先づ第一に要するのは誠忠勤王の士であつた。天皇はさうした者を集める爲めに、人材の登用を試み、其手段として文學の興張を企圖せられた。天皇の要求した人材は、單に才能を有つてゐるといふだけではなく、天皇の腹心として其事業を扶けるものでなければならなかつた。かうした目的で選拔せられた人々は、日野資朝、日野俊基、四條隆資、花山院師賢、平成輔などであつた。

これらの人々の中最も著しいのは、資朝と俊基との二人であつた。資朝は、正和四年廿五歳の時、京極爲兼が武家の迫害を受けて捕はれの身となつたのを見て憤慨し、それ以來常に北條氏を倒さうとする心があつたと言はれる。彼れは當時に於ける才人の尤なるもので、既に文章博士の榮位に居つたが、元亨三年正月破格の拔擢を蒙つて從三位檢非違使別當の重職に就いた。或年のこと、彼れは東寺の門に雨宿りをして、そこに集つてゐる附近の兒童の群れを見た。いづれも不具の子供で、手も足も曲り歪んで

ゐるのを、始めの中は興あることに覺えたが、永く見守つてゐると興が醒めて世にも醜いといふ不快の感じがひし〳〵と胸に迫つた。そこで彼れは思つた。――物は凡て唯だ素直であるべきである。殊更に奇を求めたものは、烏渡目には面白くあるけれど、達人高士の鑑賞には値しないと。かう悟つて、彼れは我家に歸ると直ぐ、日頃愛玩して居た盆栽をうち棄てた。此の一事に見ても、彼れが果斷勇猛、革命の資格を十分に具へた人物であつたことが知られる。又或る時、西大寺の靜然上人が、腰を曲げ白い眉を動かしながら、如何にも高德らしくとぼ〳〵と參內したのを見て、內大臣西園寺實衡はそれを嘆賞したが、資朝は一見して反感を起し、「何も別に貴いとはないではないか？　あれは唯だ年を老つた爲めに、眉が白くなつただけである」と冷罵し、更に尨犬の老いさらばつて、毛が所々禿げたのを牽かせて、「さういへば、これも隨分と貴く見える」と言つて、それを實衡へ贈つたと言ふ說話が殘つてゐる。鋭氣當るべからざる彼れの性格の一端がこれらの物語でほのめかされる。彼れは當時三十四歳の男盛りであつた。

それと同時に、日野俊基も亦た大內記から一躍して藏人に任用せられた。俊基の人物に就いては傳ふるところが少いけれども、いづれ資朝に劣らない俊才であつたに相

異ない。それは彼れが檢非違使廳の長官をしてゐた頃のことであつた。遍照寺(四)の僧は廣澤の池の鳥に餌をくれてそれを馴らし、十分馴れ切つた頃、堂の中まで餌を蒔きつづけ、戸を一枚だけ開けて置いて鳥を堂内に誘ひ入れ、多くの鳥が餌を漁つて堂内へ入つたところを戸を閉めて片端から捕へて打殺した。堂内から鳥の鳴き聲やら、羽叩きやら、打殺す物音やらが外に洩れた。折しもそこを通り合はした草刈童か、其物音を聞き付けて人々にそれと告げ知らせた。村民らは驚いて駈けつけて堂の内へ入ると、數千羽の雁が堂内を狂ひ廻り、其間に立つた一人の僧侶が棒を持つて鳥を打ち伏せて居るのを見た。そこで村民は大に怒つて、早速其坊主を捕へて檢非違使廳へ訴へ出た。俊基は早速殺された雁を僧侶の首に掛けさせて牢獄を命じた。本當に痛快な裁判だといつて、京都の人々は溜飲を下げた。此物語にも俊基が明快猛斷の性に富んで、毫も假借するところのなかつた、革命的性格の一端が現はれてゐる。

後醍醐天皇はかうして政治的方面に人材を集められると同時に、學問を勸め文學の研究を勵した。天皇の(五)學殖は極めて深く、佛道の研究も亦可也に進んでゐたので、當時の碩學高僧らは皆天皇の盛德を稱へもした。佛學の研究は當時の社會に牢乎たる勢力を握つてゐる社寺を治むる上に必要であり、儒學は直接政治上に必要であつた。それ故、花園天皇の時から已に文學興張といふ事が唱道されたのであるが、後醍醐天皇は政權の回復を企て、ゐられたから、大いにそれらを利用しようと思ひ、學問、藝術に托して英才を集め、人材を鑑別し、とかくする中に王道思想を吹き込まうと努められた。それで天皇は、經史の輪講とか、詩文の會合とか、さうした催しを頻に行はれた。元亨三年六月には、中殿に於いて作文(六)の會合が開かれた。其時の題は「久しかるべきは賢人の德」といふので、會合者は三十人餘りあり、天皇親らは琵琶の『玄上曲』を彈ぜられたが、其音色が極めて美しく、滿座は感歎の聲を洩らした。尋いで藏人内記日野俊基は、一同の作文を集めて文臺に載せ、一々それらを披講に及んだ。披講の終る頃には、短かき夏の夜はほのぼのと明け放れて、左大臣洞院實泰が聲朗らかに天皇の御製を誦じた時、郭公が啼きながら中殿の上を過つた。其翌年正月には、壽殿代で公卿の儒臣と音樂及び詩文の會を催された。

恰ど其時の鎌倉執權は北條高時であつたが、年が若くて經驗が少い上、神經系統の病氣を患つて暗愚になつたのに乘じ、内管領長崎高資が政權を自分の掌中に收め、賄賂を貪つて不公平な政治をしたから、人心皆關東を離れて、心に武家政治を厭ふ兆が見えて來た。此の形勢を見て取つた後醍醐帝は、愈々鎌倉誅伐の隱謀を進めて、王政

復古の大業に心肝を碎く事となり、會合を催して廷臣の中結托し得べき人々を物色した。

資朝、俊基の遊說

第一に白羽の箭の立つたのは前記の資朝、俊基、師賢、成輔らであつた。天皇はこれらの人々を各所に潛行させて、京畿附近の武士や僧侶を身方に招いたところ、南都の興福寺、北嶺の延曆寺などの僧侶中には少しばかり應ずる者があつた。其折資朝は山伏姿(七)をして柿の衣にあやる笠を被り、東國に在つて地方の豪族と結んだ。中でも美濃の國の住人土岐(伯耆守)賴兼、多治見(四郎次郎)國長などとは特別の緣親を結んだ。又俊基は近畿に遊說を試みたが、何しろ身は重職を帶んでゐて、毎日宮中へ出仕しなければならぬので、何とかして暇を得ようと機會を待つて居る中、偶〻山門橫川の僧徒(八)が朝廷に訴狀を奉つた。俊基はそれを披讀する際「楞嚴院」を「慢嚴院」と讀んだ。一座の公卿達は故らに讀み誤つたとは知らず、日配せして彼れの無學を嘲笑つた。俊基は赤面して退出し、「恥辱に逢つたから籠居する」と披露して、半年ばかりの間は出仕しなかつた。其間は山伏姿に身を窶して大和、河內の形勝要害を探り、更に東國西國に下つて、其の風俗及び土豪の分布狀態を窺つたといふ。一說(九)には俊基ほどの學者が「楞」を「慢」と讀み誤るなどは餘りに見え透いた策略で、却つて世人の疑ひを招くことになる、これは、當時、彼れが病氣の爲め紀州へ湯治に行つたのに基づいて想を構へた假作であらうが、しかし旗擧げの日に笠置を守護した足助氏や楠木氏は、其際俊基が內旨を傳へて身方につけたものであらうとは一般に認められるところである。

無禮講の催し

かうして俊基、資朝らが肝膽を碎いた結果、近畿、東國、南海までも手入りが出來たが、愈々事を擧ぐるに就ては、彼れを一所に會合せしめて落のないやうに手順を取極めなくてはならない。ところが公卿、僧徒、土豪など、身分の異つたものを一堂に集めて祕密の會見を行ふといふことは、それらの日には到底不可能のことであつた。此に於て案出された一策は無禮講(一〇)といふ破天荒の祕密結社の組織であつた。其仲間には尹大納言師賢、四條中納言隆資、洞院左衞門實世、藏人右少辨俊基、伊達三位房遊雅、聖護院聰の法眼玄基、足助次郎重成、錦織判官代、多治見四郎二郎國長、土岐左近藏人賴員らが加はつてゐた。無禮講は名の如く、一切の禮儀を撥廢したもので、酒宴の如きも一切獻盃に上下の區別なく、男は烏帽子を脫いで髮を解き、法師は法衣を着けずに白衣姿となり、年頃十七八の、薄い單衣を着けた美女二十餘人を侍らせて、それに酌をさせるといふ風の會合であつたが、其らんちき騷ぎの間に關東討滅の大計畫が談じ合はされたのであつた。いくら六波羅の武士達が耄碌してゐても、かうしたこと

玄惠法師

關東調伏の祈禱

は度々行へる次第ではない。そこで今度は文學の會合といふことにして、其頃才學無双の聞えのあつた玄惠法師を請じて韓退之の文集を講義させることにした。玄惠は隱謀などがあらうとは夢にも知らず、會合の日毎に臨席して幽玄の理を說いた。說き進んで潮洲の詩に到り、韓退之が潮洲の刺史に貶せらるゝ、一條になつたら、一座の面々は緣起を惡がり「之は寧ろ六韜三略などにした方がよからう」といふ議論が出て、韓退之の文集の講義は止めてしまつた。併し此無禮講の一條は後人の假作だといふ說もあるが、兎にも角にも何等かの會合が開かれて、お互の意志疎通を計つた事は事實であつたらう。

鎌倉の北條氏はけれども、衰へたといつても、未だ全く盡きないから、後醍醐天皇の陰謀にして一步を誤つたならば、承久の二の舞ひを演ずるのは知れ切つたことである。それ故に陰謀は幾度も重ねられたけれども、愈〻起つて之を實行しようとするとそれは甚だ容易でない。兩六波羅は朝廷の行動を監視して居る。大詔が下つて諸國の軍勢を徵發することになると、兩六波羅からは多數の軍隊が皇居を取圍んで、手も足も出ないやうにしてしまふといふ段取りになつて居る。兵馬の權を全然幕府に奪はれてゐる皇室は、それをどうすることも出來なかつた。そこで天皇は、人力以外に神

中宮御産の祈禱

佛の力を藉りて、加持祈禱によつて北條氏を調伏しようといふ計畫を立てられた。今日から觀れば、馬鹿々々しく嘘言らしいことであるけれども、元寇の役に龜山上皇が伊勢の大廟に敵國降伏を祈られ、神風が吹いて敵船が覆沒して以來、日本は神國で天佑を保全してゐるといふ信念が一般民衆の頭腦に深く沁み込んでゐる。明治大正の今日でも、尙ほ天佑に信賴する者が少くないほどの民衆であるから、後醍醐天皇の頃には、眞面目に神佛の冥加を祈らうとするのはあり得べきことであつた。佛道勸修に熱心であつた後醍醐天皇が、心から佛陀の廣大なる力を信じ、祈禱に依つて關東を調伏しようと思ひ立たれたのに不思議はなかつた。しかし表向きそんな調伏沙汰は出來ない。そこで、名を中宮の御安產祈禱に托して、內々關東の調伏を祈らうといふのである。革命家の素質を具備した破壞主義の日野資朝らが、かうしたことに眞面目に贊成したかどうかは疑問であるが、宮中で內密に祈禱を修するといふとは、別に物騷な沙汰でもないから强つて之を諫止するにも當らぬから、默つてゐたのでもあらう。兎も角も後醍醐帝陰謀の序幕として、中宮御產の祈禱といふ不思議な舞臺面が展開した。

それは元亨二年春であつた。後醍醐天皇は畿內諸山の寺に命じて樣々の大法祕法を行はしめた。當時名僧の聞えのあつた中にも、法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正の

二人へは、特に勅諚を賜はつて、皇居の内に壇を構へて祈禱をなさしめた。佛眼金輪五壇の法、一字五反孔雀經、七佛藥師熾盛光、烏芻沙摩變成男子の法、五大虛空藏六觀音、六字訶臨訶利帝母など、一般民衆の間には容易に行はれない祕法が修せられ、其爲め護摩を焚く煙りは宮苑内に滿ち、振鈴の響は掖殿に傳はつて、どんな惡魔、どんな怨靈も退散せずに居られまいと思はれた。これは無論中宮の安產を祈られる爲めの修法で、其後も度々精誠を盡した祈禱があつたけれど、翌元亨三年になつても、更に御產の樣子もなかつた。

（一―四）『徒然草』
（五）文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』參照。
（六・七）『增鑑』。
（八）『太平記』。
（九）『南北朝時代史』。
（一〇・一一）『太平記』。

第四節　正中の變と元弘の變

後醍醐天皇は祈禱といふ無形の心靈作用によつて關東の調伏を圖つた許りでなく、

の僧徒を身方につけて有形の武力をも借りようと圖られた。そこで、其第一手段として皇子護良親王を天台の座主にせられた。此事情を明らかにする爲めには、それらの日に於ける京都の僧徒の狀況を概觀する必要がある。

平安時代の末期から吉野時代へかけて、我邦に最も勢力のあつたのは「山法師」と當時の人々の呼んだ僧兵であつた。白河法皇が意の如くならぬもの、中に數へられた山法師は後醍醐天皇の時代になつても、依然政權をも左右し得べき法權を持つてゐた。當時にあつては寺社の勢力を閑却しては歷史の眞相を知ることが出來ない。所謂「南北」の爭亂を、單に宮方、武家方の政權爭奪と見るのは餘りに淺薄である。此爭奪の媒助者となつて、波瀾重疊の勢ひを爲さしめたものは、實は寺社の勢力であつた。其昔、源平二氏は代る〳〵立つて京都の守護となり、近畿の社寺の勢力を抑へたが、之が爲めに武家は勢力を蓄積し、遂に清盛は政府を乘取つて大改革を企てたので、延曆寺僧徒が甚だしく反抗した。で、清盛は社寺領に課稅することにしたが、尙一層反抗熱が高まり、或意味から言へば平氏は社寺の爲めに滅ぼされたやうな形になつた。之に反して源氏が伊豆から再擧の旗を翻した時には、初めから伊豆の走湯山、相模の箱根寺などの援護を受けてゐた。それ故に、鎌倉幕府に對する伊豆、箱根の勢力は非常なもので

山法師

伊豆、箱根

鶴岡八幡

大名多く寺社より出づ

鎌ヶ岡別當の權勢は北條、三浦を壓倒するほどであつた。まして南都、北嶺、高野、熊野、吉野などは、京畿に廣大なる領地を有し、全國の寺社に對し本山本宮といふ關係を持つて居たから、若し公然政權を爭ふやうなことがあれば、公家も武家も迚も寺社に匹敵しないのであつた。唯だ寺社は法權を重んじ政權の爭ひには常に局外中立の地位に立ち、一方、佛法を以て王法を護る代りに、他方王法を以て佛法を護らうとした。それ故に表面では無勢力なるが如き觀はあつたが、裏面に於ける寺社の勢力は大したもので全國を動かすだけの實力を有つてゐた。そこで、王法を以て佛法を護る手段として は、寺社領の課稅を輕くし、其境內には守護職と雖も、兵を入れて人を逮捕することを禁じた。之れが爲め、寺社領は全く兵權、政權の外に立つことになり、公家、武家は之に對して手をつけることが出來なくなつてしまつた。畿內の土地は十中の八九まで は寺社領で、地方にもまたさうした土地が多かつたから、武家に屬する豪族もまた多くはそれらの寺社領から出た。近江の佐々貴社領からは佐々木一族が出で、宇佐、香椎の兩社領からは大友氏が出た。又廣大な社領を有して全く政權の外に獨立してゐた阿蘇宗像大宮司の如きものもあり、神事、人事を分離せる諏訪社、箱崎社の如きもあつた。肥後の相良氏は蓮華王院領の地頭から起り、肥前の大村氏は東福寺領の給人から

公卿、武家寺社家の三角鬪爭

天皇、寺社の勢力を利用す

出た。かうした風に著名の大名で寺社の支配下から起つた者は少くなかつた。

勿論、寺社の中にも公家の直轄に屬してゐたものはあつたが、其或者は公家の力に賴らず、武家の支配下に屬して兵馬逮捕の權を得、大小名の列に加はつたものもあつた。かく公卿と、武家と、寺家社家と三派對立して互に勢力を張り、軋轢して止まなかつた爲めに、白河、鳥羽の院政が起り、一轉して鎌倉幕府が起り、遂には六波羅に探題を置いて、公家の記錄所議定職らと合議の上で政治を行ふ事となつたのであつた。

後醍醐天皇の時代には、公家武家の關係は甚だ込み入つたもので、寺社には「守護不入地」及び「禁入部」といふ厄介なものがあつた。「守護不入地」とは守護料の課稅を除かる、土地、「禁入部」とは守護が兵を遣はして寺社境內で人を逮捕するを禁ぜられてゐることである。かうした風に寺社の權力が强大で、日本はまるで貴族と僧侶との日本であるが如き觀を呈した。武家は兵馬の權を有してゐたが、甘んじて貴族の隷屬となり、何事も皆な公家に交涉して政務を決してゐた。之は公家を畏れたばかりではなく、寺社の法權を畏れてゐたのであつた。後醍醐天皇が佛法を隆興して、北條氏を滅ぼす手段に使はうとせられたのは、此機微を察しられたからであつた。しかし公然寺社と結ぶことにすれば、直ちに其野心を鎌倉に看破される處れがあつたので、學問に托(たく)け

て當時の名僧を宮中に召し之に依て寺社と結ぶ方策を取られた。かの玄惠法師は妙超禪師を紹介して大德寺を建立させ、花園、後醍醐兩天皇の師とならしめたが、此妙超は恐らく天皇の祕計に參與して、徒弟らを鎌倉に遣はして、關東の諸寺院を宮方に引き入れる運動をさせたやうなこともあつたらう。北條氏が斃れて後、京都に於ける禪僧の勢力が俄然として興隆したことを考へ合はすれば、其邊の消息は大概それと知られる。

皇室の佛道修業

序だから、その頃皇室に於て佛道を修められた模樣の一斑を述べよう。佛道の修業は龜山天皇以來の事で、天皇は法皇となられて後、眞言の奥義を究めて僧侶も及ばぬ大知識となられた。(二)鎌倉建長寺の元僧寧一山が南禪寺に居つた時、それを召して禪學の要諦を問はれたこともあつた。其寧一山の弟子である夢窓國師(疎石)は、後醍醐天皇の思召で南禪寺に住した高僧であつた。かうした風であつたから、天皇の佛學はなか〳〵深く、父祖にも劣らぬほどの行績であつたから、僧侶らの天皇に對する景慕の情は甚だ盛んであつた。天皇は皇太子であつた時から禪學を研究され、其造詣は極めて深かつた。京都の五山が興隆し始めたのは天皇の時からであるのを見ても、天皇と禪學との關係は判る。

土岐賴兼の自殺

一方持明院に於ても、佛道勸修に志を寄せられ、「佛道と歌道とは撰を一にしてゐる」と仰せられた花園上皇も、亦矢張り禪學を修められ、妙超を師として法を問はれ、彼れの紫野に建てた大德寺を御祈願所と定められた。妙超は大燈國師の號を賜はつた英僧で、曾て後醍醐天皇彼れを清涼殿に召して其提唱を聽かれ、彼れとの問答を宸筆雙幅となして大德寺に收められたことがあつた。花園、後醍醐兩天皇が妙超に歸依せられた事を以てしても、當時宮中に於いて佛法研究が如何に盛んであつたかを知ることは出來る。大德寺、妙心寺一派の禪は、花園天皇に因緣深く、南禪寺、天龍寺一派の禪は後醍醐天皇に因緣深かつた。

これまで述べ來つたやうな順序で、次第に熟し來つた後醍醐天皇の北條氏討滅計畫は遂に實行に移された。正中元年の九月、曩にかねて資朝が祕密に結んで置いた美濃の土岐十郎賴兼、多治見四郎二郎國長が上京して、(三)四條邊に隱れて居た。然るに同月十九日早朝、多數の軍兵は市民の夢を驚かして六波羅へ馳集つた。小串三郎左衞門尉範行、山本九郎時綱の二人は討手の大將を承つて、將軍家の紋所の付いた旗を授けられた。軍兵は六條河原に出で、そこで三千餘騎を二手に分け、一手は錦小路高倉の多治見の宿所へ向ひ、一手は三條堀河の土岐の宿所へ向つた。其時、時綱は「こんなに

大勢騒ぎ立てゝは、敵に覺られて逃げられる虞れがある」と、手勢を態と三條河原に留め、その身は唯だ一騎、中間二人に長刀を持たせて、忍びやかに土岐の宿所へ駈け付け、馬を門前に乘捨てゝ、小門から内へ入り、そつと中門の方を窺ふと、當番の宿所に當つて侍と見える者が、刀などを枕にして高鼾かいて寢入つて居た。既の後へ廻て見たら築地になつてゐて門の外には出口がない。安心して、客殿の奥の間へ躍り込むと、土岐は今起きたばかりで、他愛もなく髮を結び上げて居た。唯ならぬ時綱の氣色に、土岐は刀の鞘を拔拂つて切り込んだ。時綱は土岐を廣庭へ誘ひ出して、そこで二人は少時切合つて居たが、其中千人餘の軍勢が驅け付けて闕を造つた。土岐は生捕られるのを厭ひ、寢所へ走り歸つて腹十文字に掻切つて失せた。

多治見國長の自殺

他方、多治見の宿所へは小串が馳せ向つた。其朝多治見は宿醉未だ醒めず、工體もなく寢そべつてゐたが、唯ならぬ闕の聲に驚いて跳ね起きた。添寢をしてゐた遊女は、物馴れた女と見えて、枕元の鎧を取つて多治見に着せ、更に郎黨らを呼び起した。小笠原孫六が太刀を取つて中門に走り出で見ると、車の輪の族が一旒、粟地の上から現はれて居る。孫六は内へ引返して、「六波羅から討手が來た。此程の御謀叛が露現と見える。存分切合うた後、腹を切らうではないか」と大音に呼はり、強弓を携へて櫓に上り、敵を二十四人まで射落し自分は太刀の鋒先を口に喰へて、櫓から倒に飛び下りて死んだ。此間に多治見以下若黨二十四人は、身支度して大庭に出で、目に餘る大勢の敵と戰つたが、固より勝たう筈はなく、多治見らは互に刺し違へて死んだ。六波羅方にも死傷は多かつた。

陰謀露見は女の口から

かう『太平記』は記してゐるが、他の説では、二人共に捕はれて誅殺せられたとある尙ほ『太平記』には此陰謀露現の經緯が詳しく説いてある。土岐の一族賴員といふ者が六波羅の奉行齋藤利行の女を妻として居たが、愈〻大事を擧げる段になつて妻に名殘を惜み、或夜の寢物語りに其事を告げた。妻はそれを聞いて大に驚き、早速之を父親に告げたので、利行は賴員を密告者として六波羅殿に訴へ、急に討手を土岐、多治見の兩人に差し向けることになり、賴員はそれが爲めに無事なるを得たとしてある。

正中の變の結末

土岐、多治見の二人が討たれて、京都は宛ら鼎の湧くが如き騒動、其報告が鎌倉に達すると、高時は使者を京都に遣して資朝と俊基とを捕へて鎌倉に下した。審問の末俊基は證據不十分で赦免され、資朝は死一等を減じて佐渡へ流された。後醍醐天皇は萬里小路宣房を關東に遣し、此度の騒動には皇室は全く無關係である旨の誓書を高時に賜はり、それで一時事件は無事に收まつた。史家はこれを「正中の變」といふ。

北條氏太平を裝ふ

北條氏が朝廷の陰謀に對して、かやうに寛大な處置を取つた事については、種々の觀察が下される。それらの日には、大覺寺統に屬する公卿の間にも、二つの派があつた。それは何故かといふに、後宇多法皇は已に院政を廢して政權を後醍醐天皇に還されたけれど、それは元と、萬里小路宣房の意見に從つたものであつて、心中には尚ほ政權に對する未練がないでもなかつた。そして從來法皇の信任してゐられた廷臣は、必ずしもみな新帝の優遇を得る譯には行かなかつた。從つて法皇の時代に羽振りのよかつた公卿達の中にも、新帝の親政後に失意の境に落ちた者が少くなかつた。中納言六條有忠など其主なる者であつた。そこで法皇はこれらの人々の不遇を憐み、御孫で已に皇太子と定まつてゐた邦良親王を御臨終の床に召され、他日卽位の曉にはそれらの公卿達を登庸せよと(五)遺詔せられた。之が爲めに同じ大覺寺統の公卿の中に、後醍醐天皇直參のものと皇太子邦良親王直參のものとの二派が出來て、互に其勢力を爭つた。此內訌は幾多の流言飛語を生んだから、一方の讒訴を信じて輕々しく獄を斷ずる譯には行かない。それゆゑ、後醍醐天皇の陰謀事件も、必ずしも密告の通りに信じられない事情もあつたし、北條氏の方では、追々後醍醐天皇に讓位を迫る下心があつたから假令天皇に陰謀があつたにもせよ、一たび退位の後は公卿も武士も忽ち離背するに相違ないと事件を過小視した點もあつたのみならず、當時奧州には叛亂があつて、それがまだ平定してゐないのに、京都でも又事變が生じたとあつては、それからどんな大事變が起つて來ないとも限らず、さりとて承久の時の暴擧を再びする事も憚りがあり、つまり幕府は故らに太平を裝はうとしたのであらう。鎌倉でもかうした穩かな結末をつけたものであつた。

吉田宗房と萬里小路宣房

新進北畠親房

正中の變の後、後醍醐天皇は一層に愼重の態度を取つて關東の猜忌を避けることに努力せられた。腹心であつた資朝は佐渡に流され、俊基は出仕を罷め、天皇は殆ど全く孤立の姿であつた。けれどもそれは表面のことで、裏面には天皇の陰謀に與る者が有つたに相違ない。當時、公卿中の有力なる政治家としては、吉田宗房、(六)萬里小路房宣房の二人を擧ぐべく、又新進としては天皇の內旨を承り、世良親王を奉じてゐた北畠親房を計へなければならぬ。中にも吉田宗房は、天皇の腹心となつて、祕計を運らしたと言はるゝほど政治的手腕を持つた策略家であつた。彼れは變後、天皇と離れたり、合したりして、巧みに關東の目を昏まして居たが、最後には吉野に入つて天皇の股肱となつた。若し南朝の元勳を誰れかと問ふならば、蓋し指を宗房に屈しなければなるまい。

天皇佛家に結ぶ

護良親王叡山に入る

南都行幸

後醍醐天皇は、事變後怖氣付かれて、佛教信仰を唯一の活路となし、佛家に結んで暗中飛躍を試みようとせられた。若干の禪僧は鎌倉に下されて、天皇の爲めに細作の用を爲した。嘉暦二年十二月六日、第三皇子護良(モリナガ)親王は二十歳の青年を以て叡山に入つて、延暦寺第百十六世の天台座主となられた。で、世間では親王を大塔宮と申した。いまでもなく之は僧侶間に勢力を造る爲めの天皇の遠謀であつた。襄に土岐、多治見の二人が討たれてからは、地方の豪族も怖氣ついて宮方に馳せ參じようとする者は一人もない有樣なので、賴むべきものは只山門の僧兵のみであつた。そこで大塔宮が僧となつて叡山に入らるゝに至つたのであるから、宮は佛法修業などは顧みず、朝夕ひたすら武藝を勵み兵法を講ずるに急であつた。天台座主(義眞和尙)始まつて以來一百餘代かうした不思議の座主は無かつたと言はれる。

元徳二年三月、天皇は佛法興隆の本旨を發表し、親ら鳳輦を進めて南都北嶺の行幸を企てられた。(八)此企圖は實現せられ、其八日に天皇は第二皇子世良親王を伴うて南都に向ひ、東大寺及び興福寺を訪はれた。關白藤原經忠はそれに供奉し、近江の佐々木六角新判官は橋渡使となり兵を率るて先發した、近衞大將以下三十六將の衞兵は行列に加はつて、威儀嚴かに鳳輦を護衞した。沿道の庶民は棧敷を作つて拜觀した。東大寺

は聖武天皇の勅願によつて建立せられ、興福寺は藤原鎌足の發起によつて建立せられたもの、殊に後者は藤原氏の菩提寺ともいふべく、代々尊崇の大伽藍で、歷代の天皇も結緣したいといふ御志は有りながら、さて行幸となれば重大な儀式であるから、其儀もなくて長い年月を過された。然るに後醍醐天皇は一切の故障を排して行幸を斷行せられたので、南都の衆徒は狂せんばかりに喜んだ。

越えて二十六日には叡山に行幸せられ、日吉社に詣で、神樂、舞樂などを催され、翌二十七日には延暦寺の大講堂で供養を行はれた。此大講堂は深草天皇の御願立で大日遍照の尊像が安置されてあつたが、中比新に造營して供養を遂げない儘幾十年かを經て、屋根は破れ、扉は落ちて、滿山の衆徒は悲歎に暮れて居た。そこで天皇は修造を命じ、さてこそ供養の儀式を行はれたのであるた。當日は洞院公賢、萬里小路藤房が行事の役を勤め、供奉の公卿は、皆徒歩で山を登り、正午頃に拜佛の式があり、餘興として獅子舞を催し笛太鼓の音賑はしく舞ひ收められた。此舞は聖德太子の四天王寺供養から始まり、當日の導師は、天皇の第四皇子で妙法院に在した尊澄法親王、願主は天台座主尊雲法親王(大塔宮)であつた。兩法親皇は衆僧を率るて壇に上り、呪文、願文を讀んだ。大赦の詔は發せられ、儀式は盛觀を極めて、夜半に畢つたので、天皇

は中堂に還御せられた。其翌日には常行堂、法華堂を巡拜せられ、翌々日總持寺に參られて還幸せられた。

京都物騒

天皇が南都北嶺へ行幸せられてゐる間、京都は何となく騒々しく、諸國からは多くの武士が入り込んでゐた。叡山行幸後、四月一日、大判事章房が清水寺に詣でたところ、蓑笠姿の壯士が不意に飛び出して彼れを斬り殺した。五月五日の深草祭には、武士らは河原に徘徊して猥りに人を殺した。元來、章房は惡徒追捕の家柄に生れ、當時有名の判事であつたが、其子の章兼、章信の二人は極力探偵して、東山の白河に住んで居た瀬尾兵衞太郎といふ惡徒の所爲であつたことを知り、直ちにそれを斬り棄てた。しかし、瀬尾が下手人であつたかどうかは分らない。一說には後醍醐天皇が章房の人格を信用して、密かに關東討伐の大事を洩らされたところ、章房は「朝廷の微力及びがたい」と言つて應じなかつたので、天皇は事の漏洩を恐れて、密かに參儀烏丸成輔に旨を含め、其使嗾に依つて彼れを暗殺(九)せしめたともいふ。

鎌倉と六波羅

其頃、鎌倉では守時が執權職であつた。高時は正中の變後間もなく剃髮して、一時金澤貞顯が執權になつたが、嘉曆元年四月から守時が責任の衝に立つことになり、七月からは左馬權頭茂時も、執政加判の列に加はつた。又六波羅では、南方探題職金澤貞將が罷めて左將監時益が之に代り、其年の末には北方探題にも交迭が行はれ、常葉範貞が罷めて越後守仲時が新たにそれに補せられた。これらは北條氏最後の執權、加判、兩六波羅探題であつた。

皇子世良親王薨去

同年秋の九月十七日皇子世良(一〇)親王が薨ぜられた。親王は第二皇子であつたが、第一皇子尊良親王にも增した英才であつたので、天皇は非常に之を愛せられ、記錄所へも伴はれ、又議定へも參與させる思召であつたが、果敢なくなられたので酷く落膽せられた。親王の師傅であつた北畠親房の如きは悲歎の極、髮を削つて出家の身となり、名を宗玄と改めた。しかし、親房の生涯は之で終つたのではなく、後日再び現はれて吉野の朝廷に仕へ、出では將たり、入つては相となり、長く宮方の柱石となつた。

吉田定房の密告

元弘元年四月廿九日、吉田(一一)定房の密使が鎌倉に到着して、後醍醐天皇が再び陰謀を企て、俊基が其の謀主であると報じた。そこで、五月五日、長崎孫四郎左衞門尉高貞、南條次郎左衞門高直の二人が、鎌倉を發して京都に上り、俊基を始め僧の文觀、圓觀、件圓、如敎、游雅らを捕へ、六月これを鎌倉に護送した。文觀、圓觀は曩に中宮安産の祈禱を行つた僧であり、俊基は先年資朝と共に鎌倉に送られ、赦されて京都に歸つた人であつた。再犯はとても赦されぬ法定であるから、今回はどうせ命がない

俊基の東下り「道行文學」

定房の密告についての疑ひ

ものと觀念して、俊基は屠所の羊の如く、長い東海道を鎌倉に護送された。北間の彼れの感慨は四周の風物と共に律語を以て太平記に描かれ、我邦の文學史上に所謂「道行文學」の新形式を作つた。

前述の如く、初め後醍醐天皇の密謀に加はつた主謀者は、資朝、俊基の二人であつたが、それ以外にまた日夕天皇に近侍して、密謀に參與した腹心の人々がなければならなかつた。その最も顯著なものは、定房、宣房、親房の三人であつた。中でも定房は天皇の乳母の子で、天皇とは一番親しい間柄であつた。然るに其定房が天皇の陰謀を鎌倉に密告したといふとは、如何にも解しがたい事であつた。中途變心して、敵に內通するといふ例はいくらもあり得るけれども、定房は其後花園上皇院政の議定職となり又後醍醐天皇の政權回復後再び朝廷に仕へて寵信を得、遂に吉野の宮廷で命を終つた人であるから、多分此時の密告は、一種の謀略ではなかつたか。後に天皇が隱岐に流され、大塔宮を始め宮方が皆身を潛めてゐたときに、彼れは依然京都に留つて何事をか畫策してゐたやうに見える。久米博士の研究に從へば、言ふまでもなく、此の密告は策略であつた。卽ち南都北嶺の行幸があつてから、世間が何となく騷がしく、天皇が僧徒と結托し密謀を企て、大塔宮にそれを指揮させる段取であるなどいふ噂が傳は

つたので、かくては由々しき大事だと、智略に長じた定房は天皇と謀つて、事を輕く濟ますつもりで、其身が關東御用取扱役であるのを利用し、幕府に密告して北條氏を欺き、天皇御自身には少しも亂を爲す御意志がないといふやうに告げたのではあるまいか。——かう推測(一三)されぬこともない。

しかし、鎌倉では密告に驚き、今次の事變を正中の變よりも一層重視して文觀を硫黃ヶ島に流し圓觀を結城上野入道に預けて奧州に遷し、俊基を鎌倉の葛原ヶ岡に斬り、更に先年佐渡へ流した資朝を佐渡の守護本間山城入道に命じて斬罪に處せしめた。可成に峻嚴な、苛酷な處刑であつた。

事件の結末

阿新丸

こゝに一つの極めて哀れに、いぢらしい、後世までも永く語り傳へられる物語がある。それは資朝の一子阿新丸(一四)は、まだ十三の幼い身を以て、遙々父を佐渡に尋ね、本間の館に就いて、せめて一日なりとも、生前父に對面させられたいと願つたが、本間は關東の聞えを憚つて、胸中不便に思はぬとはなかつたらうが、親子の對面を許さずして資朝を引出し、自分の子の三郎をして之を殺さしめた。阿新丸は子供心に恨み、憤り、雨風の夜に乘じて本間が館に忍び入り、遂に本間三郎を刺殺して父仇を報じ、山伏に助けられて一命無事に遁れ歸つた。誠にいぢらしい物語であつた。

此物語は同時に、私達に一つの興味深い當時の航運狀況を語つてくれる。『太平記』によれば、阿新丸は都を出てから十日餘りで越前の敦賀に着き、そこから商人船に乘つて佐渡に渡つたが、敦賀では別に長途留をした樣子もない。また本間三郎を殺して笥を脫し、海岸まで落ち延びた時にも、恰ど出帆の商船があつた。それに便乘し、其日の暮れに越後の國府へ着いたことになつてゐる。勿論、史料として正確な叙述とは云へないが、兎にも角にも日本海沿岸に可也多數の船舶が泛んでゐて、佐渡行きなどはさほどの不便を感じなかつたやうに見える。又九州方面の商人も、船で山陰地方まで通商したと言ふから、それらの日には、全國の沿海地方には航海通商が可成に盛んに行はれてゐたといふことか推測せられる。

(一)文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』。
(二)『神皇正統記』。
(三)『太平記』參照。
(四・五)『增鑑』參照。
(六)『南北朝時代史』。
(七)『增鑑』參照。
(八)『太平記』參照。
(九)『太平記』參照。
(一〇)『增鑑』參照。
(一一)『北條記』
(一二)『增鑑』
(一三)『南北朝時代史』
(一四)『太平記』

第二章　北條政府の崩壞

第一節　後醍醐天皇の笠置蒙塵

兩六波羅の勃起

前には正中の變あり、後には圓觀、俊基らの逮捕あり、低氣壓は已に京都の皇居に迫つた。風にも雨にもならずに、晴朗の天氣が見らるべき筈はなかつた。鎌倉幕府は已に衰へてはゐたけれど、京都には、兵馬の權を全く其手に握つて居る兩六波羅探題が控へてゐたから、後醍醐天皇の地位は風前の燈火よりも尙ほ危險であつた。さりとて僅かばかりの僧兵が身方に附いてゐるだけでは、危險區域から脫する運動なぞが起されさうにもない。そこで天皇は、已むを得ず、鎌倉の疑ひを解く爲めの消極的態度を採られる外はなかつた。進取的な性格の天皇にも、勇氣と果斷とを用ひる餘地がなかつた。其中、低氣壓は刻々に襲來した。內偵して天皇の陰謀を熟知して居た鎌倉では、唯だ臣子の分として天皇を脅かすことを憚り、躊躇して斷然たる處置を採らなかつただけで、大塔宮の動靜も、禁裏に於ける調伏の御修法も、事細かに日々の注進で知られてゐた。年少客氣の北條高時、傲岸不遜の長崎高資は、最早捨て置くべきではない承久の例に倣うて、早く禍根を絕たなければならぬといつて、兩六波羅に祕密の命令を傳へた。

帝夜陰に宮中を脫す

(一)元弘元年八月廿四日、後醍醐天皇は例の如く記錄所に出御あつて、其日の政務を處理せられ、暫く本殿で休んでゐらるるといふ計畫があると密告した者があつた。天皇は、最早一刻も猶豫すべきでないと、大納言師賢を始め、萬里小路中納言藤房、其弟季房等を召して評議を開かれた。藤房は最先に六波羅勢の寄せぬ間に疾く難を避けられるがよいとお勸めする。他の公卿達もそれに贊成したので、天皇は愈〻決心の臍を固められ宮中を脫出して叡山に入る手筈を定められた。豫々(かねがね)大事を擧ける準備はしてあつたもの〻、敵に機先を制せられて、かく逆襲を受けては準備も間に合はないので、辛うじて三種の神器を取出し、天皇を御車に載せ、車の下簾から出絹を出して女房車の體(二)に見せかけ陽明門から祕かに脫出せられた。御門を守護してゐた武士らは、御車を押へて何人の御通りかと訊した。藤房、季房の二人は進み出て、「これは皇后の宮が北山殿への行啓でござるぞ」と答へて、危いところを御車は無事に門を潛つた。三條河原まで行つた頃、源中納言具行(ともゆき)、按察大納言公敏、六條少將忠顯等も後を慕つて追附いた。

張輿に替へて

天皇は御車を棄て張輿に替へられたが、俄かの事とて駕輿丁がゐない。大膳大夫重康樂人豐原兼秋、隨身秦久武などが御輿を昇ぐ。供奉の公卿達も皆衣冠を解いて折烏帽子に直垂になり、七大寺詣でする京家の青侍共が女性を召連れた體に見せかけて御輿の前後を護つた。

堅固に入る

初めの計劃では比叡山に落ちさせらるゝ筈で、大塔宮や尊澄法親王も坂本まで迎へに出られたが、一歩機先を制せられた事とて其の計畫の實行は不可能となり、途中から急に道を變へて南都へ向はれた。闇夜の道を馴れぬ御道中、夢心地で、木津の石地藏を過ぎられる頃、夜は既に明け離れて鷄聲が曉を報じた。そこで朝食を召され、奈良へ着いて東大寺の東南院へ入られた。然るに南都の衆徒は、關東を憚つて直ぐ宮方に加擔する樣子が見えないで、翌二十六日、和束の鷲峰山金胎寺に移られたが、ここは餘りに山深く、人里遠く、何事をするにも不便であつたから、更に要害の地を選ぶことにし、二十七日南都の衆徒若干を率ゐて、木津川の上流、笠置の石室へ臨幸せられた。

定めて比叡山で失望しようからとあつて、三條河原で花山院師賢に御衣を與へ、鳳輦に乘せて、臨幸と觸れて山門に向はしめられた。四條中納言隆資、二條中將爲明ら

宮中修羅の巷と化す

は衣冠堂々としてそれに隨行した。西塔の釋迦堂が行在所に充てられた。

天皇が宮中を忍び出られた廿四日の夜、京都に於ては六波羅の小田常陸前司時知が一隊の兵を率ゐて宮中を搜索に及んだ、逃げ後れた女房達の慌て騒く有樣がいぢらしいばかりで、宮人一人ゐる譯ではなく、御座所には御調度が何くれとなく、散亂してゐた。錦帳の内に侍女らにかしづかれておはした皇后の宮も、何の儀式もなく忍び出られて、美しい御簾や几帳が、兵士の泥足に踏みにじられた。どの御室にも人の影はなく、閨を縫ふ兵士らの姿が松明の光りに輝くばかりであつた。

公卿等捕縛せらる

明くれば廿五日、六波羅の武士らは、天皇に關係ある人々を捕縛した。捕縛せられた人々の中には、萬里小路大納言宣房、洞院別當實世、烏丸宰相成輔、侍從中納言公明などがあつた。

叡山の第一戰

其時、叡山から下つた或者が、六波羅に對して、天皇が山門へ僸幸して衆徒を賴られたと密告した。そこで北六波羅からは高橋孫五郎、南六波羅からは糟屋孫八を鎌倉に遣はして變事を報じ、二十七日には佐々木大夫判官時信、海東備前左近太夫、波多野上野前司宣道を坂本に、又小田常陸前司時知を勢多に遣はして、延暦寺を攻めさせると同時に、後伏見上皇、花園上皇、及び皇太子量仁親王を北六波羅方に迎へた。

大塔宮の脱走

延暦寺(八)は六波羅勢の攻め寄せたとを知り、大塔宮尊雲法親王、妙法院尊澄法親王は身に甲冑をつけて僧兵を指揮し、防禦の準備に怠りなかつた。其兵數は六千餘騎であつた。然るに六波羅勢は、追手五千騎、搦手七千騎合せて一萬二千騎といふ多勢。兩軍は互に鏑を削つて戰つたが、翌二十八日六波羅勢の大將海東備前左近太夫主從十六騎は東坂本で戰死した。僧兵は之に勢ひを得て力限り、根限り戰つたが、偶〻山嵐が烈しく吹いて、行在所の御簾が捲上つたのを拜すると、天皇ではなくて師賢であつたので、僧兵は氣を落し、戰ふ勇氣が消え失せた。大塔宮を始め廷臣らは居堪らなくなつて、二十九日の夜半、山上に篝火を焚いて擬勢を張り、窃かに石津の濱から小舟で石山に渡り、そこから夜に乘じて笠置に赴いた。

六波羅廳の無能

ところが此際に於ける六波羅廳の處置を見ると、北條(九)政府の核心は已に麻痺して、唯だ外形を保つてゐたに過ぎなかつたことが分る。元來六波羅は北條氏が承久の變に懲りて京都に代官を置き、それに一部の兵權を割き與へて、朝廷の行動を檢束せしめる爲めに設けられたものであつた。然るに六波羅では天皇の陰謀を疾くから知つて居ながら早く手を廻はしてそれを阻止することが出來ず、故らに無事を裝うて一日の安を偸んでゐた。其結果、事は段々大袈裟になり、遂に收拾出來ず、殊に天皇の陰謀の内容は明白に知れてゐたので、配流といふことに定まつてゐたのに、六波羅府では、其所屬の軍兵を以て、疾風迅雷的に宮中を襲ふことをせず、態〻鎌倉から二階堂貞藤を上京させて天皇の始末をつけるやうな間鈍(まどろ)い手段を取つた。これでは朝廷の方でもそれと勘付くが當然で、果然、大塔宮は其事を偵知して、廿四日の夕暮にそれを天皇に密告し、天皇は宮中脫出を企てられたのであつた。つまり、六波羅府は京都鎭臺としての任務を果す力がなく、援助を鎌倉幕府に求めたのであつた。其頃引續き、近畿諸國に叛亂が起つて、幕府に反抗するものが現はれ、越智、安田、渡邊などの土豪は既に誅せられたけれども、尙ほ一般の空氣が動搖してゐたので、六波羅では狼狽して度を失つてゐたのである。かうして六波羅は自分から騷ぎ立て、火を油に投じ、其油が燃え上つて笠置の遷幸となり、正成の赤坂籠城となり、遂には日本全國に燃え擴がつて革命の大火となつたでのあつた。

鎌倉の兵西上す

京都の變は、東海道の早馬で三日の後に鎌倉に報ぜられた。そこで幕府では評定を開き、九月二日に執權守時は、承久の例に倣うて、急ぎ軍兵を京師に上すことに定め、陸奥(一〇)守大佛貞直、武藏右馬助金澤貞冬、足利治部太輔高氏らに軍兵を率ゐしめ、長崎四郎左衛門高貞を監使として都合二萬八千人の兵は、五日から三日間に亙つて陸續と

鎌倉を出發した。當時京都には帝座が空虛となり、皇太子は未だ卽位せられなかつたから、殆ど無政府の有樣であつた。しかし、後伏見、花園の兩上皇及び皇太子は已に六波羅にゐられたから、これらの軍隊を上京さすに就いては、花園上皇の旨を請うたことであらう。卽ち花園上皇が六波羅廳に入られたのは八月廿七日であつたから、それから早馬三日を費して、九月二日には院宣が鎌倉に屆く譯。院宣によつて、五日より軍隊の輸送を始めたものと見ることが出來る。

笠置の行宮

此際、笠置の形勢はどうであつたかといふに、笠置山は俗に「登り十八丁」と云はるゝ標高二百米突の丘陵であるが、一方は溪の深い木津川に臨んで、石が磊塊として居り、山中には佛體を彫り付けた彌勒岩、文珠岩、虛空藏岩、藥師岩などがあり、今こそ見る影もない山寺であるが、其昔は僧坊なども少からず建ち、僧兵の數も可成多く、攻むるに難き自然の要害であつた。其時、笠置山には別當聖尋僧正が住持してゐた。後醍醐天皇はそこに行在所を設けて勤王の兵を募られたところ、大和、河內、伊賀、伊勢方面から、多數の兵士が召に應じて集つた。しかし、之と名のある武士は一人もなく、行宮の警固も甚だ覺束なかつたので、天皇は不安心に思はれ、或夜うと〳〵と假睡まれた。すると、紫宸殿の庭前と思はれる地に、大きな一本の常磐木があつて、南

夢判斷

へ延びた枝が殊によく繁つて居り、其下には百官が居列んで、南へ向いた上座に疊を高く布いた空位があつた。天皇が異んで御覽になると、二人の童子(一二)が現はれて御前に跪き涙を拭つて、「天下に御身を隱される所はございませぬが、此南に向いた御座だけは玉體を安んずることが出來ます」と言ひ捨てゝ天に登つた。で、天皇は身を起さうとなさると、それは一場の夢であつた。そこで天皇は夢判斷を試みられ、木に南の附く字は楠で、其陰に南に向つて玉座のあるのは、再び南面して天下を治めることの出來る前兆であると考へられ、夜が明けて後、成就院律師を召して、「此邊に楠といふ武士があるか」と尋ねられたら、律師は少し考へて、「近傍にはさういふ者はございませんが、河內の金剛山の西に楠木多門兵衞正成といふ者があります。弓矢に名を得た武士で敏達天皇四代の孫橘諸兄公の後胤ですが、年久しく民間に住んで、今では一地方の豪族に過ぎません。聞く所によれば、正成の母親が志貴の毘沙門に詣で、夢想を感じて儲けた子だから、幼名を多門丸と名づけたとか申します」と詳かに答へた。そこで天皇肯かれて、急ぎ藤房に勅諚を授けて、楠木正成を召し出されることになつた。正成はやがて行宮に來り、天皇に拜謁して時局收拾の勅を蒙つた。正成が答へて申すには、「武家の大逆は申すまでもございませんが、多數の軍兵を擁してゐることであるか

楠木正成召出さる

ら、力を以て爭うたとて勝味はございますまい。けれども謀を以て臨んだら、或は敵を僅すことが出來るかも知れません。勝敗は兵家の常と申します。一時敗れたといつて、決して御心を惱まされてはなりません。正成が未だ活きてゐると聞し召されたら、聖運はいつか開けるものと思し召されるやうに願ひます」と堅くお請けして河内へ歸つた。

『太平記』の假作

此夢判斷は『太平記』の假作であると評せられる。しかし我國民の歷史觀念中には、此物語が重大な要素となつて居り、それを全部小說にしてしまふのは惜いやうな氣がするけれど、事實は先年俊基が熊野へ湯治に行つた折、河内方面の土豪を誘つて、第一に楠木正成を味方につけたのであらう。天皇が正成を笠置に召されたのは、勿論此の關係に基いてゐることと思はれる。

楠木氏は河内の土豪

(二二)元來正成は河内の豪族で、其居城は石川郡東條にあり、「龍泉城」とも呼ばれたが、別に赤坂、金剛山、千早などの要害を萬一の場合には利用することが出來た。一體南河内には觀心寺、龍泉寺、金剛寺など眞言宗の名刹が多く、みな高野山に深い因緣を持つてゐた。後醍醐天皇が此の叡山を避けて、南の笠置の山中に根據を設けられたのも内の寺々や高野山を賴られた結果であらうと思はれる。楠木の一門はみな河内に住して、枝葉も繁く羽振りも可也によかつた。卽ち佐備村には佐備氏、大塚村には大塚氏、石川村には石川氏、河野邊村には河野邊氏があり、神宮寺氏は紺郷に起り、和田氏は和泉の和田に居り、橋本氏は橋本村に、野田氏は野田村に、福塚氏は北泉郡から起つた。正成は是等一門の長者として恩威竝び行はれ、攝　泉の間には勢力が竝ぶものがなかつた。

楠木氏の一門

いくら正成が智謀に富んでゐたとて、徒手空拳ではどうすることも出來ない。彼れは素より名門に生れて、其家柄を背景にしてゐたけれども、年僅かに十二才で初陣をして、拔群の手柄を立てた程の傑物であつた。當時河内には矢尾別當顯幸といふ法師がゐて楠木氏と對峙して居たが、正成の父正澄が病死して正成の代となつた時、和泉國の住人筒井淨慶との間も不和となつた。矢尾はそれを見て好機會となし、筒井を語らうて身方に引入れ、共同して楠木氏を攻めようとした。そこで正成は反間を放つて矢尾と筒井との間を離間したので、彼等は互に相疑つて、自分々々の所領へ退いてしまつた。其後も矢尾は正成に敵意を持つて居たが、次第に勢力を失つて、領内に蟄伏するの已むなきに至つた。

矢尾顯幸と筒井淨慶

近畿地方における當時の土豪の分布を見るに、(二三)河内の楠木、矢尾の外、大和から和

泉へかけては筒井淨慶法師があり、大和には越智八郎があり、紀伊には安田庄司、攝津には渡邊右衞門などがあつた。然るに高時の失政から諸國の武士は北條氏を恨み、諸所で反亂を起したが、第一に旗擧げをしたのは此越智八郎であつた。彼れは安田庄司、渡邊右衞門らと諜し合して、元亨二年の夏に兵を擧げたが、六波羅からは之に對して討手の勢を向け、楠木正成にも出兵を促して來た。其頃はまだ後醍醐天皇にも北條氏討滅の計畫がなく、正成は當然北條氏の指揮に從はなければならぬ位地にゐたから、命令に應じて出陣し、雖なく越智八郎を討取つた。

近畿に於ける土豪の分布

間もなく攝津の渡邊右衞門も兵を擧げたが、正成は其討伐を命ぜられて攝津に進軍し奇計を設けて敵軍を破り、渡邊は遂に城を棄てゝ逃走した。正成はやう〳〵引揚げて河内の本據に歸ると、今度は紀州の安田庄司が反亂を起した。六波羅では已に二度も正成の手竝を見たから、今度も又征討の任を彼れに負はした。正成は紀州に出陣して勝尾で安田の兵と戰ひ、それを討滅した。正成の威名はこれ以來近畿に轟くことになり、笠置へ召された時には、已に百戰を經過した老巧の武士であつた。彼れが後醍醐天皇の勅問に奉答して、「正成がまだ活きてゐると聞召されたら、聖運はいつか開けるものと思召されたい」といつたのは、強ち廣言ではなくて、十分に胸中に自信があつたものであらう。

正成が天皇の召に應じて、挺身國難を救ふ誠忠無比の勤王家となつた原因は何であるか。勿論、彼れの表裏のない正直な武將であつたといふ天性が、彼れをして終始一貫、濫ることなき勤王家にならしめたことに疑ひはないが、他面、彼れの地位境遇が、彼れをして宮方につかしめるのに好都合であつたとも見ることが出來る。彼れは河内の一鄉士で地方的には相當の名聲を持つて居り、又前述の如く、近畿の反徒を討平して大功を立てたが、高氏、義貞などの舊家名族と比較して見れば、自分は物の數にも入らぬ小土豪に過ぎなかつた。彼れが河内で知行してゐたのは、僅かに一萬石足らずの土地であつた。卽ち彼れは大名でもなければ、又無祿の一士民でもなく、家の歷史は兎も角も、大名顏をするには力の足らぬ地位にあつた。いくら

勤王第一人たる正成の地位

楠木正成木像

北條氏に忠勤を勵んだとて、大名の地位に達するのには距離があつた。それ故、此際、彼れに取つての立身出世の捷徑は、天顏に咫尺して其股肱となることであつた。さうすれば一躍して諸大名以上の重要な地位を占めることも出來る。どうせ亂世であるから、陪臣の手足となつて恩賞に預るよりは、天皇の直參になつて活動する方が有利である。戰略にかけては天下無敵の自信ある正成が、驥足を伸ばすべき時機は到來した。殊に正成は都に近き地に住んでゐたゞけに、屢〻出でゝ京洛の貴紳を訪ひ、また高僧にも知己多く、つとめて經學を講じ、兵書をも學んで、よく大義名分を心得てゐたから、武臣が權を專らにして天子を蔑ろにするのを見て、心中祕かに快らず思つてゐた。しかも天皇から召命を蒙り、數ならぬ自分に大事を委任せられたとあつては値遇に感激して一命を大君に捧ける決心をせずには居れなかつた。況んや利害から考へても、一族擧げるべき絕好の機會であつた。彼れが奮然として手に唾して立つたのも無理はない。

（一）『增鑑』及び『太平記』參照。
（二・三）『太平記』。
（四―六）『增鑑』參照。

（七）『光明寺殘篇』。
（八）『太平記』。
（九）山路愛山氏『足利尊氏論』。
（一〇）『北條記』。
（一一）『太平記』。
（一二・一三）『南朝太平記』參照。
（一四）伊藤銀月氏『日本民族史』參照。かうした功利的の觀察を下すことは、正成を忠臣の龜鑑としてゐる日本民衆に取つて、心苦しくもあり、また幾多の反感もあらうが、かうした考へがいくらも人々の心の影に宿つてゐることは爭へない事實である。

第二節　後醍醐天皇の隱岐配流

九月六日には、六波羅勢は早くも笠置に押寄せて合戰が開かれた。それは還幸後十日目であつた。軍記に依れば、九月三日、六波羅勢七萬五千餘騎は三手に分れて笠置に押寄せたとある。元來笠置は山高く、谷深く、靑巖道を遮つて、九十九折りなる坂を十八町も登らなければならぬのに、巖を切つて堀に、石を疊んで塀にしたから、當時にあつては難攻不落の堅城と見えた。其第一の木戸を堅めたのは參河國の足助次郎

重範であつた。彼れは先年無禮講の際にも參加した武人で、其祖先が承久の變に後鳥羽上皇に身方して陣沒したといふ因緣で、今回も喜んで後醍醐天皇の謀略に參加したのである。彼れの本據は三河國にあつたが、畿内にも領地があつて、京都に邸宅を構へて居たといふから、最初から天皇に供奉して行つたと思はれる。

宮方についた人々

又此際、宮方に身方(二)した者には、大和、河内の南都及び高野山に盤する寺領地の僧徒が多く、伊賀伊勢の境、鈴鹿附近に蟠居してゐた關の一黨も加はつてゐた。關氏は昔から平氏の味方であつたが、一體、南伊勢から紀伊熊野へかけては、伊勢平氏の譜代の家人が多かつたから、元亨年間に日野俊基が密旨を奉じて南方に遊説した時には、これらの土豪とも結托して置いたらしい。彼等は天皇の蒙塵と聞いて、いづれも笠置へ馳せ參じた。つまり彼等は北條氏と源氏の幕府とを倒して、平氏六波羅の復舊を謀らうといふ底意をも有つてゐたのであつた。

六波羅勢の笠置城攻撃は、彼是廿日餘りも續いたが、容易に落ちさうにもなかつた。此間城中では、楠木正成の軍勢と連絡を取らうとして、尊良(三)、尊雲兩法親王を始め、四條隆資らは城を脱出し、南河内の方面に赴いた。ところが、九月二十七日に至つて鎌倉の大軍が京都を發し笠置に向つた。其兵數は、合計二十萬七千と號せられた。此

笠置落城

陶山、小見山の奇計

(四)笠置討伐軍の部將に、備中の住人陶山藤三(義高)、小見山次郎といふものがあつた。二人は身方の大軍が到着しない間にどうかして笠置を陷れようと、廿八日夜、一族郎黨五十餘人で、繩梯子を用意し、太刀を背に負うて、城の北面の石巖を風雨に乘じて上り始めた。二丁ばかりはとかくして登つたか、其上に一段高い處があつて屏風を立てたやうに岩石が重り合ひ、老松がそれから枝を垂れてゐるといふ有樣、そこから上は進む事が出來ないので、一行は遙かに上を見上げてぼんやりしてゐた。其時、陶山藤三は猿の如く岩の上に駈け上り、繩梯子を木の枝に懸けて下へ下したから、兵卒はそれに取附いて絶壁を安々と上つた。一行はやつと塀際へ着いて、一息休めた上塀を乘り越え、夜警の武士の後に附いて城の内を一巡りして、樣子を探ると、追手の木戸と西の坂口は伊賀、伊勢の兵が千餘騎で固め、其他はそれ〴〵五百、七百の兵で固めてゐるが、北口ばかりは嶮岨を恃んで一人の警固すらも置いてない。陶山、小見山の二人は更に奥深く進んで行宮を窺ふと、蠟燭の火が數多く瞬いて振鈴の聲すらも幽かに聞えて來る。略ぼ見定めた上、二人は本堂の上の山へ上つて、人の居ない建物へ火を懸け、どつと關の聲を揚げた。四方の寄手は、城中に反逆者が出來て火を懸けたものと思ひ、「此方でも關の聲を合せよ」といつて、追手、搦手の七萬餘騎が、一度に鬨の

天皇と藤房との詠歌

聲を揚げた。陶山ら五十餘人は、城兵の慌て騒ぐ間を縦横に駈け廻つて手當り次第に建物に火を懸けたから、城兵は敵が已に数多く亂入したものと思ひ誤り、戰ふ勇氣が消えて、我先きにと城から脱走した。此時、錦織判官代父子、石川義繼父子は共に戰死した。足助重範もまた討死したと言はれる。

さて火は方々の建物に移つて、遂には行宮をも燒いてしまつた。そこで後醍醐天皇を始め、皇子、公卿達はみな跣足で、どこを當てどもなく足に任せて落ちて行つた。此人々も最初にこそ天皇を扶けて前後に供奉したが、風雨烈しく、道闇く、敵兵の鬨の聲が絶間もなく闇を破つて聞えるので、次第に互に見失つて、後には唯だ藤房、秀房の二人が天皇に附いて居るのみとなつた。目指すところは楠木の赤坂城であつたけれど、心があせるだけで足は運ばず、夢心地で道を歩いて、三十日に漸く山城の有王山の麓まで落延びられた。木津川を越えて宇治へ出られたのであつた。けれども、三晝夜を山路に迷ひくらして、身心共に疲勞したので、しばらくの間木蔭に憩ふと、木の下露がはら〳〵と天皇の御衣に懸つた。天皇[五]は物悲しくなつて、さして行く笠置の山を出でしより天が下には隱れ家もなし」と詠ぜられると、藤房は涙を押へて、「いかにせん賴む陰とて立寄れば猶袖濡らす松の下露」と詠んだ。眞に哀れな、悲しい御有

天皇、皇子捕へらる

駒返しと飛鳥路村

様であつた。

ところが、山城國の住人深須[六]三郎入道は、此邊の地理に詳しいといふので、隅なく山林を捜し歩いて、遂に天皇の在所を知り、それを幕軍の陣營に告げた。間もなく君臣三人は囚はれの身となり、十月三日南六波羅へ遷された。妙法院尊澄法親王も同じく捕へられた。又尊良親王は赤坂城に居られたが、父の天皇の難を聞かれ、自ら出て囚はれの身となられ、唯だ尊雲法親王護良のみは赤坂城に踏み止つて居られた。其他此時囚はられた公卿、武士、山徒の、主たる者は合せて六十一人であつたといはれる。いづれも籠輿、又は傳馬に乘せられて、白晝京都へ引かれたので、其緣故ある男女は京の街に立ち竝んで、人目も憚らずに泣き悲んだ。

笠置と向ひ合つた木津川の對岸に、一條の清水の湧き出る所があり、土俗はそれを「駒返し」と呼んでゐる。傳說によれば、楠木正成は笠置の急を聞いて、救援の爲めに馳せ向つたが、こゝまで來て遂に笠置に火の手の上るのを見て、軍勢を引返したと言はれる。又陶山、小見山を案内して、笠置の行宮に導いた飛[七]鳥路の村民は、其後永く笠置の村民に忌み嫌はれ、後世になつても、一切他村とは婚嫁を通ずることが出來ず、血族結婚の結果一村擧つて惡病に罹つたといはれてゐる。

天皇の計畫の失敗に終つた理由

後醍醐天皇の笠置の旗擧げは、かうして全く失敗に歸し、おそくも承久の亂の二の舞を演ずる運命となつた。何故、さうした失敗を招くに至つたか？　一口に言へば、當時は武人の天下であつて公卿の勢力が極めて微弱であつたからである。諸國には勤王の士も興らず、笠置の行宮を殆ど無防備の儘敵の攻撃に任さなければならぬといふ有樣であつた。北條氏に對して不平を抱いてゐる諸國の武士とても、幕府の惰力に對して尙ほ十分の畏怖心を抱き、承久の亂に皇室に身方して所領を失つた人々の悔恨を忘れることは出來なかつた。如何に皇室中心主義が、日本民衆の理想であるとは言へ、一旦武門に歸してしまつた政權は、天皇の綸旨一片で容易に取返せるものでなかつた。利害得失を度外視して、眞に皇室の爲めに盡さうとする者はいつの世にも甚だ少い。後醍醐天皇は何も我から進んで事を擧げたのでなく、六波羅府の不意打に遭つて止むなく笠置へ避難されたのであるから、そこに何等の防禦準備があらう筈がなかつた。唯だ京都を脫出して、笠置まで落延びられたといふだけでも大きな成功であつた。天皇の態度は自動的でなく、受動的であつた。しかしながら、受動的ではあるけれど、さうした結果を見るやうな種子は、矢張り御自分で蒔かれたのであつた。天皇が河內や高野やの身方を賴りとして南方へ蒙塵せられたといふことは敢て疑ふ餘地がない。

光嚴院の踐祚

寶物の神器

悲いことには、民衆一般に天皇を神聖視し、渴仰崇敬してやまないにも拘はらず、皇室のことは眞に雲の上の事であつて、下界に降られては殆ど全く策の施すべき道がなかつた。天皇ほどの英明の素質を持つてゐられても、松の下露に袖を沾らすの不幸を見なければならなかつた。しかし此苦い笠置の經驗は、天皇をして、百尺竿頭一步を進めて、一身上に大革命期を劃し、危地を踏むべき勇敢の實行家たる機緣を握らしめた。之より先き、元弘元年九月、笠置城のまだ陷らなかつた時、北條氏は安達高景及び二階堂貞藤を京都に遣はして、皇太子踐祚のことを取計はしめた。そこで花園上皇の院宣を請ひ、九月二十日に皇太子量仁親王を六波羅から土御門東洞院殿に移して踐祚の儀式を行つた。それが光嚴天皇である。御年は十九歲で、前左大臣冬教が關白となり、花園上皇が院中で政務を聞し召された。

光嚴院が卽位されたことに就いて、そこに二つの理由(八)があつた。其一は天子がなくては、京都の人心が鎭らないこと。他の一は平氏黨の者を討たうとするには、天子を立てゝ、置かねばならぬ事であつた。然るに神器は後醍醐天皇によつて笠置へ運ばれてゐるから、神器のない皇位は閏位であり、又僞主であつた。そこで後醍醐帝を六波羅に移して、神器を光嚴院に傳へしめようとしたが、天皇は御劍を讓られたゞけで、璽は

寶物を渡し、眞物は自分で有つてゐられた。

十一月八日、邦良親王の御子康仁親王が光嚴院の皇太子と定められた。邦良親王は後醍醐天皇の皇兄後二條天皇の第一皇子であつた。此の時、持明院統では、光嚴院の御子を皇太子に立てようとしたのであつたが、鎌倉幕府では兩統迭立の約を履まねばならぬといつて、遂に大覺寺統の皇太子を選定したのであつた。是は鎌倉の處置が公平で約束通り飽くまで兩統を迭立させて、皇統に關する爭議を避けようとしたものであつた。光嚴院は元弘三年三月二十二日、大政官廳に於いて卽位の式を行ひ、四月二十八日に年號を正慶と改められた。其頃京都には笠置から引揚げた大軍が入込んでゐて、宛然戰場の如き觀を呈してゐたのみならず、幾內及び伊賀、伊勢邊には義兵を起した者が散在して、日々各所で小戰鬪が行はれてゐた。

康仁親王の立太子

幕軍の赤坂進擊

同年十月十四日幕軍は、楠木正成の楯籠つてゐる赤阪城進擊の策を立て、翌十五日には全軍を四隊に分けて進發した。卽ち一手は東の方宇治より大和路に至るもので、其大將は十六人。一手は北の方八幡から佐良路に至るもので、和泉國の軍勢が其主腦であり、一手は西南の方山崎から天王寺路に至るもので信濃の軍勢、最後の一手は伊賀路から進むもので、之には美濃、尾張の軍勢が屬し、足利高氏が其總大將であつた。

唯だ楠木の赤坂城を攻めるだけなれば八幡宇治の大手搦手だけで澤山であるが、攝津和泉、伊賀、伊勢にも土豪が蜂起して居たので、天王寺、伊賀路等にも向はしめたのであつた。但し楠木の城には、大塔宮を始め宮方の面々籠城し居ることが確かであつたから、そこに大軍の向けられたことに疑ひはない。

變亂全國に波及す

東軍はかうして四手に分れて、京都を進發したと言つても、近畿諸國が全然靜謐に歸するとはない。又楠木氏の赤坂城以外にも旗揚げをした義軍が少からずあつて、北條氏の衰勢に乘じて之を倒さうとしたが、笠置の戰は更に天下の耳目を聳動して、西國にまでも動亂の波紋が廣がつた。元來東軍が京師に集まつたのは單に六波羅を保護するのみではなく、幾內を鎭撫して宸襟を安んずるが第一の目的であつた。幾內は朝廷の直轄地で昔は之を「內國」と稱へ、其他は「外國」と呼んでゐた。「外國」に、夜討、寇盜、亂妨、狼藉、一揆、徒黨の起るのは常態であつて、天下の大亂に至らない間は、朝廷ではさまでそれらを氣にも留められぬ有樣であつた。然るに笠置の變亂後、遂に兵禍は全國に波及して、遙かに西國の果てにも騷動が起つた。九州探題赤橋英時は京師の變を聞き、大いに恐怖して管內の兵を徵集したが、軍勢は追々博多に到着した。尋いで九月十八日には九州の諸大名に對し、一人づゝ博多に參集するやう命じたとこ

佐多親經

赤坂城の地勢

ろ、大隅の佐多親經はそれに應じなかつたので、田宅を沒收された。佐多氏は承久の變にも官軍に屬した家柄で、此時も宮方に好意を表して九州探題の命を奉じなかつたものと見える。

話は前に戻つて、楠木正成のことに移る。正成の館は上赤坂と下赤坂(二三)とにあり、下赤坂は金剛山の西北麓、千早川の西岸、森屋の甲取山といふ處にあつた。そこは正成の鄕里である水分から數丁ほど隔たつて居た。今日殘つてゐる赤坂城址は、東西百間、南北四百間、西、東、北の三方は谷を繞らして絕壁削るが如く、頂上は平坦にして、高さは約五十尺に過ぎない。後、正成が千早に入つて赤坂を回復し、平野將監を守らしめたが、これは上赤坂の方であつた。上赤坂は金剛山の西北、桐山の大根月に在つて、東二百間、南北百間、東南の斷崖は高さ三百尺あり、北に一徑を通ずるのみである。『太平記』には正成の赤坂城を、東の方だけが高地になつて、少し雜所のやうであるけれど、他の三方は皆平地續きで、唯だ壕一重、塀一重を設けただけであり、殊に城内は俄造りの事とて、碌々堀もほらず、塀一重の中は方一二町の所へ櫓を二三十掻い竝べたとしてある。

初め正成が笠置の行在所を辭して、去つて赤坂に城を築いたのは大に意味のある事

正成の赤坂に據れる理由

で、順當に考へると、天皇の御座所たる笠置に籠城して幕兵を拒くべきであるが、笠置の地は天險であるけれど、其兵は多く烏合の衆で正成の如く一地方の豪族とては、たとへ天皇の勅命に依るとしても、それらを一號令の下に手足の如くに驅使する事は甚だ覺束ない。そこで正成は赤坂に歸つて、俄かに本據を築くことにしたのであつた。赤坂は楠氏累代の領地で、一族郎黨は勿論、其土民も皆彼れの命を遵奉し、手足の用を成すに足るものであつた。加ふるに其地は河内の南部に位し、金剛山の餘脈に據り、山岳重疊して谷狹く崖嶮しく、大兵の運川に不適當であつた。故に寡兵を以て幕府の大軍を拒ぐには絕好な場所であつた。更に機會を見て攝津、和泉の平原に進出し、京都を制することも出來る便利がある。正成がこゝを選んだのは、戰略上比類なき達眼者であつたからであつた。

正成と築城術

元弘元年八月には、赤坂城が出來上り菊水の旗が山風に飜つた。俄作りの小城ではあるが、其築城の速かなるには驚かざるを得なかつた。當時の築城は後世の如き、石垣を疊み、水濠を穿つた永久的のものではなく、唯だ城廓の周圍に乾壕を堀り其土を内部に掻き上けて之を障壁とした土城で、所謂「掻上城」の形式であつた。しかも、それは廣袤二町、守兵は僅かに五百に過ぎぬ小城であつた。王朝時代には一時築城術が

赤坂城の防備

赤坂城の包圍

發達したが、武人の興起するに及んで却つて其退歩を見た。源平爭覇時代には、越前の燧城、一の谷、屋島の如き一時的の築城を見たが、鎌倉時代には、殆んど全く築城の術が閑却されてしまつた。然るに正成は築城術に心を用ひ、俄作りの小城に楯籠つて能く大部隊の東軍を支へ得たので、世人皆築城術の必要なことを感知し、こゝに研究の端を開いて、遂に築城術勃興の時代を現出するに至つた。それは、全く正成の力である。

城が出來上ると、正成は心を盡くして防禦工事を施し、山脚には乾濠（からほり）を穿ち、斜面部には鹿柴を列ね、斜面頂には胸壁及び板塀を設け、それらの壁内に大石や大木を貯へ、尙ほ弓矢をも備へた。それらの日にはまだ火器がなかつたから、距つてゐる中は弓矢を射かけ、近づいてからは刀槍を用ゐるといふ戰鬪法であつた。それ故今日から見れば甚だ幼稚な正成の防禦工事も、それらの日に在つては手一杯のものであつた。

工事僅かに成つた時笠置の行在は陷り、敵軍は悉く赤坂に集まつて來た。其兵數は二萬と號し、四道より赤坂城に迫つた。これらの兵士の中には、遙かに東國から上つて來たが、まだ近江へ入らぬ中、笠置城の落ちたことを聞いて落膽し、京都へも入らずに伊賀、伊勢の山を越え、或は宇治醍醐（だいこ）の道を經てひた押しに赤坂城へと押し寄せ

赤坂陷る

たものもあり、其勢は潮の湧くが如くであつた。愈〻赤坂へ着いて見ると城は塀一重の俄造り、彼等は張合（一四）抜けして云つた。「何といふ哀れな敵の有樣だ。此城は俺らの片手に載せて投げられる！　せめて楠木が一日でも持ち堪へてくれたら、俺らも恩賞に與かることが出來ようが」と。

幕兵は九月中に悉く城下に集まつたが、地形が狹隘な爲め、一時に全兵力を用ゐる事が出來ないから、各方面を合して僅に三四千ぐらゐの兵が城壁に迫ることにした。と、正成は、奇計を用ひて立ち所に敵兵數百を討取つたので、敵は驚いて退き、稍〻距離を保つて陣を張ることにした。正成は敵の虛に乘じて城を出でゝ敵陣に向つて奇襲を試みたので、敵は驚いて一里餘も退却したが、又進擊を試みて城下を燒き、鹿柴を取除いて城壁に蝟集した。正成は用意の大木大石を投じてこれを皆殺しにした。

數回の敗軍に懲りて、敵は其後遠捲きに捲いて糧道を絕つことにした。固より俄かの籠城で城中には兵糧が乏しかつたから二十日ばかりで食が盡きた。そこで正成は一計を案じ、一同が自害したやうに見せかけ、風雨烈しき夜、乘じて城を脫出し行衞を暗ました。大塔宮、四條隆資らも、皆間道から吉野又は高野を指して落ち伸びた。（一五）

赤坂が陷つて、畿内は略〻平定した、大軍は陣地を引拂つて京都に歸つた。軈て關

人心の動搖止まず

東の命令が來て二十餘將は京都に駐まつて警備に任じたが、大佛貞直、足利高氏らは兵を率ゐて十一月六日から順々に關東へ引還した。しかし京都は依然物騒がしかつた戰爭をするつもりで出て來た東國の兵士らは、徐々合戰もないので、殺氣が容易に收らず、京中を往來しては街上で喧嘩の花を唉かせたりした。(一六)叡山の僧兵は神輿を擔ぎ出し、南都でも不穩の形勢が現はれた。北條氏の威令は最早諸大名の間には普く行はれない。赤坂城が陷つたからとて、それで變亂は全く收つたわけではない。一波起つて萬波動く諺の通りの勢ひとなつた。此時、備前に義兵を擧げた(一七)櫻山四郎入道慈俊は、一宮に楯籠つて、同國を打ち從へ、之から備中へ出ようか、安藝へ出ようかと思案中笠置が落城して楠木も赤坂で自害したとの報告が傳はつたので、其兵は皆望を失つて離散した。櫻山も均しく落膽し、一族郎黨廿餘人と共に自殺した。

櫻山慈俊の自殺

後醍醐天皇隱岐配流の院宣

元弘元年十二月廿七日、幕府では後醍醐天皇を隱岐に遷幸するの議を定めて、花園上皇の院宣(一八)を請うた。光嚴院卽位の後も、花園上皇が院政を聽いて居られたからである。かく院宣を請うたのは臣子の分として君を配流するのに恐れがあつたのであらう。又天皇が一旦隱岐へ遷られたら、再び皇位に陞られる望みはないから、「御遷幸前にせめて御髮をおろされては如何でございます？」と武家で香染の法衣を調達して元弘二年三月に天皇に奉つた。一度法體になられると、もう皇位に卽かれることは出來ないが、院政だけは差支がない。けれども天皇は法體になることを肯ぜられなかつた。之が爲め二方の君主がある狀態となり、幕府では、其の取扱ひに困つた。(一九)同時に、皇子尊良親王を土佐へ流し、尊澄法親王を讃岐へ流すことに決つた。

天皇京都を出發す

元弘二年三月七日、後醍醐天皇の隱岐遷幸が愈〻決行せられ、天皇は卯の刻(二〇)（午前六時）に網代の御車に召して、六波羅の第を出られた。供奉の人々は、藤原（左近衞中將）行房、六條（左近衞少將）忠顯、大納言小宰相、女房尙侍三位簾子の少數であつた。千葉介貞胤は數百騎を率ゐて之を警固した。天皇は冠を召し、直衣に指貫、白綾の御衣一襲ねを着けられ、南六波羅から六條河原を西へ大宮を下り、御車を東寺の南大門前に駐めしばらくの間祈念を凝らされた。やがて烏羽殿に着き、そこで服裝を改められ御輿に召し替へ、佐々木判官高氏の警固で御發足になつた。道は攝津に入つて、神崎、難波、住吉を經、葦屋の松原、雀の森、生田の里を通れば、須磨、明石の浦が天皇を迎へ、十二日には加古川の宿に着かれた。此時讃岐へ流される尊澄法親王が、加古川の東口までお出になつたと聞いて、御父子の對面を望まれたけれども、警固の武士はそれを許さなかつた。御輿は十七日美作の國に着いたが、御惱の爲め二三日御逗留となつ

た。此時兒島高徳は舟坂山で御輿を奪はうとしたが、機に後れて目的を達しなかつたので、院の庄の行宮に忍び入つて、櫻の樹を削つて「天莫空ニ勾踐一時非レ無二范蠡一」と記し、天皇に勤王の志を抱いてゐるものゝあることを示したと語り傳へられる。

兒島高徳　國分寺の行在所　廷臣の斷罪

院庄　兒島高徳遺跡

さて御輿は久米の四山を越え、出雲の安來港に着し、四月一日そこから二十四隻の大船、數多の小舟を浮べて、海上二十里を無事隱岐島に着し、海岸から少し離れた國分寺を行在所と定められた。隱岐の守護佐々木清高が警固の任を承つた。

五月に入つて幕府は、後醍醐天皇の計畫に與つた廷臣を斷罪した。天皇と僞はつて叡山に上つた師資は下總に流され、公敏、季房の二人は下野に、藤房は常陸に流され閑觀、文觀の二人の流罪も此時一所に實行された。かの日野資朝が佐渡で刑せられたのは、翌六月二日で、俊基が葛原岡で斬られたのは其翌三日であつた。そして十九日には北畠具行が近江の柏原で斬られ、二十五日には、三木左兵衞督光顯が出羽に流された。

（一）『太平記』參照。
（二）文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』參照。
（三）『增鏡』參照。
（四・五）『太平記』。
（六）『增鏡』。
（七）『山陽遺稿』。
（八）九條家實『玉葉』。
（九）『光嚴院宸記』。
（一〇）『光明寺殘篇』。
（一一）『南北朝時代史』。
（一二）『薩摩肥前古文書』。
（一三）『楠氏遺蹟志』參照。
（一四・一五）『太平記』。
（一六）『光嚴院宸記』。
（一七）『太平記』參照。
（一八）『光嚴院宸記』。

鎌倉幕府の命令行はれず

(一九)『太平記』。

(二〇)『増鑑』。

(二一)『太平記』參照。一時、國史の科學的研究が行はれた時、重野文學博士は兒島高德抹殺論を學界に提供したことがあつた。どうも『太平記』以外には、高德の存在を立證するものはないが、故星野文學博士は、小島法師といふものがあつて、それが高德に當りはしないかと云はれたことがあつた。今の華族三宅子爵家は、兒島の末裔だといはれてゐるが、系圖といふものはさう大して當てになるものではない。永く我邦民衆の頭腦に浸み込んでゐる兒島高德が歴史上から消えてしまふといふやうなことは、あまりよい心持のするものでない。

(二二)『光嚴院宸記』。

第三節　護良親王と楠木正成の活動

後醍醐天皇を始め皇子、公卿達をそれ〴〵處分して、北條氏は承久の亂と略〻同樣の功を收めた形であつた。然るに元弘二年六月、大塔宮尊雲法親王は蓄髮して舊の護良親王となり、熊野、吉野方面に義兵を募り、令旨を四方に傳へて勤王の師を招いた。世上はまた物騷がしくなつた。當時京畿の間に住居してゐる人々の間には大體四通り(一)の希望があつた。第一は公卿や僧徒の希望で、飽くまで後醍醐天皇を擁して帝政を回復し

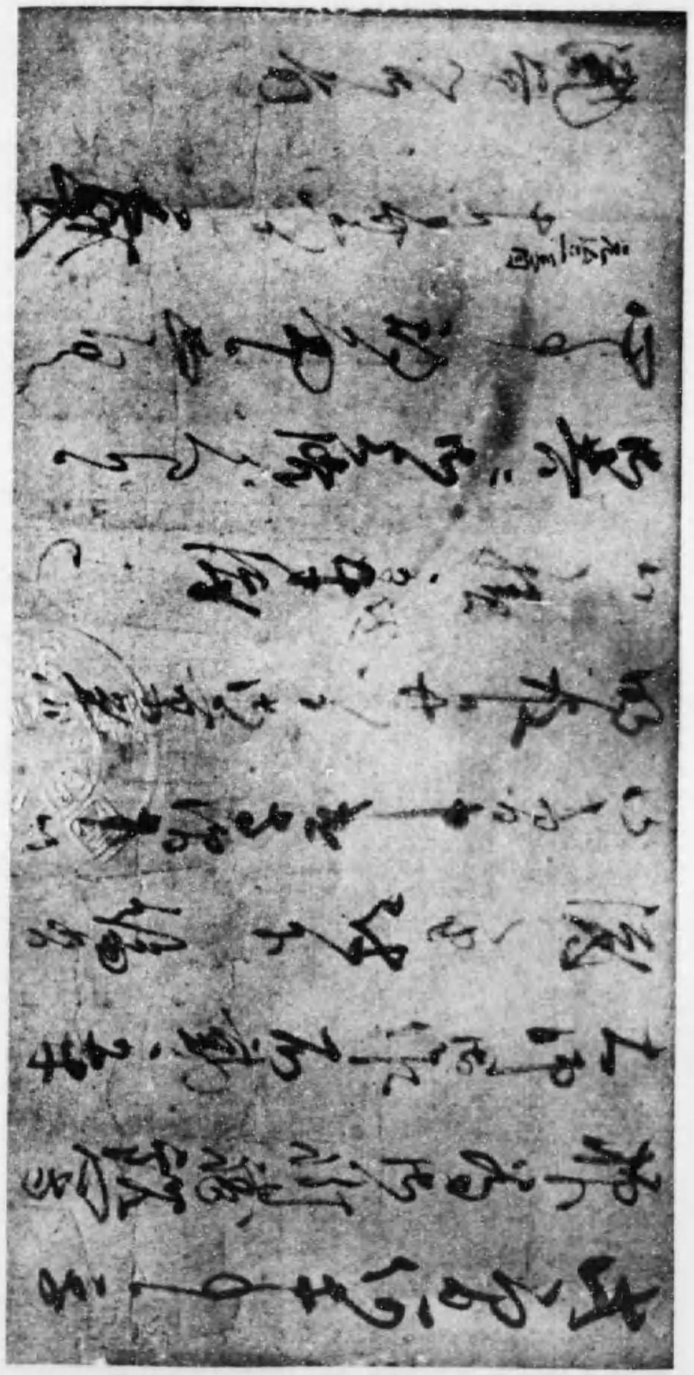
楠木正成の筆蹟といはれるものが、色々な形で、色々な場所に遺つてゐるが、それらは大方眞を措き難いものである。これは河内の觀心寺所藏のもので、正成が瀧覺に對して、綸旨によつて不動像の下附せられるも、幷びに拜受の爲めに早々上洛すべきことを告げたものである。

本文は次ぎのやうである。

此之間何等事候乎。抑爲二御祈禱一觀心寺大師御作不動可レ奉レ渡之由、被レ下二綸旨一候之間、申二遣寺僧方一候。明後日廿八日、御京著候之樣、可レ被レ奉レ渡候也。御供に御上洛候べく候。心事期レ面候。恐々謹言。

元弘三癸酉十月廿六日　正成(花押)

瀧覺御房



ようとする者。第二は諸國の武士のそれで、天皇に應じて幕府を倒し、それを機會に再び平氏の權力を回復しようとする者。第三は源氏の遺類のそれで、此際北條氏を倒して再び源氏の幕府を開かうとする者。第四は幕府を佐けてそれを存續せしめようとする者であつた。北條氏の衰運が乘ずべき隙を與へた爲めに、かうした色々の希望を抱くものが現はれ、それらは相黨して亂を思ふ心が切であつた。けれども微弱な鎌倉幕府の命令は、之を威壓することが出來ない狀態であつた。護良親王の令旨が天下を動搖せしめたのも、所謂「木朽ちて後蟲生ずる」形勢であつた。果然伊勢の竹原八郎が大塔宮の令旨を奉じて、眞先きに義兵を擧げた。元來伊勢、紀伊の地は、平清盛の一門が屬する伊勢平氏の根源地であつたが、元久元年に平賀朝雅が伊賀、伊勢の平氏を破つて以來、彼等は勢力を失つて、源氏系の幕府を怨みながら、蟄伏して、機會の來るのを俟つて居たのであつた。竹原八郎はつまり其代表者で、平氏復興といふ目的を以て動き出したのであつた。而して、かうした關係に、伊勢と吉野朝廷とを結びつけ、後には、南伊勢は伊勢國司北畠氏の領地となつて、吉野朝廷の東國を經營する根據地となつた。元々こゝは伊勢平氏の領家であつた。

大塔宮は、赤坂城陷落後、南都の般若寺に潛伏して居たが、一乘院の候人按察法眼（アゼチハフゲン）

大塔宮般若寺の危難

熊野落ち

好專がそれを偵知し、五百餘騎を率ゐて或朝未明に般若寺を襲うた。大塔宮は名を變へて潛んで居たので、手勢は一人もなく、從つて防戰する術もないので、自害しようとしたが、考へ直してどこかへ隱れようと、佛殿へ入つて見ると、大般若經の唐櫃がある。其中へ身を潛めて、僅かに難を免れた。

しかし、かうなつては、南都邊にまご〳〵してゐる譯には行かない。宮は、般若寺を去つて、熊野の方へ落ち行かれた。此時お供の人々は光林房女尊、赤松律師則祐、木寺相摸、岡本三河房、武藤房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎等僅か八九人。いづれも柿色の衣に笈を掛け、頭巾を戴き山伏の能野詣での體に見せかけた。幾日か經て切目の王子に着いて聞くと、熊野はまだ人心が不和で、義に應ずる者が少からうとの事であつたから、思案を變へて十津河へ向つた。十津川では土地の豪族戸野兵衞の家に宿り、本名を告げて援助を乞うた。竹原八郎入道は此兵衞の叔父で、此時宮を奉じて義兵を擧げたのであつた。宮はそこで還俗して、竹原の女を納れられた。熊野別當定遍は此事を聞いて一手の軍隊を十津川に遣つた。宮は潛かに十津川を發して高野に向つたが、芋瀬庄司の爲めに道を遮られた。庄司は使者を大塔宮に遣つて「家來の中一兩人を手に留められるか、或は錦の御旗を賜はられるかすれば、幕府の咎めは蒙るまいから、此處をお通し申しませう」と云はしめたので宮は錦の御旗を渡して漸くそこを通過されたが、後れて來た村上彦四郎義光は、庄司と出會つて、錦の御旗を見不思議に思つて理由を聞いたら、庄司は事の次第々々語つた。義光は怒つて、旗を奪ひ取り、悠々として去つて、宮の後を追うた。

村上義光墳墓

そこから宮は小原をさして進まれたが、途中で玉置の庄司の軍隊に逢ひ、將に捕へられようとした。偶〻紀伊の野長瀨六郎、同七郎兄弟が、三千餘騎を率ゐて宮を迎へたので、槇野の城に入ることになつた。しかし、其城は狹かつたから、吉野の僧兵を語らうて愛善寶塔に城を構へ、吉野河を前に當て、要害となし、三千餘騎を以て之を守ることにした。此間に、宮は高野山へ令旨を下して、其援を借らんことを企てた。ところが高野では、僧兵を蓄へず、又干戈を執るのは僧家の所爲でないといふ決議をしたといふが、それは表面の言ひ分で、

内實は十分の好意を寄せてゐたものと見え、吉野城が陷つた時には、宮は高野に遁れて僧徒らの保護を受けられた。其事は、建武中興の後、後醍醐帝が綸旨を高野山に下して、大塔宮を救つた功を賞し、舊領を永く安堵せしめるといふ沙汰のあつたのを見れば分る。獨り大塔宮のみならず、楠木正成(七)の再擧に當つても、高野山では正成の爲めに祈禱をしたといふ。

楠木正成は赤坂城陷落の後、一時姿を隱してゐたが、大塔宮(八)と後々の相談をして一時別れたまでいあるから、間もなく金剛山に入つて千早城を築き、吉野の大塔宮と相呼應した。それは元弘二年の末であつた。千早城は金剛山の西腹に在つて、四面は谷に臨んでゐる。卽ち東は百丈、西は七十五丈、南は八十丈、北は三十丈の斷崖で千早村から一條の隘路があるばかりの天嶮で、しかも山下の形勢は歷々指呼すべく、城中には五ヶ所の祕水と稱する不斷の湧泉があり、夏時でも水の減ずる事がない、眞に難攻不落の堅城である。

『太平記』には、元弘二年四月三日、正成は五百騎を率ゐて赤坂城を攻めたとあるが、之は時日の相違と見える。赤坂が落城して正成の行衞を晦ましたのは、元弘元年十月の末で、其後機會を窺つて金剛山に隱れて居た爲め、翌元弘二年の五月頃までは一時

正成の金剛山

正成赤坂を復す

天下が靜謐であつて、其間に後醍醐帝の遷幸、其他兩宮諸公卿の斷罪が行はれたのであつた。だから正成が赤坂城を攻めたのは、元弘二年の末千早城を築いて再び姿を現はした後の事であらねばならない。此時赤坂城には、六波羅の命を受けて來た湯淺孫六入道定佛(ぢやうぶつ)が、地頭職としてそこを守つて居た。正成は已に千早城も出來上つたから、先づ赤坂城を回復しようと、精兵五百餘騎を率ゐて進攻した。守將湯淺は兵糧の川意が乏しかつたので、本領の紀伊河瀨川から人夫五六百人に兵糧を運ばせて、夜中窃かに城へ入れさせる計畫であつた。ところが正成は早くもそれを偵知し、伏兵を設けて兵糧を奪ひ、其儀に甲冑武具を入替へて馬に負はせ、我手の兵士を人夫に仕立て、之を運ばせ、武裝した兵士二三百人をそれに差添へた。そして其後からは楠木軍が追つかける體に見せかけ、追ひつ返しつ八百長戰を試みつゝ赤坂城に追付いた。湯淺入道はそれを見て、自分の輜重隊が來たものと誤信し、城中から打つて出て、輜重を城中に扶け入れた。ところが人夫は、城中に入るなり直ぐ儀を開いて甲冑武器を身に着け、鬨の聲を揚けて湯淺の不意を襲ひ、一方木戸を開いて身方の兵を誘き入れた。湯淺はどうすることも出來ず降つて、赤坂城は一夜にして回復(九)された。

正成はかうして最初の一戰に功を收めたので、暫時兵馬を休ませた後、和泉、河內

の兩國を循へて、其軍勢も彼是二千餘騎となつた。で、住吉(一〇)、天王寺附近に進み渡邊橋の南に陣を取つた。楠木が京都へ攻め上つて來るといふ噂が立つて、洛中は混亂に陷つた。そこで兩六波羅では、早速畿内近國の兵五千餘騎を集め、六波羅奉行隅田道治、高橋宗康の兩人をして、之を率ゐて天王寺に向はしめた。

渡邊橋は、寡兵を以て持久戰を試みるのに適した地形で、我から進んで强大な敵軍を擊つのには不適當である。それ故、正成は、川を渡るの危險を避け、專ら敵を誘ひ出して之を窮地に陷れ、一擧にして殲滅してしまふ計略を取つた。卽ち正成は、敵を天王寺方面まで誘き出して邀擊し、別隊を以て其側背を掩擊しようとしたのであつた。そこで、主軍を天王寺に集め、一隊を住吉に置き、別に三百の兵を渡邊橋畔に出して之を固守するが如く見せかけた。敵兵は楠木軍の弱小を侮つて大擧蠭進した。橋畔の兵は且つ戰ひ且つ走り、敵を天王寺迄誘き入れて、三面から之を包圍攻擊し、遂に渡邊橋の隘路に押詰めて殲滅してしまつた。

六波羅では此敗報に接して大に驚き、其時關東から上洛した勇將宇都宮治部大輔公綱を遣はして再び天王寺に向はしめた。宇都宮は千騎足らずの決死隊を率ゐて疾風の如く進んだ。正成はそれを見て「此分では、戰つたならば、敵身方共に大きな損害を蒙らう。戰はないで敵を屈しなければならぬ」と、天王寺の陣を引拂つて遙かに退き兵を分けて四周の峯々へ走らせ、夥だしく篝火を焚かせた。宇都宮の軍勢はそれを見て、正成の兵數が非常に多いと速斷し、戰はうとする勇氣が消えた。宇都宮はそこで、天王寺から敵を追拂つたといふことを手柄にして、兵を纏めて京都へと引返(一一)してしまつた。

正成は再び兵を進めて天王寺を占領したが、或日寺に詣で、寺僧に聖德太子の『未來記』(一二)を見せて貰つた。其文には「人王九十五代の時、天下が大に亂れ東海の魚が四海を呑み、日が三百七十餘日の間西天に沒するであらう。然るに西鳥が來て東魚を食ひ、其後三年間海内は一に歸すが、間もなく獼猴の如き者が天下を掠め、三十餘年の大凶が續いた後一元に歸さう」といふ意味が書いてあつた。正成は之を見て、これは正しく現代のことを云つたものだ。天皇が隱岐に在らせらるゝのは暫らくで、勤王の士が所在に現はれ、關東を亡ぼすのは間もあるまいと、心に成功を期して愈忠誠を勵んだと言はれる。固より傳說に過ぎないのではあるが、さうしたことで士卒の氣を勵したやうなこともなかつたではあるまい。

吉野城の護良親王は、正成の天王寺における捷報を聞き、此方からも進擊しようと

天王寺合戰

正成の奇計六波羅勢を屈す

天王寺の『未來記』

天下勤王の軍大いに動く

元弘二年十二月九日京師に向つて進軍し山崎まで來た。六波羅からは宇都宮公綱が來り、仁定寺(一三)の護良親王の陣營を襲うて、十五日にそれを陷れた。けれども一方には正成、他方には護良親王といふ風に、義兵が進んで京洛をさへ脅かすやうになつたので六波羅では大いに氣を揉み、關東に早馬を立て、征討の大軍を送れといつたが、幕府の威令已に衰へて、直ちに軍隊を出動せしめることが出來なかつた。其中に全國の豪族中には、護良親王の令旨を奉じて兵を擧ぐるものが次第に現はれた。

正成再び天王寺に進む

元弘二年が暮れて三年の春が來た。北國はまだ寒いけれど、攝河泉の平野は已に陽氣が立つた。正成はぼつ〳〵出動を始め、正月五日に河內國甲斐庄安滿見(一四)に攻め入り、紀伊の敵、井上入道、山井五郎らを追落し、十五日には和泉守護代、和泉守護代以下地頭家人らを討ち取り、同十四日には河內守護代、十六日には更に進んで四天王寺に陣を張つた。六波羅軍が來て攻めたけれども、勝つことは出來なかつた。此日楠木軍は渡邊まで攻めて敵の兵糧をさへも鹵獲した。

關東の大軍京師に入る

正月二十九日になつて、關東の大軍が京都に着いた。其大將(一五)は二階堂出羽入道道蘊、大佛高直、阿曾彈正少弼らを始め宗徒の大名百三十二人で、兵數は三十萬で、他に四國防長北陸の兵を合せて、全國の兵が八十萬(一六)あると註せられた。しかし或書には八萬と記し、又四十六萬ともしてある。兎も角も平安城開いて以來の大軍が入り込んで京都の騷擾は言はんばかりでなかつた。其大軍は三手に分けられ、吉野、赤坂、金剛山の三城に向つた。護良親王の吉野城へは、二階堂道蘊、金剛山へは大佛高直、赤坂へは阿曾彈正が向つた。

赤坂又陷る

最初に東軍の攻圍を受けたのは赤坂城であつた。一握りの小城を雲霞の如く取卷いて關東軍は息をも繼がせず十餘日の間攻め續けに攻めたが、城は三方とも屏風の如き斷岸で、南方のみ平地に續いて居るばかりであるのに、堀を深く廣く堀つて岸には塀を築いて其上へ櫓を掻列べたから、敵は攻め立てやうがない。五六百の手負死人が每日のやうに出來る。そこで寄手は城に續いた山の尾を堀切つて、山上からの水の手(一八)を斷つた。十二日の後には城中の飮料水が盡きたので、將士は皆出で降り、赤坂城は遂に敵の手に歸した。

吉野城陷る

次ぎに吉野の戰況はどうかと見ると、此手の東軍は二階堂道蘊(一九)を大將として、六萬餘騎の大軍が犇々と城を圍み、晝夜七日の間息をもつがずに攻め立てたが、城中は更に弱る氣色もなく、寄手の損害は幾千といふ多數に上つた。其中赤坂が陷つたといふ報告があり、寄手も大いに氣を揉み、「案內知つた者を選んで城の後の金峯山から、一手

の勢を城中へ忍び入らせる策を立てた。然るに金峯山の方面は、天嶮を恃んで守備がなかつたので、遂に敵の乘ずるところとなり、敵は潜入して城に火を懸けた。それを合圖に大手の敵は總攻撃を開始し、猛烈に攻立てたから城兵は大半討死し、大手の木戸外の堀は死人で埋まつて平地になつた。此時搦手から城中に討入つた敵は大塔宮の御座所に充てた藏王堂へ亂入した。宮は最早(二〇)や遁れられぬ覺悟で、赤地錦の鎧直垂に緋縅の甲、龍頭の冑の緒を締めて、三尺五寸の小長刀(なぎなた)を手挾み、股肱の勇士二十餘人を前後左右に隨へて敵軍中へ斬つて入つた。敵は、其の勢ひに恐れて一時さつと引退つた。此間に宮は藏王堂の大庭で最後の酒宴を開き、大盃三度までも傾けられた。木寺相模は又四尺三寸の太刀に敵將の首を貫いて、詩を吟じつゝ、御前で舞つた。其勇ましい舞を此世の見納めに宮を首め一同自害をしようとしたところへ、大手の木戸を支へて居た村上義光(二一)が、甲に十六筋の矢を受けた儘大童になつて御前へ駈け戻り、切に自害を止めて、宮の甲と直垂とを其身に着け身代となつて二の木戸の高櫓の上に突立ち、大塔宮と名乘つて切腹した。敵軍は之を見て宮の御首を獲ようと四方の圍を解いて吾先きに二の木戸へ集つた間に、宮は城を脱出して、高野へと落ち行かれた。其途中吉野の執行が五百餘騎を引連れて、宮を討取らうとしたが、村上義光の子の義隆が踏止つて戰死し、其間に宮は危く逃げ伸びられた。

二階堂消滅は、後で村上の身代りを知り、直ちに高野へ押寄せて陣を大塔に取り、宮の在所を搜したけれども、一山の衆徒等心を合せて宮を庇護したので、遂にそれを發見することが出來ず、軍を返して正成の千早城に向つた。此時高野の僧徒(二二)は、宮を天井裏に隱したと言ひ傳へられる。

近畿の地形と戰術

茲に一つ注意しなければならないことは、近畿地方の地形と戰術との關係である。當時の戰鬪は主として騎兵戰で關東の軍は騎兵の多いことを其誇り(二三)としてゐた。しかし、それらの日に於いては騎兵の突擊は決して最後の決勝を齎すべき力ではなかつた大河に逢へば騎兵は其效力の一半を失ひ、又山地戰では殆ど全く用を爲さなかつた。大和、河内、和泉、伊賀、伊勢、紀伊の諸山脈と、これらの山脈から發する幾多の河流とは、關東軍の賴みとする騎兵の働きを甚だしく鈍らした。吉野の南方に連る熊野川の細い溪谷にある十津川鄕は、昔から人馬不通の場所として知られ、土地の豪族らは其天嶮(二四)を恃んで、「我領内は狹いけれど、四方が皆嶮岨で、鳥も翔り難い要害である」と誇つてゐた。伊賀あたりの土豪が近世砲術の戰爭に應用せられるまで、將軍家が幾度變つても、山間の嶮岨に蟠居して獨立を保ち得たのはこれが爲めであつた。又紀伊

播磨の赤松氏

の熊野が江戸時代の初期までも天下に志を得ない不逞の徒の潜伏所であつたのもこれが爲めであつた。つまり大臺原、大峯、山上岳、高野山等を有する山脈に抱かれた谿谷は、天下の大兵を以てしても容易に奪ひがたい天嶮であつて、それを大塔宮や正成は根據地としたのであつた。[二五]

赤松則祐像

しかし大塔宮の吉野城は遂に陷つて、東軍の兵は悉く千早城に迫つた。其兵數百萬と號せられた。さうした大軍を金剛山の一角にある掌大の小城に引受けて神變不思議の働きをした楠木正成の智略は、却つて天下の耳目を聳動するのに都合がよかつた。其間に大塔宮の令旨は、全國の津々浦に傳はつた。先づそれに應じて義兵を起したものは赤松[二六]則村であつた。元來赤松氏は村上源氏の系統で、播磨國赤穗郡赤松莊の地頭であつた。之より先き、大塔宮が天台座主であつた時、赤松律師則祐は隨身として比叡山延曆寺に居たが、元弘三年の春故鄕播磨に歸つて、父則村に擧兵を勸めたのであつた。當時、楠木の千早城は堅くして拔けず京都の兩六波羅

九州の勤王軍

伊豫の河野氏

は至つて無勢だといふ噂が傳はつたので、則村は播磨の苔縄城から打つて出で、三石山に城廓を構へて附近の武士に擧兵を勸めた。備前の守護加治源二郎左衛門は、兵を提げて則村と戰つたが、戰ひ敗れて兒島方面へ退却した。赤松軍はそれが爲めに兵勢頓に振ひ、西國への道路を遮斷したので、中國一圓は動亂の巷と變じた。其時、大塔宮の令旨を受けた播磨國明石郡の大山寺は、赤松軍の應援として寺内の僧兵を三石山に遣はした。

恰[ちやう]と其頃、肥前國彼杵[ソノキ]郡千綿[チワタ]山の修驗[二七]僧は、土佐へ渡つて、前年そこに流されてた尊良親王を偸み出し、伴ひ歸つて、其山中に庇蔭[かくま]つてゐた。又阿蘇[二八]大宮司は幕府の動員令に應じ、金剛山討伐軍に加はるつもりであつたが、途中で大塔宮の令旨に接し、博多の九州探題北條英時を討滅せよとの命を受けたので、俄かに勤王を思ひ立つて本國へ引返した。かうした風に、九州には、續々と義兵を擧ぐるものが現はれた。

と同時に、伊豫でも義兵が擧げられた。其著名なのは河野の一族土居通增、得能通綱らの勤王[二九]軍であつた。元弘三年閏二月十一日、長門探題北條時直は、土居、得能の軍を攻撃する爲め伊豫の國に渡つて、先づ兵糧米を海岸に揚げ、所々の要害を占領して陣地にしようとして居るところへ、部下の者が變心して後矢を射かける計略がある

と告げたので、時直は驚いて、馬も、鞍も、兵糧も打棄て、夜中に海上を長門へと逃げ去つた。元來河野氏は、伊豫國風早郡河野鄕の舊族で、代々守護職に任じてゐたが承久の亂に河野通信は官軍に加擔して流罪に處せられ、其子道久は幕府に屬して本領を安堵した。其孫の道有は弘安の役に殊勳を立てた人であつたが、我子に後を讓らずして、同族通盛に本領を繼がせたので、それ以來一族が不和となつた。通有の末弟通成は風早郡の土居莊に居り、又通久の庶弟通俊は桑村郡に居つた。通增は通成の子で、通綱は通俊の曾孫であつた。かうした關係で、土居と得能とは宮方に應じて義兵を擧げたが、河野通盛は六波羅方についた。

護良親王は擧兵の際、長く天台座主として全國の各寺院に因緣が深かつた關係から吉野以西十五箇國の僧徒を仲介者として、關東に不平を抱いてゐる地方豪族を勸誘せられた。元弘三年二月、三月になると其效果が現はれ、西方勤王の兵が續々と京畿に馳集つた。楠木の千早城に楯籠つた者は、單に河內和泉紀伊など附近の兵士ばかりでなく、西方諸國から來たものも混つて居たらしい。更に又大塔宮の命を受けた吉野十津川の野伏らは、かねてから案內を知つた山谷に出沒して東軍の糧道を絕つたりした。吉野の城の陷る頃には、西國各地に勤王の兵が蜂起したといふ噂が滿つたので、關東

千早城益〻堅し

の命に應じて畿內に出兵中であつた西國の守護らは、本國が心元ないと云つて多くは引還したので、千早城の寄手は一層氣勢が揚らず、惰氣漫々更らに戰意がなかつた。のみならず、屢々正成の奇計に遭うて非常の損害を被り、軍紀は紊れ、內訌は生じ、已に三箇月を經過しても、城を拔くことが出來なかつた。(三〇) 交通の不便な時代であつたけれども、此戰狀は全國に知れ渡つて、人々は北條氏の武威の甚だしく衰へた事を感得した。勤王の志を抱きながら北條氏の實力を測りかねて形勢を觀望して居た諸國の土豪は相續いで起つて義兵を擧げた。つまり千早の攻圍戰の不結果は、北條氏の勢力の已に去つたとを事實に證明したのであつた。足利高氏や新田義貞が、北條氏に反抗して起つに至つたのも、千早攻めの試驗に東軍が落第したのを見て決心したのであつた。此點から觀て建武中興の大業は正成の功が一番大きいといつても差支がない。

千早は北條氏の試金石

(一)文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』
(二)『光嚴院宸記』
(三)―五)『太平記』參照。
(六)『高野寶簡集』
(七)金剛寺文書
(八)『保曆間記』

(九)『神明鏡』及び『南朝太平記』
(一〇)『太平記』
(一一)『楠木合戰注文』
(一二)『太平記』
(一三)『身延山御藏金剛集裏書』
(一四)『楠木合戰注文』
(一五・一六)『太平記』
(一七)『神明鏡』
(一八)『南朝太平記』
(一九・二〇)『太平記』
(二一)『保歷間記』
(二二)『高野春秋』
(二三)『太平記』
(二四)『東鑑』
(二五)山路愛山氏『足利尊氏論』
(二六)『太平記』
(二七)『博多日記』
(二八)『阿蘇惟澄申狀』

(二九)『集古文集』及び『博多日記』。
(三〇)『太平記』。

第四節　船上山行幸

元弘三年二月初旬、日本海にも一陽來復の春景色が動き出して、久しく吹き續けた風雪も止み、麗かなる日ざしに、のたり〳〵と隱岐の島根を洗ふ小波は晝のやうに美しく、今まで凍付いて居た人々の心にも、どうやら新らしい希望の芽が吹き出した。

已に一年近くも隱岐の島に遷幸の身となつて國分寺に配所の月を眺めてゐられた後醍醐天皇も今はじつとして居られない。思へば無念の至り、此儘此の遠島に幽囚の身となつて一命を終る位ならいつそ一大飛躍を試みよう。たとへ事成らずして逆臣の手に斃れようとも元々である。都はやがて春の花盛り、我身にも今一度花咲く春が來なからうか！　と或夜眠られぬ苦しさの瞑想に深くも覺悟を極められた。去年の隱謀は後醍醐天皇が眞に覺悟をせぬ中に發覺して、脆くも失敗に歸した。しかしそれ以來遷幸の身となつて、具さに辛苦を嘗められたので、天皇は最早薄志弱行の不平家たる域を脫して、百尺竿頭一歩を進むる勇敢果斷の實行家となられた。天皇に取つては、こ

れ以上の零落は無い、一歩でも動けば動くだけ好機會に乘ずるとになる。今は何を恐れ、何を憚らう！　只だ此窮境を脫すべきのみである。かう天皇が考へてゐられた時、(一)護良親王の密使は屢〻天皇の幽所に來つて、近畿は勿論全國に勤王軍の蜂起の趣きを報告したので、天皇は最早躊躇してゐる時でないと決心せられた。

そこで天皇は京都から供奉して常にお側に侍する腹心成田(二)入道を召し覺悟の程を打明けられ「警固の中にも、忠義の者が一人や二人は無いこともあるまい。此島を逃け出して伯耆の國へ着くまで道案内をしてくれるものを探してくれ」との御意。成田入道は畏まつて、日頃目を掛けてゐる土屋又四郎を連れて御前に參ると、天皇は六條忠顯をして密かに勅諚を又四郎に傳へしめ、「此度思ひ立つたことがあつて、此島を脫けて伯耆の港へ上るつもりであるから汝を頼む」と仰せ出された。又四郎は謹んでお請けをしたが、「しかし、手前のやうな小身者には、とても此大事が勤まりさうにもありませぬ。伯耆國名和庄の地頭に村上又太郎長高と申す者がございます。弓箭取つては豪の者の殊に智勇優れ、一族も皆武藝に秀で、居るから、之をお頼みになつたら宜しからうと思ひます。此外にはちよつと大事を托すべき者が見當りませぬ」と答へた。

そこで(三)天皇は忠顯らと相談の上、其折、國分寺の御座所警固の任を承つた島内の地頭

御家人らを召して前の如く尋ねられると、二十四人まで土屋と同じく村上長高を名差し、彼れこそは近國隨一の豪士で、我君が大事を圖られるのに適當な人物であると答へた。そこで長高を頼るとに決め、天皇は二月二十七日、愈〻忠顯以下近侍の者數人と國分寺を脫して溶邊に至り、富士名三郎らに護衛を仰せ付け、一漁船を求めてそれに乘つた。船が僅かに岸を離れた其時、釣船を出して居た土地の漁夫らは見咎めて「其船に乘つてをられるのは誰れ〳〵だ」と船を取り圍んでひし〳〵と迫つた。忠顯は何氣なく裝つて「これはさる方が神詣でに赴かれるので、決して怪しい筋ではござらぬ」と言ひ放つたが、漁夫らはなか〳〵承知せず「いや〳〵、田舍では見も習はぬ人體、只人とは思はれない。世間では此頃、隱岐遷幸中の帝が御逃亡の企てがあると噂とり〳〵何樣其樣にも見える。其儘に見遁すわけには參らぬ」と、楫を取り違へて御船を陸の方へ漕ぎ戻さうとする。忠顯はそれを見て、「不屆極まる奴らぢや」と船中にあつた弓を取つて釣船の端を強く突くと、船はさつと左右に開いた。忠顯は早くも矢を差し番うて續けさまに射かけたから、釣船も近付くこともならずまご〳〵してゐる間に、天皇の船はする〳〵と波の上を辷つて出た。

杵築神社の神主は之を諜知し、遽かに船を漕ぎ出して追つかけたが、忽ち烈風が吹

乾鯛後の御難

き荒んで、進退が意の如くならず、辛くも岸に漕ぎ戻つた。風の間に〳〵御座船が流れて居る中、日が暮れて、陸の方には無數の松明が天上の星と擬ふばかり、罵り噪ぐ人聲さへも遙に聞えて、天皇を捜し索めてゐる樣子。船を岸に着ける譯にも行かない。折角護衛者と賴んだ富士名三郎らは、神主の手に捕はれた。夜に入つて風強く、御座船は今にも覆らんばかり、一同は安き心もない。其時天皇は忠顯に向ひ竹の葉がないかとの仰せ、船中にさうした物の有らう筈はないが、しかし無下に無いとも申上けかね、「尋ねて參りませう」と、忠顯は御前を立つて苫の下を探すと、不思議にも一枝の竹がある。心嬉しくそれを取つて奉ると、天皇は氣もいそ〳〵竹の葉を裂いて、手づから笹船を三つ造り、御守袋から舍利を三粒取出して、一粒づゝそれに入れ、海上に浮べて良、久しく祈念を凝らされた。程なく海上は穩かになつて、夜がほの〴〵と明くれば、二十八日、天皇の御船は東を指して飛ぶが如くに駛せた。纜て伯耆の沖に達し、一隻の釣船に出會つて「こゝの濱は何と言ふ處か」と問ふと「片貝の濱だ」と答へる。「名和庄といふは何處か」と重ねて尋ねると「それは早や過ぎて居ます」といふ。「いくら隔つてをるか」と問へば「五里許り」といふ。「然らば疾く漕ぎ戻せ」と天皇の仰せを遮つて、供奉の人々「東へ馳せよとならは、如何やうにでもして仰せに從ひませうが、御覽じませ、後の方からはあの通りの追手船、何としてあの中へ漕ぎ戻されませう？」と楫取共は一同手を控へて顏を見合せる。忠顯は聲を勵まして「者共躊躇ふな、唯だ疾く御船を戻せ。思ふ仔細あつての勅諚故、決して違背するな」と叱咤する。楫取共勅諚頻りなる故、今は力及ばず、天皇と忠顯とを船底に隱し、其上に乾鯛俵を積み重ねて、船を西へと漕ぎ戻した。

佐々木清高

此時隱岐の守護人佐々木清高は、數多の船を出して後醍醐天皇を追つかけ、已に御船に近づいて居た。忠顯は舟子に命じて清高の弟能登守と參河守の乘つて居る船の間へと漕ぎ進ませた。楫取らは虎穴に入つて活を求むるの大膽な計略を取つて、猶豫なく兩船の間を摺れ〳〵に漕ぎ過ぐる。其時能登守は聲をかけて「彼方で怪しい船に逢はなかつたか」と問ふ。楫取共今は絶對絶命、勇氣を振ひ起して「さう申せば一艘の怪しげな船が、遙かに彼方へ遁けてゆきました。今頃は因幡の國境に懸つてゐるでせう」と答へる。「何といふ逃げ足の早さぢや、急け〳〵」と、追手の船軍は、一散に東を望んで馳る。

大坂の港に着す

御座船は危く虎口を遁れて、之も急げ々々と反對の方へ漕ぎ進む。人々少しは生心地になつて見ると、隱岐を出てからまだ一度も食事を取らぬので疲勞が甚だしい。天

名和庄の豪族又太郎長高

皇は水を求められて大坂の港といふ處に船を寄せられた。楫取らは御船を海岸に進めて、陸に飛び上るや否や、一散に駈け出して行方も知らずなつた。其中人々が、附近の在家から水を求めて勸めたけれども、楫取らに逃げられて水も咽喉を通らぬ有樣、再び船を漕ぎ出す便もない。依つて天皇は成田小三郎入道を召して、早速名和庄の地頭村上又太郎長高の館を尋ねて、彼等（われら）が此處に着いたことを告げ、彼を賴みて大事を擧げよ」との仰せ。入道は畏つて御前を退いた。

成田小三郎入道は土地の案内を知らないから、どこをどう指して行くか分らないけれど、勅諚は背き難いから、兎に角一番大きい道を西を指して急いだ。十丁餘りも來て畠打つ者に名和庄はどちらかと問ふと「之から西へ二里許りです」との答へに「名和庄の地頭又太郎は目下當地に居るか」と折返して尋ねると、「されば さ、地頭は當時上京して、千破劒の敵と合戰して居ると聞いてゐますが」との答。成田入道は力を落して、そこに茫然と立ち盡した。と傍にゐた今一人の男が、「否、上京したのは又太郎の嫡子で、又太郎殿は當地に居らるゝ筈。昨日までもたしかに大蓼目の物音がして居りました」といふ。成田入道は之に力を得て、又一散に驅け出した。正午頃やつと名和の庄に着いて、彼は案内も乞はずに邸内に走り入り、「人傳には言へぬ大事の使者、地頭に

成田入道

會うて直接に申し入れたい事がある」と叫ぶ。物越しに此樣子を見て居た長高は、只事ならじと走り出で、門の脇の一室に誘ひ入れて、人々を退けた。入道は容を改めて、「隱岐の帝が只今當地の海岸に落ち延びられ、兎も角も長高を賴み參れとの御諚。此事は疾くからの御計畫で、身方に賴むべきものは只だ長高のみだと深き思召。若し賴みに應せずとならば、朕を捉へて鎌倉の勳功に預かれよ、再び隱岐の守護佐々木の手に は懸らぬとの勅諚でございます」と說く。長高は少し身を退き下り、涙を流して云ふには、「一天萬乘の君の勅諚を蒙つて、誰れが彼れ是れ申しませう。命を失つても御警護を致しませうから、御安心下さい」と、內へ入つて、食事を調へて進めた。

やがて長高は褐色の直垂に小具足を着け、折烏帽子を引立て、現はれ、家の子郎黨を呼び集めて「此度隱岐の帝（みかど）には、此の長高をお賴みあつて、已に大坂の港へ着岸せられたさうである。一天萬乘の君から有り難い勅諚を蒙るのは、誠に生前の面目。我等が尸を苔下に埋めて。名を後代に殘すべき時が來た。若し お前達の中で不服に思ふものがあるなら、それは手々の心に任せるが、此長高は最早一筋に思ひ切つた。どんな諫言にも耳は藉さぬ！　これから直ぐ君のお供をして船上山へ馳せ登り、事成らずは切腹して果てるまでだ」と決心の色を顏に表はして云つた。一族郎黨はみなそれに同

天皇を船上山に奉ず

長高決心の動機

意した。

そこで長高は、館に居る限りの僅少の手勢を率ゐて海岸に赴き、天皇に謁して奉公の志を述べ、直ぐ船上山の要害に楯籠る事となつた。其時天皇はひどく疲労して居られたので馬を進めたが、道が険阻で馬上の登山は危険であつた。長高は郎黨らに命じて樹枝、芦などを刈り集め、各自の上帯を解いてそれを結びあはせ、俄造りの輿を造つてそれに天皇を載せて山上へ舁き上げた。(五)

疾風迅雷にも譬へつべき長高の此行動は、郎黨をすら驚かしたであらう。彼れが貧弱な一地頭の身を以て、勅命とはいへ、かうした行動に出づるには、非常な決心と十分の自信とがなければならなかつた。出雲には鹽冶高貞が守護として控へて居り、隠岐の佐々木清高は、既に天皇を逐うて伯耆に向つてゐる。附近にも武家方の土豪が少かずゐて、機會があれば一軍して功名手柄を立てようとしてゐる。いはゞ長高は四周を強敵に圍まれながら、此大膽な籠城を企てたのであつた。彼れは決心の當初から既に死を覺悟してゐた彼れは、死を以て忠誠にかへることを名譽としたのであつた。それらの日に北條氏の勢力は衰へてゐたとは云ひながら、武士は大方鎌倉方に附いて、宮方に附かうといふやうなものはなかつた。武家方の爲めに努

二つの動因

家族の覺悟

四圍の形勢

力して一寸の土地でも多く賞賜されたいといふのが、當時の武士一般の希望であつた。さうした武士の間に、長高のやうなものが現はれたのには、何か動因がなければならなかつた。家系に對する自覺と、長高の教養とは、少くとも其重な動因でなければならなかつた。家系に對する自覺と、教養による自信とが結び附いて、彼れに力を與へ決心を與へ、死を覺悟して勤王の義兵を擧げしめるに至つたのであつた。

倉卒に事を擧げて家族を顧る遑のなかつた彼れは、船上山へ向ふ途中、妻子や老人のことを思ひ浮べ、どうかして見苦しからぬ處置をしたいものと、二男の基長を館に遣はして「體好きやうに取計らへ」と命じた。基長が館に歸つた時には、母は已に死を決して居て「後顧の患ひのないやう、私は此場で自害して果てる」といつた。基長も到底勝算のない義擧であるから、いつそ老幼を自分の手にかけて殺し、館には火をかけて灰燼にしようと思つた。けれども、郎黨が頻りに諫めたので、一先づ家族を引纏めて船上山に赴く事にした。

基長は又館を引揚げる時、中間の藤七を附近の土豪、稻井瀬の五郎三郎義弘と加茂の梶岡入道の館に遣はして身方に加はることを勸めた。梶岡入道は心が迷つて直ぐに確答をしなかつたが、五郎三郎義弘は其勸誘を嘲つて、「人間は心が驕ると、分不相應の

事を思ひ立つものだ、餘りに自分の勇を恃んで、人を人とも思はず、近國の者を賤める のは一家破滅の基になる。但し其方は使者の事だから、一命は許してやる。疾く歸つ てさう云へ」と罵つた。此嘲罵は、さすがに、理窟のあることで、當時の狀勢から云へ ば、義弘がさう考へるのに無理はなかつた。長高が如何に勇武であつても、四面敵の中 に立つて義擧を思ひ立つたのは、眞に人を人とも思はぬ慢心の沙汰であつた。で、義 弘は基長の使者を追ひ返すと、直ぐ身仕度をして、郎黨を從へて、天皇を追跡し來つた 隱岐判官佐々木清高の陣所に駈けつけ、速かに船上山を攻むべきことを勸めた。間もな く、加茂の梶岡入道も、船上義擧の危險を豫想して佐々木の陣所に來て、共に船上山 攻擊の急ぐべきことを說いた。若し清高にしてこれらの者を納れて、直ぐ兵を船上に 進めたなら、準備の出來ない長高は敗戰して、折角の義擧も成功しなかつたであらう。 然るに清高の執事に田所といふ者があつて總攻擊を止め、「長高がかほどの大事を思ひ 立つからには、必ず自ら信ずる所があるに相違ない。若し夜中に驀進して、敵に備へ があつたら、身方は大損害を蒙るから、夜が明けてから兵を進める方がよい」と云つ た。清高はそれに從うて、其夜はそこで宿陣した。其爲め、長高は夜を徹して防禦の 準備を整へることが出來た。

佐々木軍は夜の明けるのを待つて船上山に殺到した。其勢三百餘人であつたけれど も山上には十分の備へがあり、容易に落ちなかつた、戰鬪數日間繼續した。長高はい つつも陣頭に立つて勇戰して敵を退けた。出雲の守護職冶高貞は、名和軍が優勢で、佐 々木軍が容易に船上山を陷れることの出來ないのを見て、いつの間にか勤王の志を起 し、自ら船上の行宮に伺候して天皇に拜謁し、忠節を勵む事を誓つた。此噂が擴がつ て、山陰山陽の諸豪族は皆宮方に附くことになり、日毎に船上山に駈け集まる勤王軍は、 見る〳〵強大となつた。

天皇は形勢を見て御心を安んぜられ、三月三日には打寛いで長高を傍近く召され、 種々の物語りの末、長高の家系を問はれた。長高は大に面目を施して、具に奉答した。 名和家は村上天皇の後裔である。村上天皇には六郎王子、七郎王子といつて、二人の啞 の王子があつた。七郎王子は、播磨國明石浦で始めて物をいふやうになつて、宮中に 召返され、六郎王子は但馬國に御殿を建てて住んでゐたが、これも後には言語を發す ることにはなつたけれど、其儘留まつて但馬を領して居られた。其末裔に小野惡四郎 といふ者があつて、但馬上頭の領家代官を殺し、罪で領地を礙はれ、僅に屋敷十七箇 所だけが殘つた。けれども其末裔二方太郎は京都に於いて勅命を蒙り、山法師を討伐

した功勞で、七代まで弓箭の道を許されたが、承久の亂には宮方についた爲め一族は皆牢屋に捕へられ、屋敷十七箇所も取上げられて女子共ばかりが僅かの領地に詫住居をする身となつた。北家(六)柄の旁系に名和長高は生れたのであつた。——かう長高の語るのを聞かれて、天皇は「それでは、御身は承久の變に朕の祖先と運命を共にした者の末裔か。今また御身が朕と運命を共にするとは何といふ不思議の因緣であらう！　差詰め但馬一國を與へることにするが、皇位回復の曉には、何なりと御身の望みに任せる」と宣はせ、且つ名を賜はつて、長年と呼ばしめた。

佐々木清高の敗走

船上山の勤王軍は次第に強大となつたので、今度は逆まに佐々木軍を進擊することとなつた。佐々木清高の據つた城は、船上から約三里隔つてゐた。城中には精兵が七百ばかりゐて、最初の攻城は失敗し、勤王軍は多數の死者を出したが、其夜援兵を送つて攻擊を續け、城内に松明を投げ込んだので、内部の模樣が手に取る如く見え、城兵の防禦は甚だ都合悪しくなり、遂に持堪へずして清高は夜に紛れて城を脫走した。

帆懸船の定紋

三月九日に至つて、京都から長年の嫡子義高が歸つた、翌十日には弟の與一高則が歸來して京都の樣子、千劍破城の有樣などを逐一奏上した。此時には最早中國四國の諸豪族は大方船上に集まつて軍勢が大に振つたので、京都に進軍することに評議が決つた。天皇は特に長年を側近く召されて「君は船、臣は水、水がなければ船は浮べられない、今回、御身が事を擧げたのは船上山で、朕が隱岐を脫したのも一葉の舟である。舟は誠に緣喜がよい。よつて今後、紋所は、水に船とするがよい」と云つて、手づから忠顯に敎へて帆懸船の畫を書かせたと云ひ傳へる。

奇瑞と天運

船上山の行宮に關連しては、種々の不思議な物語が語り傳へられてゐる。長高が天皇を奉じて船上へ上つた翌日の朝、幾千萬といふ烏の群が天を蔽うて山上を飛び廻つたが、其中に七八尺の大烏が一羽交つて居た。「之は烏が帝を守護してゐるのだ」といつて人々は大いに意を强うした。又同じ日に佐々木が攻め寄せた時、忽然山中が三度も震動して、俄に霧雨が降り、一寸先きも見えないやうになつた。「是は必ず神々が喊聲を揚げられたものであらう」といつて、城中の兵士は勇み立つた。間もなく霧雨が晴れると、何處からともなく靈鳩が七八羽飛んで來て基長の陣上を一周し、天皇の御座所の方へ去つた。一同はそれを見て、「之は正しく八幡大明神の加護である。早く敵を打散らせ」と、勢ひこんで矢を射かけると、あだ矢なく敵兵が射倒された。かうしたことは、素より後日の假作か傳說であらうけれど、或はさうした異常の現象が起つて、長

年に士氣作興の口實を得しめたかも知れなかつた。兎にも角にも、後醍醐天皇には好運が廻つて來た。

（一）『增鑑』參照。
（二）『伯耆之卷』參照。
（三―五）以下本節は『太平記』、『伯耆之卷』及び『梅松論』に據る。
（六）『名和系圖』及び『那波系圖』參照。兩者では大分系統が異つてゐる。さほどに系圖といふものは的にならないけれども、家の言傳へといふやうなもの、大體は分る。

第五節　勤王軍の進擊

山陰、山陽の勤王軍

後醍醐天皇は名和一族に擁せられて船上山に行宮を設け、諸國の勤王の士を招かれた。召に應じて馳せ集る山陰山陽の武士は(一)日增しに多く、出雲、伯耆、因幡の諸豪族を首めとして石見國には澤三角の一族、安藝國からは熊谷小早川、美作國からは菅家の一族、及び江見、芳賀、澁谷、南三鄕の諸豪族、備後國からは江田、廣澤、宮、三吉の諸族、備中國からは新見、成合、那須、三村、小坂、河村莊、眞壁の諸族、備前からは今木幸範、知間親經、藤井範貞を始め小島、中吉、知氣、石生の諸豪族が來り、四國、九州からも馳せ參じたものが少くなかつた。此時、赤松則村は播磨の佐用莊、苔縄

赤松軍の京師進擊

山に本城を構へて居たので備前、美作の武士らは多く其手に屬した。

此際金剛山の千早城では、楠木正成が關東の大兵を引受けて鋭氣更に衰へず、幕軍が已に攻めあぐんで居るところへ、今又後醍醐天皇が船上山に行幸せられて、勤王軍の勢力が日々に加はるとの飛報が京都に傳はつたので、兩六波羅では不安心に思ひ先づ船上の道路に當る、赤松の居城を攻め落さうと、元弘三年閏二月上旬、佐々木時信常陸前司時知に五千餘騎を授けて進軍せしめたが、赤松は其十五日に敵を難所に誘き寄せて散々に擊破したので、(二)六波羅勢は這ふ〳〵の體で京都へ引返した。之が爲め洛中の騷動甚だしく、市民は今にも赤松軍が亂入するかと危ぶんだ。此時、赤松は久々知酒部に進出して、そこに陣取つて居たが、六波羅からは更に一萬騎の討手をそれに向けた。六波羅軍は瀨川に陣を張つたが、其時阿波の小笠原の同勢三千餘騎が尼崎から上陸して急に赤松を襲つた爲めに、赤松父子は大敗して、唯だ六騎で小屋野の宿に遁れた。三月一日、赤松軍は再び盛り返して瀨川に押し寄せ、大に六波羅軍を破り、又も京都へ引返さしめた。六波羅では、そこで、三月八日に柵を(三)京都に構へ、三條から鴨川に沿うて、北は中御門まで、西は東洞院までの間に塹壕を堀つて萬一を警戒した。赤松軍は長驅進擊して十二日に淀、赤井、山崎、西岡の線に着し、火を附近の民

六波羅軍桂川に防ぐ

光嚴院六波羅に遷る

家に放つた。之を見て北六波羅の北條仲時は、京都駐屯軍二萬騎を繰り出して敵を桂川に防がしめたが、赤松軍は二手に分れ、久我繩手と西七條とから進攻した。赤松は、自分の軍の小勢なのを敵に悟られることを嫌ひ、桂川を一擧に渡つて對岸に上つた。其の勢の物凄さに、六波羅軍は辟易して東寺に引揚げた。赤松軍は京都の市中に亂入し、大宮、猪隈、堀川、油小路に火を放つた。火焰は天を焦がし、市民は號泣して遁げ惑つた。此煙は宮中でも見えたので光嚴院(四)は六波羅へ行幸せらるゝことになり、之に供奉した皇族公卿らは軍隊に擁護せられて砂埃の中を六波羅館へ向つた。六波羅探題は大に驚き、急に六波羅北館を假宮と定め一方隅田、高橋、河野、陶山の諸將を遣はして必死に防戰せしめた。此夜赤松は戰利あらずして山崎方面へ退いたが、六波羅軍が追擊に移らなかつたので、さしたる敗軍ともならずに物別れの形となつた。赤松は一旦山崎に退いて味方の軍勢を檢べると案外大勢であつたから直ぐそれを取纏め、中院定平を聖護院(五)の宮と號し、陣を山崎に張つて西國への通路を遮斷した。六波羅では之を聞いて、赤松一人の爲めにかくまでも惱まされるのは心外であると、急に大擧進擊したが、戰ひ敗れて、自書京都へ逃げ歸るの不面目を見た。

此時、大塔(六)宮は山崎に於ける赤松軍の勝報に接し、密使を叡山に遣はして、山門の

大塔宮山徒に出兵を促す

赤松軍の退却

忠顯軍京師に向ふ

僧徒に兵を擧げて赤松軍と東西相呼應する事を促した。山徒は評定の結果、三月廿八日を以て六波羅を攻擊することを宣言した。其兵數は十萬餘騎と聞えた。ところが、山徒はいつもの猛勇を揮つて、山崎の赤松軍とは打合せもせずに遮二無二山門を繰出して京都へ押寄せた爲め、六波羅軍の爲めに散々に破られ、這ふ〳〵の體で山門へ引返した。六波羅では山徒の歡心を買ふ爲めに數多の領地を寄進したので、僧兵は利に目を眩まされて變心する者が多く、最初の元氣は消え失せてしまつた。

四月三日、赤松軍は七千餘騎を二手に分け、一手は中院定平に率ゐられて鳥羽竹田から進み、一手は則村自らこれを率ゐて河島桂里から京都に進出した。六波羅軍は其頃引續き戰鬪に利を得て調子付いてゐたことゝて中々元氣よく、終日戰鬪を繼續した爲め、赤松軍は多大の損害を被り、士氣阻喪して山崎八幡の方へ退却(七)した。

赤松軍だけでは、京都は容易に攻め落されさうにもない。赤松は山崎邊に陣取つて頻りに作戰に肝膽を碎いた。後醍醐天皇は、遙かに此事を聞かれ、六條忠顯を中將に任じ、山陰、山陽兩道の兵を率ゐて伯耆國から京都へ進擊(八)せしめられた。船上山出發の時は僅か一千餘騎であつたが、途中で參加する者が多く、程なく二萬七千騎と註せらるるに至つた。かく多數の參加者があつたのは、全く武士が後醍醐天皇の船上山行幸

に刺撃せられ、勤王心を振起したからであつた。伯耆から丹波へかけては畿内の外廓であり、其間には豪族が多く、京都からの落武者も少からず潜んで居り、また住民は昔から京都に變亂があると、それを機會に干戈を執つて、自分達の利益を圖らうとする習慣もあり、それらは少しでも羽振りの好い方へ附いて、功業を立て、恩賞に預からうとした。勿論これらの中には誠忠無二の勤王心を懐いてゐたものもあつたが、また勢ひを見て強者に從屬するといふ風の者も少くなかつた。それらも、しかし外形に於ては立派な勤王黨であつた。群衆心理は恐しい作用を生ずる。其作用を利用する者が、最も早く優者となる。忠顯の軍が破竹の勢ひを得たのは偶然でなかつた。

忠顯に下せる軍令の要領

忠顯が天皇から受けた命令は、三つに分たれてゐた。[九]第一は北條の黨類を誅伐すること、第二は皇族を擁護すること、第三は楠木軍を救援することであつた。此三項の軍令の要領は、それらの日の文書に現はれてゐる。それに依ると、「今回の擧は北條高時らの僭上無禮を正さん爲めである。それ故、京都の皇族に對しては、縱令それが北條氏に與みしてゐても、之を朝敵と混同して狼藉を加へてはならない。若し誤つて無禮の擧を加へたならば重罪に處せられるであらう。又皇室の領地である長講堂領以上、本所、各別の庄園に亂暴を働き、之を掠奪してはならぬ。次に京都朝廷の要職に在る公卿らに對しては、縱令不忠の事があつても其家門を斷絶させ、又其家領、庄園等に妨害を加へてはならぬ」[一〇]とあつた。

皇室と社寺は局外中立

教養のない田舍武士が、亂に乘じて私慾を逞うし、皇族に對して無禮を加へたり、公卿の所領を掠奪したりすることは、源平の爭覇以來屢〻京都に行はれたことであるから、天皇は特に此點に留意せられたのであつた。抑〻大覺寺、持明院の兩統が、皇位を爭つた爲めに、南北分立といふ、天に二日のあるが如き變態を生じたとは言へ、皇室間の親愛は少しも濫ることがなかつたから、公卿達とても必ずしも黨派の旗幟を明かにして、互に相反目するやうなことはなかつた。戰爭は只だ北條氏誅伐の叡慮から起つたもので、皇室及び社寺は戰爭の目的外であつた。それ故に、皇室を周匝する公卿や神佛に奉仕する僧侶やは、殆ど局外中立の姿であつた。社寺が國家の爲めに祈禱を爲すのは、一視同仁の精神に基いてゐた如く、皇室の民衆に對する態度も、博愛慈仁、毫も偏頗するところがなかつた。南都、北嶺、高野、熊野の寺院が後醍醐天皇に身方したといふのは、佛敎それ自身がさうあることを要求した譯ではなく、僧徒らが個人としてさうしたまでであつた。勿論、今日の戰爭に於ける中立條規のやうなものはなかつたが、大體に於いて神佛と帝王とを交戰の渦中に捲き込まないのが、當時

軍隊は無節制

の一般理想(一一)であつた。また軍隊は常備軍といふものはなく、一二日の中に二萬も三萬も駈り集めるのであるから、ほんの烏合の衆であつて、各自思ひ〳〵の行動を取り、進退の規律さへも無かつた。後醍醐天皇は此點にも留意せられ、次のやうな個條を軍令の中に定められた。――「朱陣(一二)と後陣とは互に助け合はなくてはならない。先陣が功を急いで後陣を助けないのは殊によくないから、それらは所罰する。又戰闘中は遺恨を含む者も、互に私心を去つて協同一致の行動を取らなければならない。若し言ふべき事があるなら、戰爭終結の後に訴へ出るがよい。兵糧米は、内外親疎の別なく平等に分與せよ。儻渦の者には偏頗なく之を施し、協力一致して忠節を勵むやうに取計へ。身方が死傷した場合には、嚴密に調査して其氏名を錄し、勳功の大小を甄別して行賞の便宜を圖るべきである。兇徒首魁を捕獲した場合には、不日誅戮して後患を除け。片時たりとも陣所を設けたならば、適宜に防備を施して敵軍の來襲に備へなければならない。仲時、時益以下は之を誅伐し、院及び諸皇族は之を皇居に遷して、嚴に守護し、假りにも過失があつてはならぬ。武家方に附いた公卿らは、悉く氏名を記錄して奏聞を經よ。彼等に對しては訊問の上罪名を定めることとし、之を卽決してはならない。次に軍隊を金剛山に差遣し幕軍を討滅し、正成を召し出すやうに努力せよ。若し洛中に於いて狼藉をしたなら、凶賊と同罪に所罰する。」

天皇必勝を期す

此軍令に依つて見ると、天皇は已に勝利を見越してゐられたことが分る。正成は已に三箇月餘も千早城に據つて關東の大軍に抗し、赤松則村は軍を京都に進め、山陰一帶は天皇の勢力範圍に歸して居る。加ふるに忠顯が新軍を率ゐて京都に向ふのであるから形勢は勤王軍に取つて有利である。今一押で京都は我手に歸するといふ見込は十分に付く。そこで天皇は京都に在る皇族の戰禍を蒙らんことを憂へて、其救濟策まで講じられたのであつた。隨分早手廻はしではあるが、天皇の用意の如何に周到であつたかを窺はしめる。

六條軍振はず

忠顯が進んで丹波に入つた時、但馬の太田三郎左衞門尉守延が靜尊法親王を奉じて義兵を起し忠顯の篠村の陣に馳せ參じた(一三)。法親王は元弘の始め北條方に囚へられ、それ以來太田へ預けの身となられた。忠顯は之を見て非常に喜び、親王を上將軍として急に錦の御旗を揭げ、谷堂、葉室、衣笠、桂里、松尾のあたりまで陣を進めた。元來、此六條軍は、山崎の赤松軍と牒し合せて京都へ攻め入るべき筈であつたが、多勢を恃んで其手筈にも及ばず、四月八日に秩序もなく六波羅へ押し寄せた。これより先き、但馬、丹波の武士を選拔して京都に潛入せしめ、戰闘の最中に放火せしめることにして

あつたので、彼等は火を所在に放つて侵入軍に應じた。それが爲め六波羅勢は周章て、、大宮表へ引退いた。後に殘つて居た六波羅軍五千餘騎は、前軍を救はんとして一條、二條に向つて前進し、新手を入れ替へ〳〵して、猛烈に六條軍を攻め立てた。之が爲めに六條軍は敗れ、太田三郎左衞門は戰死した。けれども、名和小次郎行村らに率ゐられて、一條に向つた一部隊は、頑強に防戰して日沒に及んだ。忠顯は、此夜、峰の堂に陣取つてゐたが、六波羅軍の勢力が強いのでそこをも支へかね、八幡の方へ退いた。部下の萩野彦六もまた丹波の高山寺城に楯籠つた。

かうした次第で、六條軍には當分勝身がなく、千早城は包圍の中に在つて、智謀に富んだ正成も動きが取れないし。諸國に義兵は蜂起したけれど、勤王軍の主力がかうした始末であるから、彼等は唯だ形勢を觀望するのみで、容易に軍の行動を起さなかつた。此間に九州では菊池武時が活動したけれど、不幸にして其軍は武家方の爲めに敗られた。

菊池氏の勤王

菊池氏は、平安時代に刀伊（今の露領沿海洲に仕んでゐた滿洲族）の侵入軍を平定した太宰權帥藤原隆家の末裔で、代々肥後に住み、古くからの豪族であつた。其後隆直、隆長の時代に本家に屬し、壽永の平家沒落には之に殉じた。隆直の孫能隆は大番役と

阿蘇氏の勤王

なり、京都に在留の身となつたが、承久の役に宮方に附いた爲めに北條氏から其本領を沒收せられた。能隆の子武房は文永の役に戰功があり、弘安の役にも拔群の勳功を立てた。武房の後、隆盛、時盛相繼ぎ、時盛の子に武時が生れた。武時は宇土郡大慈寺の僧大智和尚を師として佛學を修め、又京都諸山の僧に因緣して志を朝廷に通じ、窃に勤王の軍を起して、承久の讐を報じたいといふ素願を抱いてゐた。

又肥後の舊家に阿蘇氏といふのがある。阿蘇氏は神八井耳命の後裔である速瓶玉命（はやみかたまのみこと）の末裔として知られてゐる名族で、大和時代に阿蘇國造となり、阿蘇君と稱して土地の大勢力であつた。奈良、平安、兩時代には阿蘇神社に仕へ、阿蘇宮司といへば其名は都にも響いてゐた。壽永、文治の頃、當主の惟泰は平氏の無道を憤り、菊池隆直と共に兵を起したことがあつた。爾來阿蘇大宮司として、惟次、惟義、惟景、惟國、惟時、相續いで家督を承け、元弘の頃には惟時の子惟直が家を繼いで居た。此の支族に惠良惟澄といふ者があり、小次郎と呼んで、之も一廉の勢力を持つてゐた。此菊池、阿蘇の兩氏は、肥後に於ける代表的の豪族であるが、曩に護良親王が令旨を下して諸國の義擧を促した時、菊池武時は直ちに之に應じて起つたが、惟直は北條氏の命に依り、一族惟澄と共に、金剛山攻圍軍に加はる爲め備後の鞆の津まで進出したが、そこで親

王の令旨を拜して急に勤王を思ひ立ち、其儘本國に引返したのであつた。(一五)然るに、此度船上山の行宮から、新たに菊池、阿蘇、大友、少貳の諸氏に綸旨と錦旗とを賜はり、義兵を擧ぐべき慫慂を受けたので、少貳、大友は形勢を觀望してゐるにも拘らず、菊池、阿蘇は、一致して直ちに之に應じた。

菊池神社

元弘三年三月十三日、菊池武時は阿蘇惟直と共に博多に進出して、九州探題北條英時の館を襲はうとした。(一六)其日は早朝から博多附近に火を懸け、一方使者を少貳貞經、大友貞宗に遣はして加勢を賴んだが、貞經は其使者を堅糟で斬殺し、貞宗も其使者を殺さうとしたので、使者は危く遁れ歸つて其由を復命した。武時は、けれども、それらのことに氣を落すやうなことはなく、豫定の如く錦旗を進めて松原口の三辻堂から探題の館に押し寄せ楠田濱口に陣取つた。これより先き探題北條英時は菊池の出動を偵知し、武藏四郎、

武田八郎に兵を授けて息濱の菊池軍を襲はしめたが、敵は已に博多に進んだと聞き、轉じて楠田濱に出て攻擊を開始した。ところが菊池軍が優勢で、探題軍は敗北し、武田八郎を始め多數の負傷者を出した。武時は猛進して楠田社に入り更に探題の館に肉薄した。英時は事急にして防戰の術なく、自害しようとしてゐるところへ、少貳大友、兩氏の軍隊が來援したので、英時は其新手を以て、朝から戰つて疲勞してゐる菊池軍を駈け惱ました。武時は死力を盡したけれども到底敵し難いので、嫡子武重に後事を託して、其身は三郎賴隆と共に大射馬場で戰死した。(一七)年は六十二歲であつた。武時の弟二郎三郎入道覺勝らは、探題の館に進入して庭内に戰死した。武重は父の遺命を守り、九郎武敏及び阿蘇惟直と軍を肥後に班して、再擧を圖る事となつた。

かうして菊池軍は一敗地に塗れたが、それが九州勤王の先驅をなして鎭西全體に大きな動搖の波紋を起した。此際、北條氏の一族絲田貞義、規矩高政らは肥前にゐたが博多が危いと聞いて、急いで馳せ參じたので、英時は高政を肥後に派遣して、菊池、阿蘇の徒を討たしめ、少貳、大友らに命じ博多の警戒を一層嚴重にさせた。けれども一波は已に動いた、萬波は從つて動かざるを得ない。高政らが肥後に向つて進軍した當日長門探題の急使が博多に着いて、伊豫の土居通增が長門探題北條時直を擊退した

肥前彼杵の義兵

阿蘇軍の敗走

形勢急轉直下の二大因

とを報告したので、博多軍は俄かに意氣が沮喪した。又其翌日には急使が肥前彼杵(そのき)から來て、同地の土豪江串三郎入道彌次、刑部坊明慶、其甥圓林坊らが、去年千綿山の修驗者が土佐から偸み歸つた尊良(二八)親王を奉じて義兵を擧げ、本庄、今富、大村等の同志を糾合したとを報告した。英時は直ちに東松浦黨の諸族佐志、値賀、波多の諸氏を肥前に遣はして之を押へしめると同時に、博多の警固を一層嚴重にし、又大友、少貳、菊池、平戸、白田、三窪らの諸族へ伯耆の行宮から送られた密使八幡彌四郎宗安を捕へて斬首した。しかし、九州全體は何となく穩かならず各地の土豪等は變を思うて、機會の來るのを窺つてゐた。肥後に向つた規矩高政の軍は、三月二十五日に阿蘇大宮司の館を襲うて火を放つたが、阿蘇軍は奮戰して之を擊退し、館は幸にも燒かれなかつた。そこで惟直は所謂「清野遁走」の策を取り、所在に放火して退いて鞍岡山に楯籠つた。高政はそれを追擊したが、道が嶮しくて攻めることが出來なかつた。そこで日向方面から軍隊を進めて背面攻擊をしたので、惟直は支えかねて、一族惟澄及び菊池武敏らと共に城を棄てゝ遁走した。

菊池、阿蘇、兩氏の軍が挫折したとて、九州の勤王軍は全く跡を絶つたといふ譯ではないが、當分は中原の形勢に變動を與へるやうな見込みがなくなつた。千早城も持久戰となつて動きが取れず、山崎の赤松軍も利を失ひ、八幡の六條軍も捗々しき活動が出來ず、かうして後醍醐天皇帝政回復運動もどうやら成功覺束なく見えたが、急轉直下、此形勢を一變せしめて、僅か一ヶ月足らずの間に北條氏を滅亡せしめた二つの大事件が起つた。それは足利高氏の勤王軍參加と、新田義貞の鎌倉攻擊とであつた。

（一・二）『太平記』參照。
（三）『道平公記』參照。
（四）『增鑑』。
（五——八）『太平記』參照。
（九・一〇）『光明寺殘篇』。
（一一）文學博士久米邦武氏『南北朝時代史』參照。
（一二）『光明寺殘篇』。
（一三）『太平記』參照。
（一四）『菊池系圖』參照。
（一五）『阿蘇惟澄申狀』。
（一六）『太平記』。
（一七・一八）『博多日記』。

第六節　六波羅沒落

名越高家の陣沒

此時、六波羅では兵力が足らなかつた。八幡、山崎、兩方面の敵軍は、日々に兵數が增すらしいので、頻りと鎌倉へ援軍を乞ふけれども、鎌倉では既に大軍を送つた後であり、又威望も昔日の如くでないので、いくら軍勢を召集しても容易には集まらなかつた。漸く三月二十七日に至つて、名越(尾張守)高家及び足利(治部大輔)高氏を、討手の大將として、大軍を率ゐて進發せしめた。此軍が京都へ着いたのは四月十六日であつた。高氏は兵五千餘騎を從へて丹波、丹後方面から伯耆に向ひ、高家は七千餘騎を以て播磨備前を經て伯耆に向ふことに定つたので、高家は山崎の赤松軍に向つて進軍を開始したが、赤松則村は敵を難所に誘つて不意に決戰をしようと、淀、古河、久我繩手の三箇所に陣を取つた。四月廿七日高家は軍の先頭に立つて進み、縱橫無盡に奮戰したが合戰數刻に及んで人馬が疲れたので、少しく息を入れようと休んで居るところへ赤松の一族佐川左衞門三郎範家が(一)ひし〳〵と進み寄つて箭を飛ばしたが、狙ひ違はず高家の眞額に當り、馬から落ちて卽死した。之に機を得て赤松軍はどつと鬨を揚げ三方から詰め寄せた。大將を討たれた名越軍は、統一を缺いて軍規亂れ、遂に總敗軍となつた。

足利尊氏官軍に應ず

此時、足利高氏は、その一族上杉氏の領地なる丹波の篠村にゐて、名越の戰死したことを聞いたが、ふと志を飜して、勤王軍に應じ、其二十九日に八幡宮の祠前なる柳の樹に一族を(二)て、鐙を返して京都へ亂入し、直ちに六波羅を攻め落した。

足利の家系

高氏が鎌倉に叛いて義兵を擧ぐるに至つた徑路如何と見るに、元來足利の家系(三)は源義家の次男義國から出てゐる。義國の長子義重は新田氏の祖となり、次子義康は足利氏の祖となつた。義康の子義兼は北條時政の女を娶つて義氏を生み、義氏は泰氏を生み、泰氏は賴氏を生んだが、いづれも北條氏の女の出であるので、北條氏とは切つても切れぬ深い姻戚關係が結ばれた。賴氏の子が、家時、家時の子が貞氏で、貞氏の子が卽ち高氏である。更に「足利」といふ家名の起りを探ねると、元來下野足利莊は、佐藤一族の領地であつたのを、源義家が橫領して義國に與へたものであつた。ところが、義國は粗暴な男で、鳥羽法皇の末年に咎めを受け、足利莊に蟄居して死んだので其子孫が附近に定住することになつた。卽ち義國の長男義重は上野新田に住み、二男義康は下野足利に住んだが、義康は保元年代に死し、其子義兼が跡を繼いで、矢張り足利に住んでゐた。これが「足利氏」の起つた因緣である。源賴朝が兵を石橋山に起した時、義兼

「足利」といふ家名の起原

は源氏の名族でありながら、之に應じなかつた爲めに、其後も鎌倉幕府に對して圓滑な關係を結ぶことが出來なかつた。しかし義兼の母は賴朝の母と姉妹で、義兼は賴朝と同じく北條時政の女を娶つた。其間に儲けた子は義氏孫は泰氏で、三代共に北條氏の女を娶つたから、自然勢力を扶植して一族が榮え、諸國に多くの領地を有するに至つた。中でも三河は其根據地の如き有樣であつた。然るに家時の代に、子の貞氏に上杉賴重の女を妻せ、其腹に生れたのが、高氏、直義の兄弟であつた。

足利の一族

尊氏天下を圖るの因緣

足利氏の一族中には名門が極めて多かつた。たとへば足利賴氏は泰氏の第三子であつたが、それが宗家を繼いだ爲めに、其兄に當る尾張の斯波、澁川などは皆庶子の列に落された。細川、畠山なども、義兼の子から分家したものであつた。今川氏も足利氏で、矢張り足利義氏の子長氏(上總介)は吉良氏となり、其子國氏が今川氏の祖となり、又國氏の子から關口、入野、木田などの諸氏が出た。

かうした關係に在りながら、高氏が北條氏に背いて勤王の義旗を揚げた心は如何？一口に言へば、亂世に乘じて天下を取らうとする英雄の野心であるが、高氏は足利氏が、到底北條氏と兩立し得ないものである事を疾くに看破してゐた。(五)元來北條氏の政策として、諸大名中勢力を得る者は、總て之を亡ぼさねば止まなかつたことは、從來の記錄が之を證明してゐる。卽ち北條氏は、先づ和田の一門を亡ぼして、更らに北條氏の外戚として、關東武士の多數を麾下に有した三浦氏をも亡ぼし、同時に其與黨と目せらるゝ毛利氏(大江廣元の後裔)をも倒した。三浦氏を亡ぼした當の謀主は、北條時賴の外祖父たる安達景盛で、三浦一黨は武門中第一の勢力を有し、常に傍若無人の振舞をして居る。吾等の子孫は他日、到底、彼等と對抗することが出來なくなるだらう。今の中に彼れを除かなくてはならないといふのが其理由であつた。此の三浦黨絕滅に關し、足利氏は北條氏の爲に盡力し、その報酬として新たに所領を加增され、足利氏は頗る强大となつたが、讒ては三浦氏の二の舞を演ずべき順となるのであつた。卽ち三浦氏滅亡の後間もなく、折角伸び出した足利の芽は北條氏の爲めに摘まれてしまつた。其事情は斯うである。

足利氏は北條氏と兩立し難し

(六)寶治二年、卽ち三浦氏の滅亡した年、足利左馬入道正義(義氏の法名)の、結城上野入道日阿に送つた書狀は「結城上野入道」と宛名を書き、自分の名所をば、「足利政所」と署した。之は結城を一段劣つたものとしたのであつた。ところが、結城の返事には宛名を「足利左馬頭入道へ御返事」とし、「結城政所」と署名して全然對等の形式を取つた。足利正義は之を見て「不屆千萬の無禮者め！」と罵り、北條時賴に訴へていふには

「足利氏は右大將賴朝公の一族として源家譜代の家柄である。彼れ日阿は同じく右大將の時に仕へたものであるから、其頃の事は忘れたでもあるまいに、今日、かうした潛上の振舞は奇怪千萬である。どうか、彼れに對して誡めの沙汰を下されたい」と。時賴は正義の訴狀を日阿に廻送して、其所存を問うたところ、日阿は一通の古文書を時賴に差出した。それは賴朝が譜代の家の子侍の姓名を書されて朱印を捺したものであつた。それを見ると、家の子の第一は北條義時で、正義の父義兼と日阿（當時の結城七郎）とは同等の列に置かれてある。時賴は之を見て正義を宥め、其三浦氏退治の功に驕つた心を挫いた。正義は之が爲めに酷く面目を潰して、纔て走狗の煮らるゝ、日の來るべきことを勸付いた。そこで面には現はさなかつたけれど、心では警戒をさ〳〵怠りなく、北條氏と兩立しがたい關係に想ひ到り、時には、機會もあらば取つて代らうといふ野心を抱くとすらもあつた。思へば其身は源氏の一族であるから、北條を倒すことは、卽ち源氏の再興ともなるのである。さうした事は代々語り傳へられて、高氏の耳にも入つてゐたらう。實朝を最後の征夷大將軍として、鎌倉源氏の正統の絶えた後は、源氏一門の中で足利一族が最も强盛で自然に諸大名の聲望を集めた。さうした聲望を背景にして不世出の英資を有つた高氏が一家を切り廻す日が來た。彼れは固より其家が北條氏

足利入道正義と結城日阿

高氏の父の時家

と關係の深きとは知つてゐたが、源氏の名族として北條氏の下に立つことを潔しとしなかつた。加ふるに彼れの祖父家時は天下を取り得ざるを憤つて自殺した事實がある。卽ち源義家の遺言狀に、我は七代の孫に生れ變つて天下を取るべしとあるが、七代目こそ家時に當つてゐるのに、其の機會が來ないので、彼れは憤悶の極、八幡大菩薩に祈り、我生命を縮めて今後三代の中に天下を取らしめ玉へと祈り、割腹して果てたといふ傳說がある。而して其三代目の孫は、恰ど高氏に當つてゐるのであるから、彼れが手に唾して天下を取らうと決心したのは當然で、決して一時の出來心ではなかつた。且つ家時が我子貞氏に北條氏の女を妻はせず上杉賴重の女を娶らしめたといふのは、北條氏に取つて代らうといふ野心のあつた證據である。上杉賴重は、京都の公卿上杉重房の子で、重房は、將軍宗尊親王に從つて鎌倉に下つた鎌倉武士中には一異彩を放つた策略家であつた。彼れの父は、承久の亂に後鳥羽天皇に身方した清房入道と呼はれた人であつた。かうした經歷ある上杉氏の女を母とした高氏兄弟は、幼時から母方の先祖に承久の亂に宮方に附いたものがあつた事を聞かされて、北條反抗の血を沸かした事もあつたらう。さればこそ、高氏に反旗を飜さしめた最初の勸誘者は、其母の兄に當る上杉憲房であつたと言はれる。

高氏出陣の際已に叛心あり

京都附近の狀勢危く、幕府は再度六波羅應援軍を送る時、さうした高氏に出陣を促して來た。其時、已に高氏は恐らく後醍醐天皇の身方になつて武運を開き、憤死せる祖父の遺志を繼がん事を期したのであらう。北條氏とても彼れの强大な勢力に對しては、其野心を疑はずには居られなかつたと見え、彼れに向つて出陣に先つて誓書を差出すことを求めた。高氏は之を諾して一札の誓書を納れた。しかしながら、一片の紙は何等の效力がないと見て取つた北條氏は、更に彼れに對して、其妻女と長男千壽王とを質として鎌倉に殘さん事を迫つた。彼れも之には心迷つたが、弟直義の勸めに從ひ後は後でどうにもなる、今北條氏の命に背いては一身が危いと、これ亦承諾して進發することにした。當時の誓書は今日の條約文以上に神聖視されてゐたが、彼れは已に其誓書を出し、又妻子をさへ質として北條氏を欺いた。彼れの權謀術數と大膽さ加減とは眞に驚くべきものであつた。

高氏綸旨を受く

高氏が鎌倉を出發した時は、赤松軍が六波羅を攻撃して擊退せられた後であつた。其報道は恐らく彼の耳に達してゐたであらう。又彼れが東海道を上る間に、中國、九州の各地に勤王軍が蜂起した事を聞いて、愈〻決心の時が來たことを覺つたであらう。四月初旬三河の八橋に着いた時、彼れは上杉憲房を使者として三河の領地に居つた同族吉良貞義に謀叛の意を通じて其意見を求めしめたら貞義は一も二もなく謀反に贊成した。前にも述べた如く、三河には足利一門の領地が多く、其根據地ともいふべき場所であつた。それ故高氏は熟考の上、三河から使者を船上山に送つて後醍醐天皇の綸旨を請はしめた。やがて彼れは何氣なき體に三河を進發し、近江の鏡驛で、綸旨を得て歸る使者に逢つた。彼れが軍を率ゐて京都に入つたのは四月十六日であつた。

高氏叛旗を飜す

此時六波羅では、陸奥國白河の大名結城親廣の子親光が、俄に其手勢を拔いて勤王軍に歸した爲め、將士互に疑ひ合つて落ち者かず、日に逃亡する者が少くなかつた。然るに、船上山に向つた高氏が、四月二十七日に至つて、其所領たる丹波篠村八幡に於て叛旗を飜し、公然北條氏に反抗することとなつた。眞に晴天の霹靂、六波羅は驚いて度を失つた。しかし高氏は直ぐに京都へ攻入らうとはせず、力めて諸方の兵力を集め、十分に準備を整へ五月七日に至つて六條軍及び赤松軍と謀し合せ、三方一時に京都に向つて進軍運動を起した。

高氏京都に亂入す

五月七日の朝まだき、高氏は二條から下七條の大路を東に指し兵を七手に分けて進擊したが、其軍隊は嵯峨から內野に充滿し、本陣は神祇官を前にして東向きに控へた。之に對して六波羅軍は二條大宮を陽て、西向きに控へた。兩軍は朝の八時頃から矢合せ

を始め、新手を入替へ〳〵して終日戰闘を交へた。午後二時頃には、大宮口の六波羅軍が敗れて退却した。そこで六條軍と赤松軍とも、それ〴〵の攻口から京都の市中へ亂入した。

兩六波羅滅亡

此時城中では、六波羅北方の仲時と南方の時益とが評議して言ふには、「どうせ一命を棄てるならば帝都の中央で潔く戰死するのが本望であるが、それは私情といふものこゝは皇居であるから、こゝで討死するは宜しくない。先づ帝（光嚴院）を奉じて一旦洛外に遷り、どこか要害の地に楯籠り、其間に關東の兵力をも待ち、又金剛山の味方をも召返して京都の回復を計るとにしよう」と、七日の夜半に六波羅を落ち伸びた。此日は日中から、八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺などの民家が兵火に罹つて、烟が空に滿ちてゐた。夜半には六波羅第にも火の手が揚つた。其間に一同は後陣から脫出した。光嚴院は身を下人の姿にやつして、皇族方も人に扶けられて脫出せられた。公卿等はいづれも袴の裾を端折り、冠の落ちるのも知らずに、河原を西へ或は東へと散り〴〵に逃げ失せた。仲時と時益は東を指して落延びた爲めに、いつしか光嚴院等と一所になつた。院の供奉は右衞門督經顯、左兵衞督隆蔭、資明宰相などが奉仕した。按察使大納言資名は足を傷めて東山邊に留まつた。仲時、時益は、新主、

光嚴院脫走

兩院、東宮を擁して東に遁れ、關東の援兵又は金剛山の寄手と合せんことを計つたが漸く勢多の橋にかゝつた頃には夜はほの〴〵明け離れた。八日の朝。公卿達は終夜一睡もせず、踏みも習はぬ山路を、逃げ走つたこととて疲勞堪へがたく、非慣の涙に袖を濡らしたのもあつた。

仲時、時益の最期

どうなることかと、運命を豫想して憂へて居るところへ、守山邊では野伏が集つて落人を搜め取れと八方から追ひ詰めた。之が爲めに少からぬ死傷者を出し、時益は遂にそこで戰死した。八日の夜は近江の六角氏の居城觀音寺を行宮に充てたが、九日番場の宿の山中にかゝると、後醍醐天皇の身方と號して、近江、美濃、伊賀、伊勢の土豪が旗を立て楯を竝べて道を塞いた。七日以來の艱苦に、人馬共に疲れ果て、進むとも退くとも出來ない。そこで、兵士らは「今は逃る、便もないから、畏れ多いとではあるが、皇族方を害し奉つて、我等も一同討死自害をしよう」といつた。仲時はそれを遮つて、「我等が存命して居ながら、帝を敵に奪はれたとあつては末代迄の恥辱故、先づ命を捨て、後帝を敵の手に渡すがよからう」と云ひ、九日の夕暮に自害した。彼れ、時に二十八歲。殉死した者は四百三十二人有つたといふ。

翌十日、光嚴院、兩上皇以下の皇族は官軍に守護せられて伊吹山の太平護國寺に入

高氏六波羅を占領す

金剛山の圍み解く

られた。初め六波羅の陷つた時、神鏡を北山の西園寺公宗の邸に遷したが、八日に忠顯は之を迎へ取つて內裏(二九)に奉安した。又足利高氏は六波羅館を占領して、奉行所とし、そこで諸國兵士の到着を受付けた。

此時金剛山千早城には、尙ほ十萬近くの六波羅軍が攻圍してゐたが、八日の午頃(ひるごろ)に前夜六波羅が攻落されて、主上、上皇皆關東を指して落行かれたとの註進があつたので、攻圍軍の驚きは言語に絕し、「一刻も早く南都へ引揚けよう。野伏らに路を塞がれては困る」と、十日早朝、大軍は圍を解いて南都の方へと引揚けたが、其時已に野伏は前方に充滿して道を塞ぎ、後方からは楠木軍が城を出で、追擊したので、最初身方の脫走を防ぐ爲めに設けた谷合の柵や逆茂木に遮られ、吾先きにと狹い山路に揉み合ふので或は峯から堰き落され、或は倒れて人に踏まれて骨を挫いたりした。さうして二三里の山路を過ぎる間に、十萬騎と聞えた攻圍軍は殘り少なに討たれてしまつた。後代までも金剛山の麓東條谷の路傍には、矢の孔や刀創ある髑髏がころ〳〵と轉(二〇)つてゐたといふ。しかし宗徒の大將達は一人も討たれず、其日の夜中には南都に着いた。恰ど此時大塔宮の令旨に依つて、和泉國松尾寺では、朝敵退治の爲めに如意輪法を修して祈禱をなし、五月九日が滿願の日に當つてゐたが、其日千早の寄手が引揚げたので佛法の功德(二一)はいやちこだといつて人々は眼を輝かせた。

北條治時、問高直

已に南都に引揚けて軍を屯した治時、高直等は、近國に書狀を發して兵を集め再擧を圖るといふ報告があつた。で、足利高氏(二二)は自身で河田方面に發向し、關東から來て其附近に滯陣してゐる諸將を語らひ、豫ねて顏馴染の東國武士を身方に勸誘した。けれども、治時、高直等の北條一族は、五月中は南都興福寺に本陣を設けて官軍に抗戰した。

高氏勤王の報鎌倉に達す

高氏が丹波篠村に據つて公然勤王の師を起したのは、元弘三年四月二十九日であつたが、其の報道が鎌倉に達するには少くとも四日を要した。然るに五月二日に至つて人質として大藏谷に居つた高氏の一子千壽王(後の義詮)は、行方不明(二三)になつた。それはいふまでもなく高氏が豫ねて密使を鎌倉に遣つて彼れを脫走せしめたものであらうが此噂が忽ち鎌倉中に傳つて人々は何か大事の起る前兆だと騷ぎ合つた。高時も流石に心元なく急ぎ長崎勘解由左衞門入道と諏訪木工左衞門入道を上洛せしめて、京都の樣子を探らせたところ、高氏の謀反を通報する爲め六波羅から差立てた早馬と駿河の高橋で出會つた。鎌倉の使者は大に驚いて、直ぐ鎌倉へ引返した。浮島原まで來ると、折しも伊豆山にゐた高氏の庶子竹若が、伯父宰相法印良遍及び稚兒同宿十三人と共に

山伏姿に變裝して、窃かに京都へ上らうとするのに出會した。此一行は殘らず二人の手に斬殺された。(二四)

(一)『梅松論』參照。
(二)『太平記』。
(三)『梅松論』。
(四)『難太平記』。
(五)山路愛山氏　足利尊氏論』參照。
(六)『東鑑』。
(七・八)『難太平記』。
(九)『增鑑』參照。
(一〇)『太平記』。
(一一)『難太平記』。
(一二)『梅松論』。
(一三)『太平記』。
(一四・一五)『梅松論』。
(一六)『增鑑』。
(一七・一八)『梅松論』。
(一九)『皇年代私記』。
(二〇)『太平記』。
(二一)『和泉國松尾寺文書』。
(二二)『保暦間記』。
(二三・二四)『太平記』參照。

第七節　新田義貞鎌倉を陷る

新田義貞義兵を起す

足利高氏が六波羅を攻落した翌日、卽ち元弘三年五月八日、源氏の支族である新田義貞が、上野に義兵を擧げた。彼れが兵を擧ぐるに至つたのは、高氏の命(一)を受けたもので、高氏の子千壽王を奉じて軍の總大將としたと云ひ傳へられる。又義貞は元弘三年二月に、北條氏の催促に從つて金剛山攻圍軍に加はり、其搦手に向つた時、大塔宮から勤王の旗を揚ぐべき令旨を承け、虚病を構へて故郷の下野に歸り、それ以來擧兵の機會を待つて居たのだといふ說(二)もある。いづれが信であるか分らないけれども、唯四月二十二日に高氏が近江の鏡驛で船上山からの勅命を受け、愈勤王の兵を擧ぐる決意をした際上野、下野の我一族へも密使を立て、鎌倉討伐の準備を促したやうなとはあつたと見るが至當であらう。だから義貞も擧兵の勸誘は受けたであらう。勿論義貞

は僅か四歳の千壽王(義詮)を大將として、自分の地位を重からしめるほど卑下した人物ではなく、常然新田一族の首將として義兵を擧げたには相違ない。(三)

足利、新田兩氏の關係

元來、足利と新田とは同族であるけれども、兩雄相確執して南北分立の根本要素となつたほどであるから、兩家の關係には詳しく考へて見なければならぬ何物かがあらう。(四)初め新田氏の先祖義重が賴朝の不興を蒙つた爲めに、北條氏の時代になつても、其子孫は常に不遇の地位に立たされてゐた。之に反して足利氏は、其先祖の義康が賴朝と親善の關係を保つた爲めに、源氏の時代には飛ぶ鳥を落すほどの勢力があり、聲望が遙に新田氏を凌駕してゐたのみならず、北條氏の時代に至つて、他の源氏諸族が北條幕府の爲めに頭を抑へられて屏息してゐるにも拘はらず、足利氏のみは頗る羽振りが好かつた。之を新田氏が沈淪して僅かに上野の一隅に屏息し、足利に對しては宗家の家格である事を忘られて居たのに比べては、霄壤の差も啻ならぬほどであつた。此點は新田氏に取つて甚だ大きい不平であるに相違ない。然るに高氏は北條氏の客分として堂々と出陣し、擧手の大將として船上山に向つたのに、義貞は名もなき家人らと伍して北條氏に驅使せられ、千早の討手に向けられるやうな悲境にあつたから、義貞は心中に堪へがたい不愉快、不滿の念を懷いてゐたであらう。かうした時に護良親王の令旨を得たのであるから、勤王軍を起して運命を轉回しようと決心するのは、事實有り得べきことである。そこで義貞は急ぎ歸國して、擧兵の準備に取り掛つた。義貞の擧兵を高氏の命令に依るものとし、元弘三年四月二十二日、高氏は義貞に擧兵の教書を發したと言ふが如きは信ずべからざる臆說である。

高氏擧兵の徑路

之れを明らかにしようと思はゞ、高氏擧兵の徑路を調べなくてはならぬ。高氏が後醍醐天皇から北條氏誅伐の綸旨を受けたのは近江國鏡驛(五)で、其時日は元弘三年四月中旬であつた。此の綸旨を取次いだものは、高氏の股肱の臣細川阿波守和氏、上杉伊豆守重能で、兩人は早く義兵を擧げよと高氏に勸めたが高氏は其二十七日までは躊躇してゐた。卽ち彼れは我兵力が北條軍に比して甚だしく劣つて居るのを考へ、暫らく形勢を觀望してゐたのであつた。高氏が北條氏の命を受けて出征することゝなり、鎌倉を出發する際、高時の爲めに二心あることを疑はれ、誓書を入れたのみならず、妻子までも質とした位であるから、北條氏は十分彼れを警戒して、彼れには一手の兵しか授けなかつたのである。(六)卽ち軍の大部分は大手の大將たる名越高家が率ゐてゐた。而して當時赤松軍や六條軍と對峙して居た六波羅軍も、可成の勢力を有つてゐたし、千早城攻圍軍も相當に大きな威力を有つてゐた。故に兵數から云へば北條軍は勤王軍に幾

義貞は高氏の命を受けて兵を起せるにはあらず

倍する勢力を有つてゐた。高氏が和氏らの言を容れず、容易に旗擧をしなかつたのに無理はない。高氏が四月廿七日に京都を發して、船上山討伐に向ふ時丹波路を取つたのは、已に彼れに義擧の決心があつた證據であるといふが、それは聊か速斷に過ぎはせぬか？　彼れは故らに南路を避けて、自家に便宜ある北路を選び、其間に名越高家をして專ら勤王軍と戰はしめ、密かに其成行きを見て決心しようとしたのではなかつたらうか？　高家は脆くも一戰に敗死して北條軍主力の甚だ劣弱なことが暴露されたので、高氏は漸く決心の臍を固め(七)、諸豪族に檄書を與へて勤王軍に加はらんことを促し、五月二日に至つて始めて勅書に對する請書を捧げてゐる、であるから四月二十二日に高氏が義貞に擧兵の檄書を與へたといふことは、全く信じられない妄言である。

已に述べた如く、新田氏は嫡流の家柄でありながら失意の地に落ち、反對に足利氏は庶流であるに拘らず世に時めいた。しかも兩氏共に、武家の棟梁たらんとする野心がある。其間に猜忌、嫉妬の念の生ずるのは免れないことである。高氏は自分でも勤王の旗擧げをするほどだから、宗家たる新田義貞も、東國に歸つたからには、何等かの畫策をしてゐるに相違ないと考へたであらう。彼れは義貞に鎌倉討入りの功名を獨占せしめたくなかつた。それ故に紀五左衛門に命じ、子の千壽王を奉じて、手勢二百

義貞の鎌倉侵入

騎を率ゐて馳せ參じ、新田軍が下野から武藏へ入つた時それに合せしめたと見るが眞に近い觀測であらう。卽ち高氏は義貞をして功を擅にせしめざらん爲め、豫め關東に在る一族に密使を送つて、千壽王を下野に潛伏せしめ、義貞の擧兵に際してそれと行動を俱にせしめ、世人をして義貞が高氏の命に依つて、千壽王を奉じて義兵を起したやうに吹聽せしめたのではあるまいか？　義貞は、元弘三年三月十一日頃、大塔宮の令旨を拜してから、密かに一族と謀議を凝らし、五月八日に至つて遂に義兵を上野に擧げた。と、其頃已に鎌倉を脫して上野邊に潛伏してゐた義詮主從が、僅かばかりの手勢を提げて新田軍に來り投じたのである。其頃高氏は關東に居る同族の一人岩松經家に內命を下して義兵を擧げんことを勤めたが、此命令が義貞に與へられたやうに考へられたのではないか？　いづれにしても義貞が高氏の命を承けて、義詮を奉じて兵を擧げたといふ說は信ぜられない(八)。但し高氏が丹波で義兵を擧げたこと、高氏が關東の同族に教書を下したことなどは、義貞の擧兵と軍氣とに重大な關係のあつたことだけは、十分に之を認めなければならない。

義貞が兵を擧げると直ぐ、上野の國府と下野の國府を連絡する驛路に當つて居り、其平野の中に新田驛が橫はつ上野の笠懸野(九)に打つて出た。元來此の笠懸野の位置は

てゐた。彼れが此笠懸野を占領したのは東山道の通路を絶つたのであつた。卽ち要害の地に占據して、兩毛走集の便宜を我物にしたのであつた。彼れの軍が次第に勢力を得て武藏に入つた時には、其兵力は二十萬を算し、關東の將士は多く來り屬したといはれる。鎌倉では戰爭は百里を隔てた京都方面のこと、思つてゐたのに、つい膝元に大亂が勃發したのであるから、其驚愕は措く處を知らなかつたであらう、十日になつて、高時は金澤貞將、櫻田貞國に大兵を授けて新田軍を邀擊させ、十一日には小手指原で合戰があり、十二日には久米川で合戰があつていづれも鎌倉軍の敗北に歸した。十五日には分倍河原で決定的の戰鬪が開かれたが、義貞は奮戰して大捷を博した。之が爲め鎌倉軍はみな鎌倉に引揚げた。新田軍は之を追擊して三方から鎌倉に進み、藤澤、片瀨、腰越邊に火を放つた。七里ヶ濱一帶の空は煙烟に蔽はれた。新田軍は燎原の火の如く進み、十八日には洲崎合戰、十九日には極樂寺切通の合戰に勝つた。二十一日には其別軍は迂回して鎌倉の背後に出で、義貞自らは稻村崎の浪打際が干潟になつたのを渡渉して由井濱から鎌倉に亂入し、火を民家に放ち鼓噪して運んだ。北條氏も防ぎかねて、二十二日には高時以下八百七十餘人、悉く葛西ヶ谷の東勝寺で自殺した。眞に儼い北條氏の最期であつて、同情なしに軍記を讀み終ることが出來ない。

鎌倉討滅には高氏の聲望與つて力あり

かうした次第であるから、鎌倉幕府討滅の功は主として義貞に歸するやうに思はれるが、其實義貞の成功は、足利高氏の威名に負ふところが多いのであつた。其事は鎌倉が亡びると直ぐ義貞の威力が衰へ、關東の勢力が悉く高氏の子の千壽王に集まつたのを見ても分る。實際義貞が上野を出てた時には、其兵力は極めて少かつた。其衆兵は甚だ冒險的であつた。近國の武士らは形勢觀望の體で、直ぐには彼れに應じさうにもなかつた。然るに一度、千壽王が武藏で彼れの軍に投じると兩野、常陸、武藏の兵が續々として來り會し、瞬く間に軍は優勢となつた。是等の大兵は、單に義貞の義擧に感じて其麾下に集り、彼れの馬前に死せんことを希つたものではなく、悉く是れ形勢を揣摩して強きに附き、戰亂に乘じて一身一家を利せんとを圖る野心家であつた。彼等は高氏の北條氏に背いたことを聞き、又其の子千壽王が父の內命に依つて、新田軍に投じ

稻村ヶ崎

たことを知つて、始めて意を決して新田軍に加擔したのであつた。それ故に鎌倉に討入つた大軍は、目的を等しうする爲めに集つた一種の同盟軍であつて、決して義貞の子分となつた譯ではなかつた。——否、寧ろ足利氏の威名に賴つたものと見ることも出來る。されば一旦其共同の敵たる北條氏が滅びると、同盟軍は最早義貞を宗とする必要がなく、人望のある高氏の子の周圍に集つたのであつた。義貞が孤立の姿となつたのは當然である。

千壽王は高氏の影像

是より先き、高氏は細川和氏、同頼春、同師氏を京都から關東に向はせて、北條氏を討伐せしめようとした。彼等は途中で北條氏の滅亡したことを聞いたが、すると一層旅程を急いで鎌倉に入り心を盡して千壽王を補佐した。千壽王は高氏の影像と目せられ、同盟軍はみな其配下に屬することとなり、千壽王は、事實上、北條氏の後を承けて關東の主權者となつた。それ故に、細川和氏ら兄弟は、千壽王の名に依つて關東に制令を下した。此時高氏は京都に在つて軍功第一と稱へられ、後醍醐天皇からは特別の信頼を受けてゐるといふ評判があつたから、關東の武士らは心を高氏に寄せ、從つて千壽王に囑目し、義貞の如きは全く眼中になかつたのは當然の歸結であつた。義貞は折角の戰功を他人に奪はれて、不平煩悶遣る方なく、從つて足利氏との關係が圓滿を缺き、動もすれば兩氏の間に戰爭を見るかも知れない形勢になつた。けれど足利方は優勢で到底新田方の敵ではなかつた。細川和氏兄弟はそこで自身に義貞を訪ねて其心事を質した、と義貞は何等の野心もないといふ起請文を書いて渡した。けれども義貞は、其身が關東に居る間に高氏が京都で後醍醐天皇の殊遇を蒙つてゐるのを見て、自分も京都に手入れを爲す必要のあることを感じ、遂に一門を率ゐて上洛した。之が爲めに關東の政令は却つて全く足利氏の手に歸した。卽ち高氏は京都に於いて政權を收めて六波羅の後繼者となり、千壽王は鎌倉に在つて北條氏の後繼者となり、統治の大權が足利氏に歸するの端はこゝに啓けた。高氏が六波羅を攻め滅した際、京都に集つた勤王軍は秩序も組織もない諸國豪族の烏合の衆であつて、天下の亂に乘じて萬一を僥倖しようとする外には、何の目的もないものが多かつた。それ故彼等の中には市民の財貨を掠めたり、農家の穀物を奪つたりしたものも少くなかつた。之を放任して置いては京都は無政府の狀態に陷らざるを得なかつた。かうした利己的、近視的の群豪の間に在つて高氏のみは全く異彩を放つてゐた。故に彼れは部下に命じて掠奪を禁じ、軍隊の規律を嚴重にすると同時に、逸早く六波羅の奉行であつた長井、小國の諸氏を麾下に招き、卽日

政權足利氏に歸する端

奉行所を開いて六波羅の政務を引繼ぎ、自分の發する命令を「教書」と稱せしめて、早くも將軍政治の相續者たる資格を取つたのである。

(一)『保暦間記』及び『増鑑』。
(二)『太平記』。
(三・四)杉山助之進氏『新田義貞擧兵に就て』(歴史地理』第五卷所收)。
(五)『梅松論』。
(六)『太平記』。
(七・八)註(三)に同じ。
(九)『太平記』。
(一〇)『梅松論』。
(一一)山路愛山氏『足利尊氏論』。
(一二)『太平記』參照。
(一三・一四)『梅松論』。

車駕船上を發す

第三章　建武中興

第一節　後醍醐天皇の還幸

六波羅が陷ると直ぐ、手種忠顯、足利高氏、赤松則村らは、早馬を差立て、其事を船上山の行宮へ奏聞した。其早馬が船上山に着したのは五月十二日(一)であつた。で、後醍醐天皇は、五月二十三日、船上山を發して還京の途に上られた。路次の行列は平時とは異り、頭大夫行房、勘解由次官光守の二人は衣冠を着けて供奉したが、他の人々は皆甲冑姿で御輿の前後を警戒した。鹽冶高貞は千餘騎を從へて一日先きに立つて先陣をなし、又朝山太郎は五百餘騎を率ゐて、一日後れて、後陣となつた。金持太和守は錦の御旗を寄せて御輿の左側に附き、名和長年は御劍を奉じて右側に副ひ、鹵簿嚴々として全く戰陣の行粧であつた。前年隱岐へ遷幸された際、そゞろに御泪を誘つた山海の姿、雲月の色は、すべて龍顏に笑を湛へしめる悦びの種となつた。

五月二十六日、鳳輦は播磨國千本宿に着き、書寫山へ行幸される旨を傳へられた。同山の衆徒らは、いづれも甲冑を着用して、八千餘騎で出迎へた。翌二十七日は千本

車駕京師に還幸

を發し、箬崎で休息せられ、西坂から書寫山へ登られた。供奉は前關白經忠、別當洞院實世、一條中將行房などが勤めた。名和長年等もまた扈從し出雲、伯耆、美作の軍勢は雲霧の如く其後に隨つた。天皇は書寫山圓敎寺の講堂を行在として一夜を明かされ、二十八日には如意輪堂を經て、隨願寺、一乘寺に幸せられた。

廿九日には書寫山を下つて播磨路を、晦日には兵庫に着いて福嚴寺に宿られた。其時赤松父子が五百餘騎を從へて參向した。天皇は龍顏麗しく、「帝業回復の功は偏へに汝等の忠戰に基づくが故に、恩賞は望みに任せる」との勅があり、彼等も警固の列に加へられた。二日には西の宮まで進まれたが、早馬が三騎來て、新田義貞が北條氏を滅ぼしたといふことを報じた。天皇は京都の戰爭に官軍が勝つて、六波羅の亡んだ事は知つてゐられたが、關東の討滅は容易であるまいと、祕かに叡慮を惱まされてゐたが此の報告に接し悅ばれ、義貞への恩賞は宜しく請ふが儘たるべしと宣せられ、使者三人にはそれ〴〵厚い賞を賜はつた。

恰どそこへ楠木正成が七千餘騎を從へて奉迎した。天皇御簾を高く捲かせて正成を側近く召され「今日の成功は、全く御身の忠戰に基づいてゐる」と仰せられた。正成は畏まつて、「陛下の聖德に依らなければ、臣はとても强敵の圍を解くことが出來ませんでした」と奉答した。こゝからは正成前陣を承り、畿內の兵を隨へて前進し、四日には京都に着いて東寺へ行幸せられた。武士は勿論、攝政關白太政大臣、左右の大將、大納言、八座、七辨、五位、六位、內外の諸司は我劣らじと參集して、車馬が門前に群がつた。翌日は東寺から二條の內裏へ還幸せられ、卽日臨時の御沙汰として、先づ足利高氏を治部卿に任じ、其弟直義を左馬頭に任ぜられた。東寺から二條までの行列は壯嚴を極め千種忠顯は帶劍の役として鳳輦の前に供奉し、尙非常を警むる爲めに帶刀の兵五百人が二列に進んだ。高氏、直義の二人は後衞を勤め、騎馬の兵五千餘騎が甲冑を着けて之に隨つた。其次には宇都宮勢五百餘騎、佐々木判官、七百騎、土居得能二千餘騎。正成、長年、則村以下諸國の大名も五百、三百を率ゐて各自の族を翻しつゝ、列を正して進んだ。鹵簿の嚴肅、行粧の盛大、在來の臨幸とは趣を異にし、百官の守衞が甚だ嚴重であつたので、京都の市民は老者も若者も巷を蔽うて之を拜觀し、帝德を頌する聲が洛中洛外に充ちた。隱岐に遷幸せられた當時のことを追想して、市民らは感慨に堪へなかつたであらう。

次に起つたのは、後醍醐天皇の皇位問題である。天皇は一旦廢位の上遠島の身となられたのではあるが、再び踐祚の禮を執り行はせられず、唯だ一箇年の行幸から還

護良親王の戰備

れたものとして、凡て還幸の儀式を執られた。前年光嚴院に神器を授けられた際、璽は除かれて御躬らと共に隱岐までも奉じさせられた。それ故に、五月二十八日、後伏見、花園の兩上皇は、光嚴院と共と伊吹山の太平護國寺から、京師に還幸して持明院に入られたが、後醍醐天皇は光嚴院の皇位を承認せらず、之に皇太子の禮遇を賜ひ、皇太子の位に在つた康仁親王は勿論廢位となつた。

六月十三日、護良親王は志貴山から入洛して、久し振にて父天皇に謁せられた。是より先き六月三日に、親王が大和志貴の毘沙門堂に居られることが知られたので、畿內近國は勿論當時在京中であつた遠國の軍兵までも先を爭うて馳せ參じ、其勢力は天下を二分して其一を保つの觀があつた。親王は近々上洛の事に定められたが、一向其樣子はなく、志貴に留つて更に大いに諸國の兵を集め、戰鬪準備に餘念ないとの噂が立つた。親王の目差す敵は誰れであらうと、京中の武士らは色々揣摩して心中甚だ穩かでなかつた。天皇は右大辨宰相淸忠を勅使として派遣し、親王に仰せらるゝには、「天下は已に鎭まつて、皇化の洽ねからんとする際、尙ほ干戈を動し、士卒を集むるのは甚だ意を得ぬ次第である。天下騷亂の間こそ敵を挫く爲めに還俗の必要はあつたが、世間が靜謐に歸した上は最早其必要はない。急ぎ剃髮して以前の姿に歸り、門跡相承の

業を事とするが宜しからう」と。護良親王は之を聞いて淸忠を側近く召し、「足利高氏は一戰の功を以て萬人の上に立たうとしてゐる。其勢力の大きくならぬ中に之を討たなければ、彼れは第二の高時となるであらう。若し予が剃髮して山門に入つたなら、武を以て朝廷を全うする者はあるまい。此眞意を奏聞せられたい」と述べた。後醍醐天皇は之を聞かれ、「今天下新たに平定して士卒ら猶恐怖の心を抱く者が多い。若し罪なくして罰を行つたなら、武士らは安堵を得ず、忽ち大亂になるであらう」と、高氏誅伐の擧を止めさせ、その代り護良親王の剃髮をも見合はせ、之を征夷將軍に任じて兵權を其手に收めさせることにせられた。そこで親王も愼りを解き、六月十三日に愈〻入京(六)することになつた。其行列は實に壯觀であつた。一番には赤松則祐が千餘騎を率ゐて前陣を承り、二番は殿法印良忠が七百餘騎を、三番には四條隆資が五

百餘騎を、四番には中院定平が八百餘騎を率ゐて從ひ、其次には美々しく粧うた精兵五百人が帶力して二列に進んだ。護良親王は赤地の錦の直垂に緋縅の鎧を召し、兵庫鎖の丸鞘の太刀、鵠の羽の征矢に二所藤の弓、白石毛なる馬に跨つて其後から徐々と進まれた。後衞としては千種忠顯が千餘騎を率ゐて供奉し、猶ほ心安き兵三千餘騎を以て非常を誡め、其後陣には近畿の軍隊が幾萬となく打續いた。親王は既に髮を蓄へて眉目淸秀の好丈夫となり、天台座主であつた時とは打つて變つた御姿に、拜觀の都人士は渇仰の淚を流して其功業を褒めたゝへた。

これと同時に、尊澄法親王は讃岐の配所から歸つて再び天台座主となり、藤原藤房以下の公卿達も相尋いで歸京し、又圓觀、文觀、忠圓の諸僧も各自配所から上洛した。

かくして六波羅、關東は平定に歸したが、尙ほ九州と長門とに探題が殘つてゐた。そこで二條師基を大宰帥に任じて九州へ發向せしめようとした。ところが六月七日に、菊池、少貳、大友の三氏から早馬が來て九州の敵が悉く亡滅した旨を奏聞した。其次第は斯うである。(八)

菊池武時が九州探題を襲撃して失敗し、討死を遂げたことは既に述べたが、此一擧は九州動搖の導火線となり、各地の豪族は皆機會を窺ふ形勢となつた。其後探題は再

王子、公卿配所より上洛

九州探題滅亡

び菊池、阿蘇、兩氏討伐の軍勢を向け、それが爲め九州の勤王軍は一時雌伏の姿となつたが鎌倉滅亡、車駕還幸の報が傳はると、先には菊池武時の使者を斬つて武家方に應じた少貳入道は、到底大勢敵しがたきを見て取り、此上は我より進んで探題を討取り、其功によつて身の科を免れようと、祕かに使者を菊池、大友二氏に送つて意中を洩らした。菊池は前年少貳の行動に懲りて殊々挨拶もしなかつたが、大友は同穴の貉である から少貳の來意を承諾し、近日共に事を擧げんことを約した。九州探題北條英時は、小貳に叛意ある由を耳にし、事の實否を確める爲めに、長岡六郎を其許に遣はした。長岡は何氣なき體に少貳を訪うて對面を申し入れたが、病氣と稱して會はない。依つて其子の筑後の新少貳を訪ひ、館の樣子を窺ふと、楯を揃へ、鏃を礪ぎ、新らしい旗竿さへも造つてある。それには伯耆の行宮から賜はつた錦の御旗を掲ぐるつもりであるらしい。長岡は覺悟を定めて、新少貳と對面するや否や、「御身達は謀反の企てと見える」と拔打ちにしようとすると、敏捷な新少貳は側にあり合ふ將基盤を取つて刃を受留め、むづと長岡に組み付いた。それと見て少貳の郎黨は走寄つて長岡を刺殺した。少貳は謀反の企てが已に探題に洩れた上は、一刻も猶豫すべきでないと、五月二十五日、大友と共に七千騎を進めて正午頃探題英時の館へ押寄せた。館の兵士は已に大半

落失させたので、英時はとても支へることの出來ぬのを知り、自殺して果てた。此時一族郎黨の殉死したものは三百餘人あつたといふ。

長門探題亡ぶ

また長門探題北條時直は、伊豫に赴いて土居、得能らと戰ひ、軍敗れて長門に逃げ歸り、更に博多へ加勢に出ようとしたが、伯耆の宮方が來襲するといふことを聞いて博多行きを中止し、專ら防備を修めて居る中、六波羅が危いとの急報に接し、大船百餘隻を發して援助に赴いた處、途中阿波の鳴門で、六波羅も鎌倉も已に沒落したといふ報告に接し、博多に到つて北條英時と合しようとした。然るに其英時さへも少貳、大友に攻められて敢なく滅亡し、九州の地は全く宮方に屬したことが知れたので、今は往くに處なく、遂に少貳、島津の二氏に賴つて、朝廷から遣はされた僧正俊雅に降伏を申し出で、僅かに一命を助かつたが、間もなく病に罹つて死去した。(九)

北條政府の全滅

かうして北條政府は全く滅び、政權は後醍醐天皇の手に歸した。平治以來平氏が政權を握つてゐた間が二十六年、文治以來源氏が政權を握つてゐた間が三十七年、承久以來北條氏が政權を振つてゐた間が百十三年、合せて百七十年の間、武家の手に歸してゐた政權は、一朝にして皇室の掌中に回復せられ、危險と恐怖とを冒して立てられた後醍醐天皇の計畫の適中を見た。久しい間の夢想であつた帝政の實現せらるべき日が來たのである。

第二節　親政の開始

元弘三年六月、新政は開かれ、其第一着として二條の關白を免して親政の基礎を据ゑ、又右大臣近衞經忠、權大納言西園寺公宗を免して、前右大臣久我長通、前内大臣洞院公賢、前參議坊門清忠の前官を復し、大納言萬里小路宣房に按察使を兼ねさせ、北畠親房の子參議顯家に彈正大弼を兼ねさせ、從五位下足利高氏を從四位下左兵衞督に任じ、兵部大輔足利直義を左馬頭に任じた。尋いで軍功の調査(一)をする爲め、元弘三年八月三日に洞院左衞門督實世を上卿となしたが、諸國の武士は皆上表して恩賞に預からんことを請うた。ところが實際勳功のある者は自ら矜持して諂ふ事をせず、勳功のないものが手蔓を求めて内官に取入り、分外の賞與に預らんとするので、容易に論

論功行賞當を得ず

公卿達は悅び、武士らは愛へた。さて政局はどんなに展開されるであらう？

(一―三)『太平記』參照。
(四)『增鑑』參照。
(五・六)『太平記』。
(七)『增鑑』。
(八・九)『太平記』。

功の議が決しなかつた。依て洞院實世を免官し、萬里小路藤房卿をして之に代らしめた。藤房は公平嚴正なる態度を以て調査を開始し、勳功の大小を判定しようとしたが矢張り手蔓を求めて内奏し、祕計に依つて行賞を受けようとする者が多く、昨日まで朝敵であつた者が本領安堵となり、何の功勞もない者が五ヶ所十ヶ所の所領を給はるといふ風であつたので、藤房も今は手の下し樣がなく、遂に病と稱して其職を去つてしまつた。そこで九條民部光經が其後を襲いだが、滅亡した北條氏の領地には限りがあり、恩賞を望む者は限りがないから、到底圓滿なる解決を告げることが出來なかつた。土地が唯一の財産であつたそれらの日には、土地以外には行賞の途はないが、さりとてその土地はいくらの剩餘もないのだから、諸國の豪族は心安からず思ひ、京都に集つて本領安堵の訴を起した。戰功のある武士は、果して恩賞に預かれるかどうかを疑ひ、北條氏の爲めに笠置や千早に出陣した武士は、領地を奪はれはしないかと氣を焦せり、不安の氣が武士の間に充ち滿ちてゐた。こんな風で恩賞は到底圓滿に行はれる筈はないが、といつていつまでも放置する譯には行かない。一般武士の恩賞は姑く延引するとしても、先づ大功あるものだけを急がなくてはならぬ。依つて足利高氏には武藏、常陸、下總の三國、其弟の直義には遠江國、新田義貞には上野、播磨の兩國、

實權は依然武人の手に在り

其子義顯には越後國、弟義助には駿河國、楠木正成には攝津、河内、名和長年には因幡、伯耆の兩國を賜はり、其他公卿武士らにもそれ〴〵行賞があつたが、軍功顯著な赤松則村には佐用莊一箇所を與へ、播磨の守護職をば程なく取り上げてしまつた。之が爲め則村は内心甚だしく怨み、建武の韋氏反亂の際には朝敵となつた。(二)

勿論、後醍醐帝の改革の意氣込は盛んなもので、「今の例は昔の新儀である。朕の新儀は後世の例となるのである」と仰せられた。(三)天皇の中興事業は復古といふよりは寧ろ新政の意であつた。しかし、天皇は帝政回復の悦びに醉ひ、事效を急いで無能な公卿を重用し、武人を餘り輕く視たのみならず、綸旨數ば變更し、甚だしきに至つては一箇所の領地を四五人に與へるといふやうな奇觀を呈した。

仔細に當時の狀勢を觀察すると、其多くは利を目的としたものであつた。卽ち宮方に屬し義名分を辨へたのでなくて、其初め天皇の召に應じて起つた諸國の武士は、大て回復の事業が成功したら、いくらでも恩賞に預かつて自分の領土を擴張しようとしたのであつた。元來後醍醐天皇は公卿の力を以て武家を亡ぼさうとせられたのであつたが、事實は之に反し、諸國の武士で北條氏の弊政に心の平かでない者が、名を勤王に借りて北條氏を滅した結果となつた。故に天下の實勢力は北條氏の手から朝廷へは

移らず、直ちに全國の武士の手へ移つた。次に來る問題は、是等全國の武士が誰れの手に統一せられるかといふことであらねばならなかつた。後醍醐天皇は名義上の主權の所在であるが、實際上の主權の所在ではない。しかも公卿達は其事情を知らず、天下は已れに歸したものと心得、全國の領土を武人の手から取上げて我物にしようといふ企圖を起した。時に全國の武士は、北條氏を滅ぼしたのは自分達であるから、其土地を自分達に賞賜されるのを待ち構へて居た。けれど、北條氏の滅亡に依つて朝廷に歸した領土はいくらもない。全國を兩分して戰つたのではなく、朽木同樣の北條氏を全國の力で倒したのであるから、軍政治の時代に比して倍加して居た。卽ち武人以外に公卿が加はつてゐた。今北條氏から沒收した土地を見るに、遠江、駿河、甲斐、陸奥、土佐等に散在するもの、竝びに大佛貞直の舊領地伊勢、播磨の中、又北條一族の舊領地出羽、會津などであるが、之では公卿達に分與するだけにも足りない。それを武人と公卿と兩方に分與するのであるから愈〻足らない。この足らない土地を適宜に分配するのは非常な困難である。其間には內奏又は讒言に依つて公平を缺いた裁決が生ずる。現に赤松氏の如きは廷臣の讒言に依つて其大功を無視された一例である。こゝからは何かしら生れて來なければ

公卿政治の失體

ならなかつた。

『建武式目』を初めとして、幾多の條例規定が發布せられて、中興政治の形式は追々整うて來たが、これらの規定は容易に實行せられない。若し實行せられたら、怨を抱く者は餘り現はれなかつたであらうが、公卿達は吏務に通じないから、それをどう實行に移すかを知らなかつた。昨日までは神祇官若しくは式部官の地位に在つた公卿が一朝王政復古の盛運に際會して、俄かに政務官になつたのであるから、政治上の素養や手腕は更になく、事務は澁滯し、裁決は當を失し、爲めに怨みを抱く者が多く現はれ人心が忽ち離反する形勢になつた。のみならず行賞が非常に澁滯した爲め北條氏に緣の深かつた降人らは、皆疑心を生じ二心を懷いて居た。それに行賞が少いので不平を起した者が加つて、諸國には亂を思ふ者が多く現はれた。武士らは皆公卿政治に愛想をつかして、一日も早く武家政治の復興することを希ふに至つた。

足利氏制肘策

後醍醐天皇の最も憂患とせられた所は、足利氏の勢力の餘りに強大な事であつた。高氏は已に一方六波羅の政務を引繼いで、京都の行政權を握り、他方鎌倉幕府の後を承けて其政治を執り行ひ、關東の人心を收攬してゐた。加ふるに、彼れは源氏の裔として天下武人の首長と仰がれ、諸大名悉く其配下に立たんことを希ひ、却つて親政を